

98  
218

天行 西内藤男 著

# 新時代の曙光

東京 警醒社書店





新時代の曙光

明治  
38 11 22  
内交



## 卷頭之辭

予は新福音主義を標榜する、日本組合教會の無名の少壯傳道者にして、既往數年間の經驗は、斯教の開祖イエスが、猶太建國の理想を發揮せられたる如く、我邦建國の理想を闡明して、其理想の國民を養成するにある事を信ずるに到れり。その理想の輝きや乃ち新時代の曙光なり。少壯獅子吼者の熱誠は、あゝ此曙光の一閃にあらずして何ぞや。敢て江湖の高教を仰ぐと云爾。



元寇の波濤永久に響く  
支海の邊りにて

征露第二年紀元節の當日記す

天行 西内 藤男

献

學生青年諸君座右

目次

第一章	國民的自覺問題……………	一頁
第二章	世界主義の日本……………	八頁
第三章	日露勝敗の原理……………	二十三頁
第四章	國民的ニ大國是と個人的自覺……………	三十四頁
第五章	萬古の心胸を開拓せよ……………	五十三頁
第六章	偉人の理想と國家の理想……………	七十四頁
第七章	豊富にして永遠なる精神的生命の帝國……………	九十一頁
第八章	理想的新日本民族主義……………	百十一頁
第九章	神聖帝國の建設……………	百三十二頁
第十章	奮闘の黄金時代……………	百六十三頁



# 新時代の曙光

天 行 西 内 藤 男 著

## 第壹章 國民的自覺問題 (緒論)

今や國運發展の時機に際し、『世界の日本』始て事實に産れ出とす。彼は曾て極東の日本を以て目せられ、漸く進むで亞細亞大陸の日本たるに過ぎりしと雖も、今や世界の大勢を左右し、人文發展史に新生面を招かむとし、列國の均勢を堅實にし、その實力は優に世界列強を凌ひて、一個巨大なる發言權を有する大日本帝國たるに到る。彼は今や有史以來空前の大飛躍を試みむとするに際し、更に空前の覺悟なかる可らず。この空前の覺悟は國家公衆の最大自覺より來るもの也。彼は今や無窮久遠の國民的立脚地を造らむが爲に、偉大なる難問題に遭遇しつゝある也。この難問題は嘗て埃及、アッスリヤに提供せられ、再び大羅馬に提供せられ、而して渠等は無殘にも之を解決する健腦活識なくして大失敗を試みた



るもの也。

然れども現時の英米獨佛の如きは、或はクロンウエルの理想と意志によつて、或は南北戦争の活劇によつて、或は一世那翁の來襲によつて、或は小那翁の小説的飛躍とその蹉跌によつて、主客兩觀の狀態は異なりと雖も、一大難問題を提供せられて、之を悉く解決したるもの也。今日渠等か四大列強として宇内の大勢を指導し、之を左右しつゝあるは、渠等の中に雄渾絶倫の一大勢力が實在しつゝありしが故に、この難問題を解決して餘裕綽々として國運の發展を遂げつゝある所以也。余輩は懐ふに運命の祝福によりて一時國運隆々として振起するも、斯の如きは決して頼むに足らざると共に、縦や一敗地に塗れるも幸非兩運を指導する一大勢力の國民の胸中に實在せば、斷じて憂るに足らざるを信するもの也。埃及羅馬に曾て幸運に乗じて勃興したれども、運命以上に超然脱然として之を支配するに足る最大自覺を有せざりしが故に、竟に史家をして滅亡の悲歌を歌ふに到らしめ。我帝國は既に東洋の新興國を以て目せられ、既に世界の日本たる國際的地位を開拓するに到れり。雖も、かの日露戦争の大勝利たるや、これ運命の神の恩賜なるか、果た自覺と實力の結果なるか、千古の難問題は茲に依然として提供せられつゝある也。若し今回の勝利が運命の神の祝福ならむが、これ他力の結果にして自力の開拓にはあらざる也。我の實力にあらずして鬼神の祝福也。暴露の非文明、非人道、その憎む可き醜陋を打破し去り得る實力が、國民各自の胸中に實在するにあらずして、國民各自の自覺以上にあ

る不可思議力の左右する處也。斯の如きは眞に天佑と云ふ可く、鬼神の怪力と云ふ可く、不可思議力の勝利と云ふ可し。然れども余輩日本民族の精神使命とは殆むど何等の干係を有せざるもの也。これ實に超自然の作用に外ならず、寧ろ悲む可きの勝利也。運命の超自然的勢力に依りて大捷を博したるものは、他日悲惨なる運命の盲動に依りて大敗亡を試むる時あるを覺悟せざる可らず。運命に依りて勝てるものは亦運命に依りて敗るゝ也。元來運命は盲目なれば、運命を頼みとする國民は、これ埃及、アツスリヤ、羅馬等と同一の運命に陥る可き必然的國民也。エマロンは運命を以て上帝以外の恐る可き實在的勢力なりと認めぬ。これ寧ろ其裏面に於て其實在的勢力なる運命は、上帝に支配せらるゝものなることを、明白ならしむるものなりと謂はざる可らず。上帝は大なる智なり、大なる善なり、大なる意力なり、彼は宇宙の最大自覺也。彼の施設には主意あり、その經綸には目的あり、その自己に對すれば「我は在りて在るものなり」この絶對的靈覺也。この靈覺を宿す國民は自覺ある國民也。この經綸、この主意を體得したる國民は運命を支配する國民也。故に今日の國民は徒に戦勝に酔ふて酔歩漫跚す可き時にあらず戦勝の意義を深く考るゝと共に、我國同胞の最大自覺を警醒せざる可らざる也。幸に我邦は十年以前の日清交戦の時に比して、頗ぶる大國民の襟度に適ふものあるを視る。十年以前には我國民は未だ稚氣を脱する能ず、隨つて輕躁、浮薄、その熱奮は赤熱にしてその元氣は空元氣なりき。今回は夫に反し麻を着灰を被りて天意人道の爲に戦ふが如く、



亦恰も堂々たる大禮服を付けて時局に對するの襟度あり。随つて沈着、壯重、その熱情は白熱にして、その勇氣は眞勇に髣髴す。これ前者は勝利を獲れば償金、若くは土地割讓の利ありしに反し、今回は前途何等の利を見る能はざる故に、無意味の戦捷に徒に酔ふ能ざる所以なりとは、一種の評者の觀察なりと雖も、これ尤も淺薄なる俗人の側面觀なりと謂はざる可らず。日露戦争は決して遼東還附の吊合戦にはあらざる也。若し斯血戦が遺恨十年一劍を磨したる吊合戦ならむには、今日の國民は大禮服を附けたる堂々たる風采舉止にあらず、寧ろ喪服を付けて意氣憔悴せる憂人に均し。余輩は不幸にして如斯消極的なものと信する能ず。如斯悲觀的なものと信する能ず。如斯絶望的なものと信する能ず。終局後攫取する利益なしと云ふが如きは、これ吊合戦と同一視したる俗人の俗見なれば也。世上一般の識者と共に、余輩の見處に依れば「文明を平和に需めむ」とするに存す。更に此意義を分解すれば、東洋に於ける眞文明の發達と共に、露國の内治外交の方針を改漸するに存す。東洋の文化眞に健全なる發達をなすにあらざれば、純粹の平和は來らざる也。露國が内治外交の大方針を一新するにあらざれば、眞の平和と文明とは産れざる也。されば日露交戦の大主眼は吊合戦の如き、復仇的血戦にあらず、眞文明の發揮と永遠の平和のため也。故にその態度は積極的、樂天的、近世的なり。渠は堂々として大禮服を付けて時局に對する也。渠は茲に於て大なる責任あるを感じ始めぬ。責任を感じ始めた時は、これ大なる自覺に向ひつゝある時也。渠は露國の獨裁專制政治なるに對し

て、立憲君主政體なるを知れり。彼には信教自由の特權なきに我には既に廿年前に於て憲法が證認したるを知れり。彼には言論の自由なきに我には既に保證せられあるを知れり。彼には出版の自由なきに我には既に存するを知れり。彼の宮庭は宛然古代の奸臣權を弄する戯曲的惡宮庭なるに、我のは近世的、秩序的にして改進的飛躍的なるを知れり。彼は國家家の興廢、戦争の勝敗に就て、直に皇天の佑助を乞はむとするに、我のは國家存在の理想と、實力如何を内に顧みるにあるを知れり。彼は地理的膨脹の爲に戦ふに、我は隣邦の獨立と東洋の平和の爲なるを知れり。斯の如く彼我對照し來れば回向院に於ける大砲と太刀山との相撲の如し。彼は老大なれども我は新進なり。彼は魯鈍なれども我は俊捷なり。彼の前途は産れ代らざればゼロなり。我の未來は飛龍冲天の概あり。舊露西亞の將來は暗黒のみ。新日本の彼岸は光明赫々たり。これ到底眞の相撲にはならざる也。然れども新日本帝國も今や無量の鮮血を流しつゝあり、此血や何を獲むが爲に流されつゝありや、渠は大なるもの、高きもの、深きもの、永遠無窮絶大のものを産まむがため也。渠は既に舊露國の敵にあらず、對手にあらざるを認識しぬ。然れどもこれ現在のことなり。五十年の未來は如何、百年の將來は如何、千年の彼岸は如何、萬年の理想は如何、古き露國は既に滅びぬ。新なる露國は産れむとして煩悶苦闘するにあらずや。今回の交戦は我に大なる理想と大なる自覺を産出せしむると共に、敗亡の結果は彼の内治外交に新局面を開



かして、新露國を産出せしむる因縁となるやも未だ知る可らず、舊露滅びて新露起り來らむか、日露の優劣は那邊に存すと成すか。彼、我に勝りて今日の敗亡を他日挽回するに到るや瞭々乎たり。若しそれ斯の如くならむか、我の問題は富國強兵の大設備と共に、その富と武とを眞に支配し訓練し得る最大自覺と最大理想の有無高低如何に存すると明白也。讀者よ、余輩の有する現在の自覺の内容は如何なるものぞ。亦將に産れむとする自覺の内容は果して如何、大なる自覺なきに大なる理想の生ずるものにあらず、理想は自覺の中に存するものなれば也。

現代の文明批評家は評して煩悶の時代なりと云ふ、煩悶は自覺の急先鋒なり。大なる煩悶の後には必らず大なる自覺來る。若し果して今の世、今の時が眞に深き大なる煩悶の爲に苦闘するものとせば、余輩は眞面目に祝杯を擧ることを辭せざる可し。然れども斯る大煩悶が今の世に存するやは慥に疑問なり。數名の青年が華嚴瀑中に投じ、淺間山の噴火口に投じたればとて、直に煩悶の時代とは評し得可らず。渠等は戀に破れて煩悶して死し、生活問題の困難に遭ふて死す。死は寧ろ安心なり、平和なり、何となれば死は暗黒に降服したるもの也。自殺の捕虜となれるもの也。煩悶に負けて死する死は詩的に觀察すれば、悲劇美の絶頂の如く思惟せらるれども、精神的に批評すれば暗黒醜あるのみ。若し醜の中に美ありとすれば渠等の自殺は醜的美のみ。自殺は思想界激戦の戦死とも謂ひ得れども、智と意の賢

明を缺けるが故に、暗黒に降服したるものとも謂ひ得可し。死も角も自殺は一種の降服也。捕虜也。余輩は茲に於て大なる煩悶は奮闘して切り貫ける勇者の中に存することを認むるもの也。斯る勇者はその勇者たることを知らざるもの也。知らざれども彼は偉大なる勇者也。而して此勇者の經過したる煩悶は如何に大なるものなるやを想像し得可らざるもの也。故に大なる煩悶は死に向ふところに存せず、生命力と煩悶力が電光石火の如く大奮闘を試みて、之に全勝を博せる處に存することを信せざる能ず。疑問中に捲き込まれ、戀愛に捲き込まれ、春情に捲き込まれて、自殺し、失望し、墮落するに對し、悉く奮闘して全勝を博する其苦と樂とを相對して批評しなば、勝利者が經過したる苦心こそ眞に絶大にして、共に比較す可らざるものと思はる。余輩は今の世の煩悶が斯の如き煩悶ならむには、眞に大の字を附するに足ることを信すと雖も、斯る大煩悶が今の世に存するや否やは疑問也。若し斯る大煩悶を有せざる國民ならむか、不幸にして悲む可き自滅の國民也。大煩悶なきに大奮闘は來らず、大奮闘なきに大自覺は來らず、大自覺なきに大理想は來らず、大理想なきに大國民は來らず、大國民なきに大國家は來らざるべき也。されば大に煩悶せよ、而して大に戦ふ可し、大に戦へ、而して大に自覺す可し。自覺は理想の母にして、理想は大國民の父なれば也。



第二章 幼稚なる世界主義の日本と内容ある  
世界主義の日本

八

日露戦争は洋の東西に亘れる大戦争にして、従つて戦争の内容は世界的たらざるを得ず。然れども翻つて懐ふに我民族の世界的大戦闘は、今回の日露戦争を以て嚆矢となすものにて、其以前には斯る大戦闘を見ざりしや否やは儘に研究す可き疑問に屬す、余輩は其然らざることを確信するもの也。今より二千六百年前の建國當時に溯りて之を考るに、九州の一角に現はれたる天孫人種の首領神武は、當時の世界主義の權化たりしを知らざる可らず。彼は其時代の高等人種を代表し、優等文明を代表し、その武と勇とは世界的大抱負を行ふの手段方策なりき。

彼は日向より進むで出雲を征服し、竟に大和の橿原に朝廷の基を開くまで、驚天動地の大活動は如何なる意味にて試みられたるか、その已むに已まれざる世界的精神の爲に、縦に思想上の飛躍を試むるに先ち、横に地理的膨脹を目的として大征服者たるに到れるもの也。彼は當時に於ける西力東漸の先驅者なりき。時代精神の權化なりき。小なる日本帝國の開拓者は實は大なる世界的精神の寵兒たりき。斯の如き偉大なる人格に依りて建設せられ

むとする日本帝國は、随つて世界的大精神を以て建國の大主眼と爲さざる可らず。次で興れる日本武尊は神武の遺志たる此精神を繼承したるもの也。彼は東北を征服すると共に九州征伐を試み、豊葦原の瑞穂國は茲に其勢力範圍を確定し、地理的膨脹は一段落を告げたるもの也。

然り一段落を告げたりと雖も、地理的膨脹の理想の上に現はれたる世界的精神の活動は、容易に斯の如きを以て満足する能はざる也。而して此世界的精神の殺爽たる遺風と血液とは、女流の俊傑神后皇后を崛起せしめ、三韓遠征の途に就かしむるに到る、之を以て想像するに神武以來我皇室の方針が、常に積極的活動的進取的奮闘的膨脹的にして、平地に波瀾を起さむとし、太平洋に颶風を吹かしめむとする如き、活動的氣力の縦横に發揮せられたるを見る也。然るに時勢の變遷推移は活動の中心なる皇室の文武兩權をして、將來崛起し來る閩族の掌中に歸せしめ、再轉して武門武士の手に歸するや、建國前後に於ける我皇室の積極的國土膨脹主義は、武門武士の胸中に扶植せられて、鬱勃たる大勢力となるに到れり。其尤も巨大なる産物は豊臣秀吉なりと謂はざる可らず、彼の一大飛躍は建國當時の理想の一端を復活したる者にて、地理的膨脹の理想は彼に依て新なる生命と新なる勇氣とを獲て、天地を震撼する底の大遠征となりぬ。彼は死せる地理的膨脹の理想に生命を與へて復活せ

九



しめたる點に於て、形骸とその境遇とを異にしたる神武の再現なり。茲に於て殆むと千有餘年間垂死の状態に髣髴たりし理想は、更に大に發展飛動し來りて抱負あり、氣骨あり、豪氣ある一代の英雄俊傑をして鼓舞作興せしむるに到る。薩摩の島津公が琉球諸島を併呑し、山田長政が南洋諸島を畧取せんとし、仙臺の獨眼龍が羅馬に使者を送りて、天下の人心を驚動せしめたる杯、地理的膨脹主義の復活したる結果に外ならず、然るに此漫々たる冲天の大覇心を抑壓して死に到らしめむとせるものは、徳川三百年の消極的鎖國政策なりしと雖も、世界列強の白日赫々たる間に介在して獨り日本民族のみ暗室生活を送らむとするも、之れ千古の愚策のみ。滔々たる天下の活勢力は此鎖國的籠城政策を打破し去りて、新日本の曙光燦然として東天に輝き出るや、再び地理的膨脹の理想は復活して樺太問題を生じ、征韓論の大破裂となり、次で征清の大捷となり、今の所謂日露の大交戦大捷利となる。

然らば世界主義の日本は單に我邦有史以來の地理的膨脹の理想に顯現せるのみなるか。否、否然らず、寧ろ世界的氣魄の盛に發動したる方面は、國土膨脹の理想と共に思想精神の積極的開放主義に在りき。記憶す可きは神后皇后の三韓大遠征にして、此壯舉は固より地理的膨脹主義の活動に外ならざれども、亦思想生活の上に一種の世界的活動を意味せしめぬ。

此遠征以後我民族の生活状態は一新生面を拓かむとすと共に、皇后が征韓土産として掠取し來れるものは、支那文化の精粹たる典籍にして、當時に於ける亞細亞大陸の「亞善」たる中華の政治法律の思想は始て輸入せられたるもの也。是までは我民族の宗教は天地鬼神を拜するに在り、その哲學は天災地變に恐怖して大國主の遺靈の祟りとなし、遂に之を神として祭ると云ふが如きものなりき。而して皇后は其時代の人魂鬼神を禮拜する宗教に尤も熱心渴仰したるもの也。三韓遠征は其宗教信仰の感激より來りぬ。恰も皇后は小チャンダクに髣髴す。此空想的にしてローマンチカルなる皇后に依りて。思想發展の新紀元を開かるゝに到りては、將に大に特筆するの價值あり。殊に應仁の十五年には既に發展したる民族の世界的思潮に乗じて、皇子菟道のわかいらつこは百濟王其臣あちきをして良馬二匹を獻せしめたるを優待し、彼が支那典籍に通ずるを幸ひ、之を師として講習す。其講習を受けたるものは皇后征韓の際、齎し來れるものなりき。あちきは更に博士わにを朝廷に薦め、わに亦論語十卷千字文一卷を獻す。是より東洋「亞善」の倫理哲學の滔々として我邦に輸入せられたる有様は、希臘のソクラテース、プレトリーの倫理哲學が洪河の勢を以て羅馬に輸入したるに酷似したりき。降つて欽明の十三年には百濟聖明王が黃金釋迦像に、幡蓋經論を添へて奉獻し、茲に人生を無明と觀する厭世哲學と、家庭、人情以外に超然とし



て山林生活を理想する出世間的宗教趣味とは、實際的にして經世的なる儒教の倫理哲學と相俟つて、主觀世界の發展を見るに到れるもの也。然れども是等の二大思想の輸入によりて、進化發展したる我邦の思想界は、亞細亞大陸の大思潮に觸着したるに過ずして、従つて東洋的とは評し得れども、未だ以て世界的とは評し得ざるもの也。然るに一躍して泰西の大思潮に接觸するに到らしめたるものは、戰國時代に渡來せるゼシウィット派の豪僧ザヴェーナリキ。彼は信仰の熱情に軍人肌の意氣を以てし、亞細亞大陸の精神的征服を試みむとするチャンピオン也。彼は先づ九州の雄鎮大内義隆を歸依せしめ、遂に京師にまで及びたりと雖も、彼は今日に到るまで何等の哲學、何等の信仰、何等の宗教的眞味を残さず、唯意志強き征服的豪僧として想像せらるゝに過ず、故に彼に依つて我民が大なる開發、啓蒙を受けたるとは殆むと全く見る可らず。唯彼は羅馬教會の世界統一的意志の先驅として、萬里の波濤を開拓したるに外ならざる也。分量の上より見れば其事業に多少の成功あらむと雖も、實質の上より見れば空の空なりしを知るに足る。殊に將來に現はれ來る西葡兩國の我邦に向つての外交的權變の結果は、彼の分量の成功をすら竟に破滅に歸せしむるに到る。夫れより數百年間は消極的暗室籠居時代に陥りたりと雖も、國民長夜の秋眠より醒めたる時は、蘭學は既に盛行はれ、基督新教は既に傳道を開始せんとし、世界文化の大勢は

滔々として我花彩島の岸を洗ひ、復活の曙光は浦賀阜頭の砲聲に破られて、東天紅を潮するに到りぬ。之れ明に過去二千五百年間の世界主義の日本を示すものにあらずや。然れども過去は既に死せる歴史なり。新なる歴史は未來に開かれざる可らず。我國民は果して未來の光榮ある新歴史を、織成し得る程の生命ある國民なるや、暫らく過去の國民的<sup>生命を</sup>檢せざる可らず。既に余輩は我邦既往の歴史に於て、幼稚なる世界主義の日本を見たりと雖も、其世界主義たるや單に地理的膨脹の如き、亦は思想上の門戶開放に現はれたるのみにて、我帝國の世界に對する根本的主張は如何なるものなるか。世界主義に伴ふその内容、若くは理想に到つては何等の捕促す可きものあるを見ず。地理的膨脹は我邦少年時代の理想としては、その穉氣多きところ頗ぶる興味ありと雖も、未來永遠の理想たる可きものにあらず、思想上の門戶開放の如き別言すれば、一種の詰込主義に過ず、田舎料理の五目飯は都人の胃腑を害すること多し。恁る思想上の滿腹主義は斷じて將來の理想にはあらず。然るに茲に大に注意す可きは、對外的國土膨脹運動は殆むと見る可き成功なきに、思想上の滿腹主義は日本民族の剛健なる胃腑によりて悉く之を消化し、國民的<sup>生命の</sup>源泉となせるは歴史上掩ふ可らざる事實也。之れ皇天が我民族を教ゆる絶大なる訓誡なりと謂ふ可きか。試みに見よ神后の三韓征服は今日何の見る可きものありや、秀吉の大遠征



は今日何を語りつゝありや、山田長政のサイアムは依然として我領土にあらず、樺太は依然として我有にあらず、遼東半島は三國干涉の爲に還附す。唯琉球と松前の如き我恩恵に浴するのみ也。獨眼龍の圖南の大政策竟に何等の飛躍を見る能はず、國史に現はれたる地理的膨脹の活動は、多大の軍費、多大の生命、多大の勢力、多大の時間を犠牲として、而して獲たるものは國民的虚榮心の頼むに足らざることを示すに外ならず、封建時代の國民的虚榮心は多く武人によつて代表せらる。渠等は戦勝と征服とを以て生命とするもの也。渠等は切捨御免の特許を有するのみならず、更に切取御免の不文律をも有する也。而して此切取御免の不文律は多く地理的膨脹を意味し、土地侵畧を意味す。故に切取るの勇なきものは武人の資格を有せざるもの也、國民的虚榮心を満足するに足らざる也。然るに渠等の此切取切盜的飛躍活動は、悉く失敗、悉く水泡に歸したるを見るに過ず。渠等の馬蹄を印したる天涯地角は強者共の夢の跡を語るに外ならず、哲學なき武人の事業、宗教なき優者の事蹟は、達人が自家胸中に開拓する無限悠窮の天地に比す可くもあらず。余輩は神武の事業に相對して猶太國の建設者モーゼの事蹟を想像する時に、一種謂ふ可らざる感興の伴ふものなくむばあらず、彼は今日に於ては既に悲む可き亡國の建設者也。彼が足跡を印したるヒスカの山河今何處にかある。彼が遙に望み見たる蜜と葡萄汁の河の如く流れ出るカナンカナンの樂園今果た何處に之を望まむ。然れども彼が巨大なる頭腦に畫きたる高遠なる宇宙は、

幾多の變遷と進化とを経て世界人類の清く高き靈界に建設せられつゝあるを見る也。彼が一身を靖献したる猶太國建設の事業は、既に業に夢の如く雲散霧消して史上の談柄に過すも、彼の人格と理想とは無法の光明を放ちつゝある也。尙ほ此事に就ては後章に於て論ずる處あらむと雖も、余輩は未だ神武の大人格と大理想を認むる能はざるは、千古の恨事となす處なれども、彼は建國の理想を一種の繼語として國民の發達に一任し其解釋を残したるは、余輩の信じて疑ふ能はざる處なり。明にその理想なりしならむと想像せらるゝものは、地理的膨脹の活動にして、地理以上の膨脹侵畧に到つては夢にだも知らざるものゝ如し。然るに神武の想像だも爲す能はざりし思想精神倫理宗教の形而上の世界は、應仁欽明の朝より新紀元を拓き、鎌倉、徳川の時代に到りて空前の大發展を見るに到る。之れ余輩の所謂思索的滿腹主義の大成功と稱するものにて、幾多の時間、幾多の勞力、幾多の苦心を経て地理的膨脹に勝る大成功を爲せるもの也。極東帝國の内容は將に茲に存するもの也。而して斯る内容の培養は地理的膨脹の如き、國家的活動の結果にあらず、實に偉大なる個人の事業なり。偉大なる個性は固より國家を愛す、然れども國家のみを以て束縛せんには、あまりに強大に過たり。殊に國家の活動は夫れ自身に於て盲目なることあり、故に偉大なる個性の指導、開發、識見光明を要するもの也。懐ふに國家よりも偉大なる個性にして始めて國家を偉大ならしむるを得、國家以上の識見光明ありて始めて國家を地上の天國たらしむるを得る也。余輩は高僧空海の心腸の中に宇宙大なる靈覺の泉を有し、快僧日蓮の膽識に國家



の運命を指導する精力を有し、聖僧親鸞の胸臆に國家を潤すの愛涙を有したるを識認せざる能はず、渠等は國家よりも大なるものを得むとして、國家的俗念を脱却したるもの也。渠等は自家有限の生命を唾棄し、兒戯に類する權利を唾棄し、塵芥に均しき財産を唾棄し、超然脱然風塵以外の山林生活に入れるもの也。渠は紐ふに國威發揚の美服を有せず、揮ふに閃光燦然たる劍戟を有せず、奪ふに西隣善邦の賊す可きものを有せざる也。然れども世界に生存する徳光の同胞は、彼が一身を靖献したる愛人なり。無限悠久の大宇宙は彼の征服したる領地なり。胸中不滅の樂園は地上の武勇國、俗人國と絶縁したる報酬なり。空海の跋渉したる山河の足跡は、南北兩朝の時代は推移し、神后皇后の遺業は空に歸するも、依然として崇高雄大なる人格の鳴響を残すを見、日蓮の大獅子吼は鎌倉幕府の衰亡の外、頼朝の靈性、公曉の悲劇を超越して、その猛烈なる人格と共に山嶽を鳴動せしむるものあるを見、法然、親鸞が平民の友となり、胸に萬斛の愛涙を湛へて、同胞救済の大主眼を全ふしたるを見れば、茲に不滅の生命は存するものなり、而して渠等は宇宙の人たり、世界の人たると共に、徹頭徹尾日本人なり。日本民族の明星なり。渠は日本あるを知りて世界あるを知らず、國土膨脹あるを知りて宇宙あるを知らざる如き、豆の如き眼界、虫の如き胸襟を有する小人にあらず、渠等は其人格と思想に於て高大なる日本民族なるが如く、國家の思想と品格をして永遠無窮の生命あらしめむとするもの也。別言すれば渠等は眞に宇宙を愛するの人たり、世界を愛するの人たるが故に、自國を愛せざるを得ざるものある也。此愛心は亦直に國家の生命なり。世界、宇宙の生命なり。渠等は何が故に支那傳來の哲學と宗教とを以て満足せず、更に新生面を開拓して自己の生命たらしめしか。之れ實に不知不識の中に宇宙と世界と國家とに對して、自己の大なる使命の存するこ

さを知れるが故也。これ渠等が天地と自然に默契したる使命に對する自覺とも謂ふ可し。大なる自覺は愛の心と共に自己の生命なると同時に國家宇宙の生命なり。大なる國家は此愛と自覺の中に存し、大なる世界、大なる宇宙は亦將に此愛と自覺の中に宿る。宇宙の生命たり世界人類の生命たるものにして、始て國家の生命たり得るもの也。何となれば國家は世界と共に存し、宇宙と共に存せざる可らず、國家は斷じて宇宙と世界を離れて存するものにあらざる也。是を離れたる時は國家の自滅する時也。國家は世界と宇宙に其存在の理由を失ふたる時也。渠等は實に此愛と自覺に依りて國民的生命的源頭を發揮したるもの也。思想的滿腹主義を成功ならしめたる消化力は、此國民的大生命なりと謂ふ可きか。

降つて徳川時代に到らむか、漸く儒佛の争鬭起り來るのみならず、儒林相互の伐異を生ずるに到れりと雖も、これ鎌倉時代に崛起したる厭世的軟文學の巨首、僧西行が哀々の悲調に無限の痛恨を歌へる滔々たる厭世的超越思想に反動して、法鼓を打つて呐喊したる日蓮、眞俗二諦の實際的救済の福音を唱導せる親鸞等の、佛教革新の大運動よりも更に興味ある自由討究的精神の大發展なりと謂はざる可らず。日本民族の天空海淵にして凡ての新思想、新潮流を吞吐すると共に、信條的繼承を重しとする正統派の信仰教説に満足する能はずして、自由なる思想、自由なる解釋を望みたるは、渠等の特色なりと謂はざる可らず。家康當時の大儒藤原屋富の如きは佛門より出で儒學の一派を主唱するに到りぬ。佛教は之に依りて淺少ならざる打撃を受けたり。而も一代の英俊山崎闇齋の如きは、佛門より出で儒に歸



し、儒を脱して神道に歸したるを見れば、藤原が佛教の活力を否認したるよりも、更に英氣堂々として佛と共に儒を否認し、神道を高調して國民的生命は茲に存す可い處、風姿殺爽たるものありと謂はざる可らず。清高博大なる伊藤仁齋、深遠靈脫なる近江聖人、而して渠等の流を汲める東涯、蕃山の徒、俱に此思想界發展の新機運に乗じて現れ來れるチヤンピオン也。渠等は新なる機運の產物なると共に、西力東漸の大勢に願使せられて、思想信仰の奴隸的盲從に満足する能はず、内に潑爽たる新生命の湧瀆すると共に、外に新なる形式を採りて現はれずむば、自家胸中の満足を買ふ能はざるを知れり。眞理は常に自由を與ふるのみならず、生命は更に眞理に勝る自由を與ふることを認めざる可からず。鶴ヶ岡に於ける歌姫靜の大彈劾的舞蹈に、顔色を失ひし弱者頼朝の偉業は朽ち、地上に波瀾を起して天下を騒亂したる快心の奇傑足利尊氏の霸業は亡び、後世子孫の爲に福田を購はむとしたる大なるに似て小なる英雄家康の志望經營、漸く根底に危機を醸さむとする、憐む可き多數英雄と其事業とに向つて、不滅の意義と萬世一貫の原理とを與へむとして、脱越せる胸中漫々たる憂心を湛へたるは、余等の以て竊に哲人の心事として敬服を惜まざる所以也。世の英雄は常に砂上に家を建むとするもの也。無限絶對の基礎は渠等の眼中に措かざる處也。渠等の事業は空を打つ石の礫の如く、漸く進むで水面に波紋を描かむとして投じたる瓦片の如し。然るに哲人は何人も依頼せず、哀願せざるに其礎と瓦片の中に不朽と無限を宿さむとして、自己の識見と自己の生涯とを貢獻する者也。渠は常に椽の下の力持なり。此

力持や大厦高樓の柱石に等し。渠は報酬や、名利や、竹帛垂名の理想の爲に働くものにあらず。『無限』と『今』とを結合せんとして盡すもの也。渠の今は永久の今也。其今と云ふ瞬間の中には悠久の天地を宿すもの也。別言すれば渠等の今と云ふボデーシヨンの眞實なる時、渠自ら無限の活動たると共に其今は悠久の今也。渠等は椽の下の力持として時勢の背後に隠れ乍ら、英雄の脚下に現はれずして、其人格を修養し其識と量とを練磨するもの也。故に時に英雄の脚底と時勢の一端とは、此隠れて現はれざる哲人の間に破壊せらるゝことあるは、奈何とする能はざる處也。此破壊なくむば時勢と英雄の事業とは、永遠不朽の意味を有せざるものとなる也。哲人の破壊は渠等の救済なることを知らざる可らず。暗雲を破りて閃きたる妖星徂徠の如きすら、怪奇なる哲人の襟度に不朽の血液を湛へて、時勢と英雄の事業を救済したるもの、甚だ大なることを知らざる可らず。清霜を照す明星の如き新井白石に到りては、其人格と批評眼と堅忍の意志とは、徳川三百年間の一大光彩なりと謂ふ可きか。近松門左衛門、季吟、芭蕉の徒と雖も、人生を研究し批評したる哲人の吟詠を有したるものにて、或意味に於ては家康の事業よりも近松、芭蕉の生涯と事業が、不朽と絶對の價値を有するもの也。要するに儒と佛との反目の如き、哲人の崛起、自由討究的精神の勃興の如き、偉大なる國民的生命の發展、浮動を示すに外ならず、我國民的生命は其内容決して單純なるものにあらず、彼は無限の冷靜を有し無限の勇氣を有し無限の活力を有し無限の靈智を有す。否、寧ろ彼は無限の冷靜、無限の勇氣、無限の活力、無限の靈智夫れ自身なり。彼の發動する處國家世界宇宙の三大局面を吞吐するの概あり。茲に於てか余輩は懷ふ、歴代の英雄、累世の哲人、其大小高低深淺廣狹を問はず、皆國民的生命の一端を代表したるものとは想像し得れども決して百分の一をも實現したる者にあらず、



一最澄、一日蓮、一闍黎、一藤樹等に依りて悉く我國民的生命を代表し得たるものとし、神武、神后、秀吉、時宗の如きに依りて其大部分を實現し得たるものと謂はじ、これ廣瀬中佐を軍神と祭る明治聖代の愚民の批評觀察と同一のものに過す。我邦武勇の眞意義は一廣瀬中佐に依りて盡るものにあらざる如く、既往の英雄哲人の心事膽氣を以て我國民的生命を實現し盡し得たるものにあらざる也。

然れども時勢の潮流と偉大なる個性とは、建國當時に投ぜられたる「理想」の謎語をして、愈々増々明白ならしむるものあり。國民的生命は時代の理想、個人の信仰を貫ぬひて其一端を顯現す。渠は限り無き歴史の發展に依りて解せらる可きもの也。而して此國民的生命は將來如何なる形態を以て現はれ來りたるか、渠は先づ皇帝以外の霸王たる徳川將軍の地位を、根底より轉覆せんとする王霸辨論の尊王の哲學となりて先驅をなせり。二千三百年間發展し來れる辭執たる生命は、清水の音羽の瀧より一轉して華嚴の大瀑布たらむとし、空前絶後の大飛躍、大廻轉、震天撼地の大刷新、大革命、靈光燦然たる新天地、新宇宙を實現せんとして、新なる時代と新なる機運の序幕を開きたり。武内式部、山縣大貳の如きは曉天の流星の如し。其流るゝや清爽を覺へしむるものあり。夜は既に明けむとし氣は既に新なり。松平定信の自由思想に對する統一的大政策ありと雖も、自由思想の中に發展したる國民的生命が、更に尊王的哲學となりて時代の潮流を造らむとしたるは、之れ國民の根底あり教養ある自然の結果なりと謂はざる可らず。自由思想と尊王的精神とは殆むど氷炭相容れざる如きも、當時の覇者の統一的政治を打破せんとする革命の思想は、統一政策に相對する

自由思想の産物にして、尊王の精神は此革命思想のオーソリチーとなりしもの也。之れ眞に恐る可き思想の根源なりと謂ふ可きか。天下の形勢は漸く覇者の覇業と、極端なる統一政策、擲俗政治家の小刀細工とに嫌厭し始め、人心の根底を横流せる不穩の情熱は、幡隨院長兵衛の如き弱を助け強を挫く俠客的精神の權化となり、亦是地方農民の專横なる藩主に對する竹鎗蓆旗的示威運動となるに到る。寶曆八年美濃郡上城主金森兵部の治政に服せず、暴徒蜂起を見るに及びたるは將に一般の平民が自己の存在を自覺し始めたる前兆にして、官學に對する自由思想、覇者に對する尊王的精神の感發と共に、眼中王侯貴人なき俠客、治者の專横を弾劾せんとする平民、これ纏て一種の民主思想の發達を代表せるもの云ふべき也。斯の如く既に内部に醗酵しつゝある時勢の潮流は、更に外部の刺撃を受けて最大發展者を要むるの已む可らざるものあるに到る。開國交通の思想は則ちそれ也。此思想は國運發展の時機を畫するに尤も大なる根本的勢力なりき。王政維新の大變革は斯の如き幾多の思潮が相合して万丈の大光輝となりたる者なり。國民的生命は此時に於て空前絶後の大飛躍を試み、建國の理想は一段の發展を遂げむこしたり。則ち民衆政治の思想は此時に明白となり、尊王の精神は絶頂に達し、人類交通の感念は國民を支配する感情となり。國民的膨脹の氣概は此時に於て猛烈を加へたり。以後廿七年間光彩絢爛を極むる國史の潤色は、維新當時の大思想を着々實現するに外ならざる也。茲に於てか識る建國時代の世界主義は甚だ幼稚なるものにして、語







を聴く、譬へば獨佛の如きは露國裏面の二大勢力として、彼我の國民的情感好く疏通せる結果は、露國に向つて多大の同情を表すと雖も、交戰國一方の優勝者なる日本の同情國英米兩國の如きは、非基督教國なりと評論するもの多し。同情は國際的情義の尤も尊重すべき處のもの也。然れども其同情の結果徒に醜を掩はむとするか如きは、文明國民の態度として洵に嫌厭す可きことに屬す。同情は醜を掩ふと雖も醜を改悔せしむる能はず。彼は醜を轉じて美となすこと能はず。若し美を見ゆるものあるも开は同情者の眼球に映じたるものに過すして、決して健全なる美にはあらず。近世の文明は批評の文明なることを認めざる可らず。批評は人類の救濟なり。批評は人文の發達なり。批評は國民生活の向上なり。而して此の批評は眞に健全なる同情の産物なり。詩人の人生を批評するは人生を救はむが爲なり。文明批評家の人文を批評するは其衷に救濟の意味を有す。獨佛兩國評家の露に對する態度は所謂最負の引き倒しに似たるものあり。其同情や決して向上進歩の救濟力を藏するものにあらず、腐敗の辯護、醜態を掩蔽するに過ぎず。之れ痴人の同情なり、賣春婦の情夫の醜を掩ふが如き同情なり。否寧ろ同情と云ふ程の價值あり意義あるものにあらずる可し。歴史的干係よりして辯護士が報酬を目的として辯護するが如き同情に過す。然るに英米兩國の評者は一代の預言者指導者を以て任ずる文明批評家也。世界に於ける批評家としての位地は、一國の首相の勢力を凌駕して、文壇の世界的霸王たる權威を誇るステッド氏を始め、大統領ルーズベルト氏と併立して優に言論を以て世界に君臨せるライマン、アボット氏の如き、渠等は公平無私なる人道主義の立場にありて、露國の非基督教國たることを證明するもの也。而して此批評は獨佛兩國と雖も事實に於て認むるものなり。渠等は始め日本を嘲罵したりと雖も後には稱賛するに吝なる能はずなりぬ。然らば露國の非基督教的態度は多く如何なる方面に現はれるやと云ふに、個人としての國民にはあらず、政府の内治外交の方針、殊に多く内治の國是に非基督教的精神を認むるもの也。世界は此四五百年間に實に長足の進歩をなせるに反し、彼は獨り世界思潮の外に立ちてスラボフ井リイズムを固持し、依然として中世紀時代の夢を害ふことなく、脚底には既に滔々として新思潮の漲るものあるに拘らず、半身不隨の中風患者の如く凜冽たる新思潮の泉中に双脚の没せるを知らず、其頭腦は超進歩主義、超時代主義、超革新主義の空想に耽りて六七世紀以前の夢を描きつゝあるもの也。合理的進取的ならざる信仰萬能の宗教は、此夢を描き此空想に耽溺せしむる尤も有力なる補助者たり。保守的政治思想と退嬰的の宗教思想とは相提現して人文の發達を阻害し、人類の幸福を滅殺したること多大なるは掩ふ可らざる史乘の事實也。

『猶太人は過日も爾を石にて撃たむとせしにあらずや』と使徒等の注意を受けたる基督時代の猶太國を始め、我に蘇格蘭土を興へよ然らざれば死を興へよと天父に熱禱を献げたるジョン、ノックス時代の佛國、ウオームスの薨が悉く悪魔となりて襲ふとも我往かむと喝破したるルーテル時代の日耳曼。これ皆頑迷固陋なる政治宗教の兩思想が相合して『夢の時代』『空想の世界』を實現しつゝありたる也。渠等の夢と空想とは麗しきに似て血を流



すことを厭はざる殘忍なるものなりき。此夢の爲に多くの人は血を流し、多くの人は焚かれ、多くの人は獄に投せられたり。夢は斯くして無窮に繼續せらる可しと迷想したらむと雖も、却つて渠等の流したる血と、焚きたる煙と、獄窓の過酷とは自己の夢を根底より覆す僭勢力となれり。實は偉大なる個人の苦む時は國家の苦痛を代表せる時にて、國家が既に大なる煩悶と苦痛に襲はれたる時也。然れども國家は自己の爲に煩悶し苦闘する義人を、夫と認めずして殺すものなれば、悲劇中の尤も大なる悲劇也。露國の如きは今や大なる煩悶、苦闘の時代也。獨裁的政治と專制的宗教とは相結合して、中世紀の政治宗教の夢に酔ひ、双脚を没しつゝある滔々たる新世紀の新思潮を顧みず、超然たる状態を粧ふもの也。此間の苦闘煩悶を自覺せるものは國家の精神生命たる偉大なる個人也、故に少數の偉大なる個人の中には進歩思想の流溢盛なるものありと雖も、未だ政治宗教の運命を支配する程の大勢力となる能はず、隨つて個人の中には神の内在を示して餘りありとするも、國家としての露國には神の内在を認むる能はず。神は少數個人の胸臆に隠れて政治宗教の新精神新生命とはならざる也。

彼は茲に於て土耳其を偲ばしめ、亦清國を想像せしむ。彼は甚だ支那的なり。尠くとも土耳其古的なり。彼は廿世紀の文明に遅るゝこと六七世紀なり。其皇帝は多感にして意志薄弱、

先帝の神聖同盟の提唱に倣ふて萬國平和會議を主唱したりと雖も、之れ憂鬱にして快澗の氣象を缺き、而も時に破天荒の空想を逞ふする詩歌的感情の激動に過す。彼、若し此詩歌的感情を行ふに衝天の豪氣を有せむか、其國家の運命は新局面を開拓するに到る可き也。彼は當時トルストイ翁を其草廬に訪ひぬ。平和會議は續ひて開かれぬ。然るに豪氣なく意志なき彼は列國使臣の有耶無耶の會議に一任して、山嶽鳴動漸く一疋の死鼠を見出したるに過す。彼は皇帝としての無能無力を世界に明瞭ならしめたり。彼は一回の小演説すら爲し能ず、皇帝たる小威信すら示すこと能はざりし也。彼は情緒あるを示すと雖も鐵腸を有せず、麗はしき空想を有すと雖も之を行ふの氣膽なし。トルストイ翁を訪ふたると列國を弄したる平和會議とは、ノンセンスに始まりてノンセンスに終りぬ。彼は眞に十九世紀掉尾の名譽ある詩人的空想皇帝の弱點を暴露して、人情と公義を道樂者の遊戲の如く愚弄し去れり、而して廿世紀の新舞臺の廻轉し來るや、彼が軍隊解除の大使徒、絶對的平和主義の親玉、絶對的愛國思想否認の優勝者たるト翁と握手せんとしたる其手と、甘き接吻をなせる其口とは、更にスラボフ非リイ主義の權化にして、自由思想に對する絶對的迫害者、露國無比の愛國者、祖國世界政策の擁護者、日露大開戰の熱心者、怪傑ポベドノスツエフと抱擁し接吻し、萬國平和會議に相對する日露開戰、滿韓併呑の勝利者たらむとするに到



二十八

る。余輩は此大なる矛盾、衝突、撞着の中に國家民心を疏通する二個の大なる思想の不調和を發見せざる能はず。一は詩聖ト翁を代表者となし、一はホ氏を代表者となすもの也。ニコラフ皇帝は理想に於てはト翁に賛同せざる可らず、而も現實に於てはホ氏を抱擁せざる可らず。内治外交の理想と現實の不調和は世界皇帝ニコラス陛下の明に示したるもの也。彼は此間に於て空前絶後の心理的悲劇を経過したるならむと想像す。彼はハムレットに勝る大々的悲劇の主人公也。彼の矛盾、彼の撞着は近世文明思想の矛盾撞着にして、誠眞、多涙の現皇帝は近世の學者思想家が心竊に感ずる處の苦悶を代表したるもの也。露國の尋常一樣の國家にあらず政體にあらざることは、皇帝上に在つて權を専らにすることを得る彼國に於ても、其意志を行ふ能はざるに見るも燎々たるものあり、然れども之れ別に怪む程のことにもあらず、先帝の老臣權を専らにすることも若し現皇帝にして千古を照破するの識見、千里獨往の猛烈なる雄心あらむには百の老臣、千の權臣あるも意とするに足らず、皇帝の所信は千鈞よりも重し、臣は帝の威信に服して之を行ふか、亦是帝と意見合はずして退けらるゝ迄也。然るに露國皇帝は此威信なく此雄心なく此識見なし、唯在るものは詩人的空想と煩悶するに適當なる憂鬱の弱性のみ。茲に於て露國は依然として中世紀時代を脱脚する能はず、皇帝上に在つて悲劇の主人公となり、ト翁下に在つて新帝國の開拓者たらむとすと雖も、帝は依然としてポペドノスツエフの掌中に現今の運命を握せられつゝあり。彼は内閣以外の一敵國なり、皇帝以外の無冠の帝王

なり、彼は皇帝の意志を左右し内閣大臣を左右するの實權を有す、斯の如きは『一妖婦の佛國を亡すあり、アルレアンAlreanの少女起つて之を救ふ』のチャンダーク幼年時代の佛國に髣髴とし、皇帝にあらずして皇帝以上の大權を有する西太后時代の支那に彷彿す。是れ近世思想を去る六七世紀以前の國狀也。

轉じて我邦を觀察せんか同胞個人の人格に到りては、頗ぶる絶望せざる可らざるものありと雖も、維新以來の國家の大方針は進歩活動の神意と直に相合するものあるを識認せざる能はず、余輩は今茲に別に言論、出版、參政、對外的方針の自由開放等に就て詳論するの必要なしと雖も、事實は詳論に勝りて沈黙の大雄辯也。此沈黙の大雄辯の語る處を聽に我日東帝國は維新以來天地神明に誓つて國是を定めたるもの也。別言すれば天地神明を以て直に國是となせるもの也。故に開國以後の内治外商の大國是は天地神明の顯現なりと謂はざる可らず。開國以前二千五百年間の歴史の中には、皇天の佑護の高大なるものあるを認めたりと雖も、明治聖代の卅年史は皇天の内在を證明するもの也。封建割據と云ひ、鎖國政策と云ひ、武門武士の跋扈と云ひ、四民階級の固陋と云ひ、男尊女卑の惡習と云ひ、斯の如き國民生活の間に皇天の圓滿なる内在を見ざりしは明白なれども、幸に滅亡の運命に向はざりしは切に皇天の佑護に外ならずと信す可き也。國民的生活、國家的存在の自覺なき國



民の唯一の頼みとす可きは神風也。自國を護る超自然力の祐助を生命とするもの也。敵國降伏は此幼稚なる國民が其超自然力に對する國民的大祈願也。幼稚なる國民は昔も今も多數を有す。昔は學國學民悉く幼稚なりしに今は進歩したる國家の内に幼稚なる國民の多く存するの差違あり。随つて今日と雖も幼稚なる國民の非文明、非人道的なるは怪むに足らずと謂へ、國家の大方針の中には文明を有し人道を有し則神意の内在を見る也。神意は管に天に成るのみならず、地に成らむとしつゝある也。基督教的文明主義は國家の方針と少數國民の活眼活識の中に不朽の根底を有するに到る。殊に余輩は露國皇室の暗黒的側面に相對して我 皇室の瑞雲悠々たるを欣仰し、更に我國民の家庭道德の紊亂を廓清するに足る模範的家庭を實現せられんとするを惟ふ時は、皇天に感謝せざる可らざるものある也。國家の基礎は家庭に在りとは古聖賢の教ゆる處なるに、我國民の家庭道德の紊亂は言語同斷なるものありて、夫婦琴瑟を鼓するが如き家庭の和樂を解したるものは、殆む基督教徒の家庭を除くの外絶無と云ふも過言にあらざる程なりき。而して多く此紊亂の根源は蓄妾若くは婦人に對する男子の無貞操より來れるもの其大部分を占めたることは事實也。然るに今や新日本の新家庭は、皇太子殿下の御家庭と有栖川宮の御家庭とに、實現せらるゝに到れり。固より民間に在りては基督教徒の家庭に實現せられつゝありしと雖も、更に未來の皇帝陛下と其御後見役とに依りて實現せられたるは、少數良民の實に欣喜に堪ざる處也。曾て僅に平民の間に行はれたるクリスマスチャンホームは、既に皇室のものたらむとす。余輩は竊に

現皇帝陛下の賢明なる、東宮殿下の師傅として皇族中稀に見る、清高、英俊、世界的眞公子たる有栖川殿下を推戴あらせられたる、其間の消息を闕ひ奉るに其家庭はクリスマスチャンホーム、其人格はクリスマスチャンセントルマンを理想せられ給ふを信ぜざる能はず。既に基督教的文明主義を採用せられたる我皇室は、更に其根本主義なる家庭主義、人格修養主義に就て漸く一大洗禮を受させられたるを慥げざる能はず。我宮庭の倫理道德史は之より新紀元を畫し、國民の恐懼して謹讀し奉る可き眞價あるものならむとす。茲に於てか我邦の基督教的文明主義は表裏相一致して實現せられむとするもの也。國家として自由共和開放を理想したる國民は、家庭に於ては專制不潔唾棄す可きものに外ならざりしに、新日本は茲に表裏相合して始て出現せんとする也。紳士としての理想、家庭としての理想は漸く雲深しと思惟したる皇室の中に昭々乎たるに到れり。日本のクリスチャンは茲に倫理的血液の疏通するものあるを見、案外に早く雲深き處の思潮は進歩しつゝあるを見る也。何事も皇室を理想とし皇室の一顰一笑を模倣せんとする國民は、其紳士たる理想に於て、其家風に對する理想に於て、速にクリスト教的洗禮を受るの覺悟なかる可らず。此點は日本が露國に劣る處のもの也。個人の人格と云ふ家庭の中には容易に未だ神の内在を見る能はざるものあるは、余輩の浩嘆に堪ざる處にして縦や國家的大方針の中に神の内在を見ることも、其根底甚だ薄弱なりと謂はざる可らず。故に多數の國民は躊躇する處なく下は基督教徒の家庭、紳士に學ぶ處あり、上は皇室の倫理的趨勢に鑑みて速に啓發する處あるを要す。



然れども日露兩國を概観すれば露國皇室の古代的にして國家的大方針の中世的なるに對し、我邦卅年間の明治史は實に近世史と聯絡す可き多大の興味ある歴史なるのみならず、未來に向つて自由に快濶に幾多の進歩發展を爲す可き大精力の蓄積史也。露國は古代文明、若くは中世期思想に支配せられつゝありて、其發達に非常の迂回を見るに反し、我邦は門戸開放主義を採るや直に近代文明に接觸し、悦ぶ可き現象を示すに到りたるもの也。世の論者は日露勝敗の原理を以て單に忠君愛國の精神にありと成す。然り忠君愛國の思想は戰勝の原理の一部たるに相違なしと雖も、露人と雖も其精神に皆無なるものにはあらず、渠等と雖も君に忠ならむことを欲し、祖國を愛するの至情に燃へつゝあるを否む能はざるもの也。茲に於て論者は更に曰く彼我共に忠君愛國の精神ありとするも程度分量の相違あるを如何せん。之れ實に尤の觀察なりと謂はざる可らず、然れども其忠君愛國の精神は如何にして之を養成することを得るか。單に君に忠たれと教ゆるも君若し忠を盡すに足る人格たらず、從つて民若し其徳に化するならむか、忠君に就ての百萬遍の説教、講釋も何等の效果なきは明白也。故に余輩は忠君愛國の精神と治國平天下の問題とは直に相聯絡するものなるを認識せざる能す。治國平天下の問題は直に之れ政治問題也。政治問題の中心は固より人道問題也。人道とは國民の意志を以て國君の意志となすもの也。國民に對する國君の人道は乃ち之に外ならず、然るに露國の如きは國民の意志は直に帝王の意志にあらず、帝王の意志は亦國民の意志にあらず、帝王の意志は國民の意志に

反し、國民の意志は帝王の意志に反目す。茲に於て忠君の精神を阻害せらるゝと洵に多大なるものありと謂はざる可らず。從つて愛國の精神にも影響する處のもの頗る多し。如何に祖國を愛せんとするも其祖國は國民的牢獄の如く何等の自由なく光明なく同胞は權利の壓制に泣き自由の束縛を咒ふの状態にありて、此厭ふ可き祖國の状態を顧みず尙且つ之を愛せんとするは、非常なる苦痛と謂はざる可らず。我邦に於てすら民權自由運動の氣焔天を焦したる時代には、我邦に告別して北米の自由郷に遊ばんとしたるもの甚だ多かりしを見る也。故に帝王の意志と國民の意志とは全く相反目する如き状態にありて、其帝王を愛せんとし亦其專制にあらざるなき不幸の祖國を愛せんとするも、到底能はざるとなるを知らざる可らず。故に國民をして眞に忠君愛國の實を全ふせしめむとせば、其民をして祖國を愛せずして已む能はざらしむる國家的快味悅樂幸福を興へざる可らず、忠君の秘義に於ても亦然りと謂はざる可らず、君若し眞に民を愛するの心あらば民は其愛に感泣せずむば已まざる也。別言すれば民の幸福は帝の幸福なりと信じ、民の自由は帝の自由なりと信じ、民の發達は帝の發達なりと信じ、民と帝との全き精神的合一を見るに到らむか、民は茲に國家の快味悅樂幸福を感じて君を愛するの心と國を愛するの心とは離る可らざるに到るもの也。然るに露國の國狀は自然に忠君愛國の精神を撲滅せんとするもの也。專制政治は治國の私道にして決して公道にはあらず也。從つて國民の公心を害し私心の人たらしむるもの也。我邦は之に反して私心を捨て、公心を發揮せざる可らざるものある也。民の心は帝の心にあらずや、君臣共和の大精神は明に茲に存するもの也。余輩の所謂地上の



天國は政治機關の運轉を経て建設せらるゝものにて、君臣共和の大精神が更に數歩を進めて具體的となるにあり、故に日露勝敗の原理は單に忠君愛國の精神のみならず、其大精神の根底なる可き神意の有無如何に存すること明白也。國家の中に神意の發展なくば國民の中に忠君愛國の精神は發達せざるものと謂ふ可き也。

### 第四章 國民的ニ大國是と個人的自覺

前章に於て論じたる如く日露勝敗の原理は、直に之れ政治上宗教上倫理上の問題に聯絡す可きものなるを知悉せざる可らず。如何に武と勇とに卓越せんとし、如何に忠君愛國の至情に燃へむとするも、暴政を之れ専らとし、自由の思想を迫害し、民人の天權を是認せず、王の爲に國家は存し帝の爲に人民は存在の理由を有する如き悲惨痛酷の國民は、眞に之れ地中の暗黒なる獄屋に繋がれたるものにして、不平、怨恨の情を激するに到るは敢て怪む可きにあらず、斯の如き精神的痛苦の國民に忠君愛國を需めむとするは、寧ろ死に勝る苦痛なりと謂はざる可らず。然るに我邦は勿論「地上の理想國」を去ると是れ雖も、多數國民の爲には厭ふ可き牢獄にあらずして、山紫水明に於て瑞西の如く、美術的藝術的なるに於て伊太利の如く、國民統一に於て獨逸の如く、個性の發達に於て米國の如く、現在に於て早や既に一種の樂園の如く思はるゝのみならず、將來に向つては地上の理想國は

愚かのごま眞に天國の地上に實現せられたるものとみなさむとするは、之れ少數者の理想する處也。多數は現在に満足し少數は將來に満足す。

余輩は現時の露國と相對して我邦の現状を懷ふ時に、固より少數者の理想を去ると實に遠きものありと雖も、多數者が満足する所以のものも存するを忘る可らず。余輩は今に於て小楠先生の功績を追想せざる能はず、舊日本の建設者が武と勇とに依れる神武にありせば、新日本の開拓は智能と識見に依れる横井小楠にありと謂はざる可らず。小楠は熊本藩の人なり。然れども彼は福井藩に千古の知己を有す。松平春嶽は乃ち其人なり。小楠は春嶽に知られたり。小楠をして我藩に於て家老攝政以上の地位を與へたる春嶽公は、曾て幕府の總裁職となるや先生を相談役とし、更に轉じては先生を朝廷に推薦し、皇上の顧問役たらしむるに到る。新日本開拓の識見は横井小楠の識見なりと謂はざる可らず。新日本の大國是は先生の識見に依りて産れたり。驚く勿れ國家民心統一の大國是たる五ヶの御誓文は、之れ實に小楠先生の思想なりしことを。一己の偉人あらむか其思想は眞に萬古を空ふするの概あり。五ヶの御誓文は開國當時の世界の潮流と我邦の國狀とが融合醇化して感發せられたるもの也。曰く

- 一 廣く會議を興し萬機公論に決す可し
- 一 上下心を一にし盛に經綸を行ふべし



一官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦まざらしめむことを要す  
 一舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし  
 一智識を世界に求め大に皇基を振擡すべし

ど。あゝ之れ何等の雄大、崇高、何等の深遠、博大ぞや。深く玩味すれば現時の政治組織の實施を以て決して此博大高遠なる大理想を全ふしたるものにあらず、五ヶの誓文は永久の綱領なり、余輩の治國平天下の活眼を琢磨する大國是なり。余輩は曾て此國是に依りて代議政體の實行せられたるを知る。従つて此國是に依りて他日社會政策の實行せらるゝことを信せざる能はず。五ヶの誓文は固より代議政體と謂ひ社會政策と云ふ如きものを超越す。然れども時代の新思潮は悉く此誓文の大精神に一致するものあるを信するもの也。此五ヶの誓文の大精神は今日の代議政體を以て満足す可きものにあらず、更に大なる意義に於て治國平天下の實を全ふし、國民多數の意志が政治機關となりて現はるゝにあらざれば、此『偉大高遠なる思想の權化』は満足せざる可し。試みに茲に聊か評を加へむか今日の議員法は果して『廣く會議を興す』の大精神を全ふしつゝあるか、余輩は否と答るに躊躇せざる也。『廣く會議を興す』の大精神は普通選舉を實施して、洵の國民的議會を見るに到りて始めて全ふせらる也。『上下心を一にし』の宣言の如きも今日の我邦に於て未だ容易に全ふせら

れつゝありとは信する能はず、政府の意志と國民の意志とは如何なる程度まで相合しつゝありや、腐敗せる政治家と阿附諛佞を事とする代議士とは抱擁接吻せるを見ると雖も、清廉の意志高潔の品正ある代議士は獨り國民に對する萬斛の眞情を湛へて孤忠を護るに過ず。政府と議會とは正直なる國民に失望を與へつゝあるもの也。渠等の經綸とは所謂作畧、渠等の政策とは所謂小刀細工に過ぎざる也。不幸にも事實は未だ『上下心を一にし』ては居らざる也。今日の政治は此理想を去る甚だ遠しと謂ふ可き也。殊に『民心を倦まざらしむるを要す』とは治道の要訣として余輩の深く敬服する處なれども、民心の倦みたる時分は漫に戦端を拓ひて國民的元氣を新にするが如きは斷じて治道の要訣を得たるものにあらず、戦争は多くの意味に於て國民的賭博也、勝つか負けるかは天にあるもの也。國民の生命財産を賭して甚だ不親切なる政治家等に賭博を試みられては、國民の醇良なるものは泣面に蜂と謂ふべき也。故に民心を倦まざらしむる秘訣は戦争にはあらず、政治家が誠意誠心を以て民心の向ふ處を察知し、公議の機關を自家と富者の獨有たらしめず、常に政治を刷新して民心を清新ならしむるにあり。茲に於てか『舊來の陋習を破る』の大見識なかる可らず、余輩の理想したる代議政體にも最大缺點の伴ふありて打破せらる可き陋習は歴然として明白也。朝變暮改は勿論治道の要訣にはあらず、然れども打破す可き陋習の伴ふを知りて之



を刷新する能はざるは、決して政治の本義を得たるものにあらず、政治の本義を明にせん  
 とせば私心私情を去りて『天地の公道に基かざる可らず』、天地の公道とは之れ天意人情の  
 存する處にあらずや、天意人情の存する處は之れ王道の蕩々たる所以也。而も唯天意人情  
 と云ひ、王道蕩々と謂ふも頗ぶる漠然たるものあり、別言せば天意人情とは如何、王道蕩  
 蕩とは如何、之れ『智識を世界に求め』て古今東西國家興亡の跡を窮め、政治の發達、革命  
 の歴史、亦是新思潮の嚮ふ處を深く領解して天意人情の存する處を明にし、大に皇國の據  
 つて興る基を振揮するの必要ある所以也。故に以上誓文の大精神を眞に貫徹せんとせば、  
 現今の代議政體の不完全を救済して更に斯大精神を發揮す可き新政體の實現を望むものは  
 豈啻に余輩一人のみならむや新思潮の向ふ處を卜する者は皆然ることを信せざる能はず。  
 斯の如く誓文の大精神は未だ國民の中に實現せられず、其理想を去る甚だ遠きものありと雖も、我國民を擧て天恩を光  
 被せしめ、露國の老朽政體に勝りて四民合意の政體を組織したるは隨に此政治的大國是の趣旨の幾分を實行したる結果  
 に外ならず。尙ほ新思潮の大勢を容れて之を行ひ得るの餘裕は綽々として十二分なりと謂ふ可き也。別言すれば更に大  
 なる理想は斯誓文の始終を一貫するを見る。然れども國民的大問題は治道の要訣を明にするを以て全  
 ふせらるゝものにあらず、次に來るものは政治上の問題ならざる可らず、乃ち國民品正に  
 干する倫理問題これ也。教育勅語は將に必然に來る可き運命を有したり。五ヶの誓文は王

政維新前後の開國論、鎖國論、攘夷論、倒幕論、王政復古論等の爲に民心動搖、思想の統  
 一を見る能はざる時に當り上下心を一にするの大方針を明にし、民心の歸する處を示さん  
 とて喚發したるもの也。かの教育勅語の如きも思想界の大紛亂を統一せんとして現れたる  
 ものにて、國民的倫理思想の大統一は茲に全ふせられたるもの也。然れども王政維新の革  
 新思想と專制政府破壊思想とは、俱に趣を異にしたる思潮なることを知らざるべからず、  
 維新の改革は尊王忠君の思想が世界の大潮流に乗じて倒幕の趣旨を全ふしたるものなる  
 も、專制君主政體の打破は民主思想の産物なりと謂はざる可らず、尠くとも民主的に解釋  
 したる尊王思想の産物也。此大運動に参加したる政界の好男兒は佛國革命時代の健兒の風  
 姿を帯びて、『朕の背後には洪水あり』とは今や我邦 至尊の爲に繰返されんかと不穩の語  
 調を以て喝破したり。佛國革命史は當時の志士の心血を沸騰せしめ、ルーンの思想は民約篇  
 に依りて國民に多大の歓迎を受けぬ。官吏侮辱の爲に獄に投せらるゝは渠等の快事とする  
 處にして、是等の大迫害は渠等の同志をして革命思想の氣焰を高めしめぬ。演説は中止解散  
 せられて警察官は專制政府の擁護者なる悪魔なりと罵倒せられたり。渠等の理想は普通撰  
 舉にあり小作人の保護にあり、勞働者の權利伸張にあり、代議政體の理想は社會主義的思  
 想と默契して天下の人心を煽動しぬ。當時は個人主義の旺盛を極めたる時代なり。『個人的



民主思想は此勢を以て從來の尊王思想に一大洗禮を施したり。故に忠實なる尊王的道學者先生等をして尊王思想の大危機なりと叫ばしめたり。國家を主とする忠君愛國的倫理思想は從來の形式よりも更に進歩したる形式を探りて大飛躍を試みざる可らず、既に極端なる個人主義は内に暴威を極めむとするに當り、所謂歐化主義は此民主思想と相俟つて實際社會を風靡し、保守主義の人々をして今更の如く國粹保存論を高調するに到らしめたり。渠等自稱西洋通の多數が頻に歐化風を吹かしむるは、尤も頑固連をして憤慨せしめたり。渠等は從來の禮儀作法を遠慮なく打破せんとし、良家の才媛は舞踏會の席上に於て政治家、大臣等に辱められんとしたりとの評判すら盛に起りたり。民主思想はハイカラ風と相俟つて尤も不健全なる國粹破壊運動と見做されたり。茲に於て尊王思想は國粹保存の思想と相俟つて、漸く保守的反動の風潮を喚起するに到れり。當然來る可き反動は突忽として現はれ來れり。保守的反動は教育勅語降下の先驅者なり。彼は教育勅語の來る可きを野に叫ぶ預言者に似たり。此準備の國民思想の中に整へられんとするに際し、廿三年十月國民教育殊に德育に干する大勅は俄然煥發せられたり。其文雄警、着想清健、謹讀するに足るものあり、曰く

朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むるこゝ宏遠に徳を樹るこゝ深厚なり、我が臣民克く忠に克く孝に徳兆心を一にして、

世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦た實に此に存す。爾臣民父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ、恭儉己を持し博愛衆に及ぼし徳を修め業を習ひ以て智能を啓發し徳器を成就し、進で公益を廣め世務を開き常に國憲を重じ國法に違ひ一旦緩急あらば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。斯の如きは獨り朕が忠良の臣民たるのみならず、又以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らむ。

斯の道は我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所、之を古今に通じて謬らす之を中外に施して悖らす。朕爾臣民と共に眷々服膺して成其徳を一にせんことを庶幾ふ。

之れ或意味に於ては保守的反動の産物なりとも評するを得べし。然れども之れ單純なる國民道德のコンモンセンス也。國民の道德的常識を代辯したるに外ならず。何等の奇なく妙なく珍なし。然り實に何等の『珍』『妙』『奇』なしと雖も、國民道德の常識としては尤も圓滿完全に代辯せられたるもの也。殊に驚く可きは尊王思想に一大新紀元を開拓したるこゝ也。皇統連綿たる萬世一系の皇室は從來國民の思念したる處に依れば、九重雲深くしての神の如く皇帝の名を口にすると恐れ多しと考へ居たるに、『朕爾臣民と共に眷々服膺して成其徳を一にせんことを庶幾ふ』との論旨を謹承するに到りては單に保守的反動の産物と評す可らず。將に時代の聲なりと謂はざる可らず。余輩の尊王思想は此論言に據りて清新なる洗禮を受けたるこゝを喜ばざる能はず、余輩の從來皇室に對する感想は『畏きあたり』と謂ひ、『九重雲深きあたり』と云ふ形容辭を以て謂ひ現はされたるものにて、此感想の皇室に對する中心を批



評しなば、政治に於ても道德に於ても皇室は常に國民以上、乃ち臣民以上に超然たるものと考へつゝあるもの也。然るに綸旨を以て『爾臣民と共に眷々服膺して其徳を一にせんことを庶幾』ひ給ふを見れば、臣民と共に在らせられ、臣民と共に道を行はせられ、別言すれば臣民と共に國民的生活を完ふせんとの趣意なるが故に、余輩が是迄無意識的に養成せられたる皇室に對する情感の籬は、全く排除せられて余輩は陛下と共に國民生活の意義を全ふす可きものなりとの情緒油然として湧出するに到りぬ。億兆心を一にする國體の精華は將に茲に存す可きものにして、國民生活の倫理的理想は皇室と臣民とを一丸となして、俱に同一理想の中に在るものなるを思はざる可らず。故に余輩の超越的尊王思想は打破せられて國民的尊王思想となり、皇室は國民を超越せずして却つて君民共和的大生活の趣旨の明白になれるを歡喜せざる能はず、是を以て見れば教育勅語は單に保守的的反動の産物のみならず、單に倫理的常識の代辯にはあらず、君主思想と民主思想の渾然融化したる大産物なりと謂ふ可き也。去れば五ヶの誓文と共に斯勅語も時代の産物なりと謂はざる可らず、國民の倫理思想を統一すると共に偉大なる空前絶後の結論は余輩の前に提供せられたるもの也。王道は偏せず兼せずと雖も國民生活と共に在るものなりとの思想は既に業に明にせられたり。然れども今や此勅語の降下に伴ふたる大問題は、斯の如き抽象的理論の中に存するものにあらず、適確なる實際的問題なりと謂はざる可らず、乃ち斯勅語の中に示されたる國民生活の倫理的理想は、如何なる程度まで實現せられつゝあるかの實際問題也。余等は國民生活の品格を顧みる時に此倫理的理想を去ると願ふる遠きものあるを認識せざる能はず、否、寧ろ此國民の道德的常識に及ばざるもの甚だ多きを嘆かざる能はず、試みに見よ今日の同胞が忠に對する思想は戦争の打死にあらざれば忠と解する能はざる也。平和なる國民生活の中に大忠の存することを認めざる也。孝とは老人に食を與るに過ぎざる也。衣服を四期に應じて取代るに過ぎざる也。子女は物質に於て兩親を活しつゝありと雖も、精神の交感に到りては不幸にして渠等を殺しつゝあるもの也。殊に夫婦の道德の如きは紊亂の極に達しつゝあり、肉の和合は多しと雖も精神上の根本的一致に到りては殆むご見る能はず、良人に對しては時に貞婦なきにあらざれども、貞婦に對する節夫に到りては未だ之れ在るを聞かず、夫婦相和せざるは良人の品正下劣にして紳士たる品格を有せざるが故也。余輩は新日本の國民の中に家庭らしき家庭を見る能はずして、豚小屋の如き不潔なる家庭を見ること多きを悲む。朋友相信する如きも酒色に依れる信用にして、酒を飲み色を漁る時には無類の心友も、酒色を離れては未だ容易に心友と謂ふ可きものを見ず。之を要するに渠等の生活上の道德は肉の干係を離れて存するものにあらず、渠等には殆むご靈性の存在を見ざるに似たり。

上に國民教育の勅語あるとするも、國民の實際生活は依然として無勅語也。國民には理想としての道德は存するに似たり。雖も實際の品正は宛然無道德也。渠等は口には有神論を唱へて事實に無神論者たる墮落信者の如し、勅語降下以來殆ん廿年恐れ多くも事實に於て之を一片の反古同様のものとなせるものは何人ぞや、各人然り教育家然り舉國國民皆然



○りと斷定せざる可らず、五ヶの誓文は其幾部を行ひ得たりと雖も大部分の理想は空なるものとなりたり。教育勅語に到りては將に漸々空の空なるものならむとす。此大不忠大不敬の大罪は余輩國民自身の責なりと謂はざる可らず、教育家の腐敗も余輩自身の責なり、兒童の身を修めざるも余輩自身の責なり。今日の國民は他を責むるに勝りて自ら責めざる可らず、將に麻を着灰を被りて悔改す可きは現時の日本國民也。茲に於て我同胞は更に新なる聲、新なる理想、新なる生命に接觸せんことを要求しつゝあり、斯要求に應ずる處のものは我奈良大會宣言書の大精神也。

古預言者イセケエルが詩歌的幻想の中に認めたる累々たる『白骨の谷』は、光榮ある五ヶの誓文を有し、名譽ある教育勅語を有する余輩の眼前に呈露せられたり。渠等は幸に開國進取の國是に則りて世界的智識を培養したる國民也。然れどもこの智識や政治の學也。機械工藝の學也。身讀體得して世界の市民、宇内の公人たる人格を開創するの學にはあらず、故に渠等は博大なる智識を有すと雖も直に生命に干し亦人格に干するものにはあらず。其智識は生命以上、人格以上の『白骨の谷』の材料也。人生の秘密に接觸せず靈覺の妙諦に接觸せざる智識は之れ死せる智識にあらずして何ぞ。亦渠等は忠君愛國の倫理的國是に従ひ、殆むと二十年來檀那寺の住職が朝夕聲を枯して讀經するが如く、勅語を捧讀し加るに條理明晰毫も間然する處なきが如く、田舎漢の鈍眼に映する解説訓話を常に拜聽するもの也。而も此盛むなる倫理的國是は新なる國民の生命を開創し來るの神通力なく、空しく『白骨

の谷』を装ふ意外の裝飾品也。依然として生命は茲にも發揮し來らざる也。世の所謂靈明なる經世家は國是と云ひ方針と云ひ巧に時勢の必要に應じて、至上の名を冒して政治道德の理想を喚發するもの也。渠等は政治道德の根本は國民の『腸』に在るにあらずして文字に在りとなすに似たり。渠等は好く法律を編成し國家の大方針を定む。夫れ以上に渠等は何等の腸を有するか。自覺は渠等の門戸をも窺ひ知らざるもの也。神の如き人格は渠等の要せざるもの也。永遠無窮の光明界、天國淨土の如きは渠等が以て痴人の夢となすもの也。『一日の苦勞は一日にて足れり』との理想を文字通りに得々として行ふの大哲人也。『今日の中に飲み食ひせよ明日は死ぬるやも知れず』とは此大哲人の主張信仰也。我『白骨國』の舉國國民は政治道德のコンモンセンスをも行ふ能ずして死の谷を實現せるもの也。世の所謂經世家は斯國の建設家也。自から死せる渠等は人を殺さずむば已まざる也。然るに渠等の爲に甚だ不幸なる時機は到來し始めたり。乃ち白骨國轉覆の機會は眉端に迫り來れり。一團の天使白雲に乗じて降り來るは夫に外ならず、彼來りて白骨の谷に冷に眠れる『我』に温き息を吹くや、茲に自覺の大勢力は『我』を舞はしめ躍らしむるに到れり。天樂洋洋として手の舞ひ足の踏む處に調を合はするに似たり。我は幾多の我を生み、天使は白骨國の中央に一團の『活人國』を建設し。再び白雲に乗じて天上界に歸りたり。茲に於て我の運命は我自ら



に依りて自覺し、我の使命は我自らに依りて全ふせざる可らず。妖雲天に懸り怪霧地を掩ふの白骨國には、渠等『活人』等の自覺の發展するに伴ふて、電雷は閃光を射るの迫害となり、雲霧深くして活路を得ざる懷疑に陥り、暴風豪雨と戦ふて竟に『永久不死の光明界』を開創し來れり。之れ余輩の所謂奈良大會宣言書の起りたる所以也。

余輩は日本に於ける基督教會の使命を考るに先ち、我帝國の世界に對する文明的使命を鑑みざる可らず、我帝國は嘗て東洋文明を吞吐して満足せず、之を玩味咀嚼したる如く、西洋文明を吞吐して満足するものにあらず、之を消化して血となし肉となすにあらざれば已まざる可し。余輩の文明的使命は此消化作用に存することを忘る可らず、東西兩洋の文化を消化して新文明の開創者たらむとするは、之れ余輩の先天的約束にして日本民族存在の理由は茲に在るもの也。然れども使命と云ひ先天的約束と云ふ最早これ理論にはあらず、解釋にはあらず、直にこれ自家信仰なり國民的自覺なり。此信仰と自覺の存するところ先天後天を貫通する不斷の生命は存する也。釋迦文佛の思想は未だ日蓮を生じ空海を生じ親鸞を生じたる者とは思はれず、孔夫子の教化に依りて仁齋を生じ東涯を生じ羅山を生じたる者とは思はれず。渠等は思想教義の産物にあらず、生命と生命との産物也。日本民族の生命の中に宇宙の生命

は宿りつゝあるもの也。大なる生命が余等の生命に接觸して民族の精神と宇宙人類の精神とが合一するとき、茲に偉大なる心靈は渠等の形を取りて現はるゝ也。日蓮宗、親鸞宗は此偉大なる精神力の變現也、エピナニズム、宮川主義亦此不斷の生命力の發揮のみ。渠等に據りて代表せらるゝ日本民族は所謂經世家の國是方針以上の偉大なる或者を有す。乃ち無窮に發展して已まざる民族の個性は、深奥なる自覺の天地、幽玄なる信仰の靈郷を開拓したる渠等の間にのみ明白也。基督教會中の基督教會を以て任ずる我黨（日本組合教會）の同志が明治廿八年舊都奈良に會して秋月清澄、銀河漣澗、滿目の山色錦繡を織れる菊水樓上に於て『不朽の紀念』を停めたるものは、二千年間の教會史乘眞に空前絶後の大宣言大獅子吼也。余輩は茲に謹むで其法燈を萬世の億兆に示さむ。曰く

- 一 罪惡を悔改し基督に依りて天父に歸順する也
- 一 人は皆神の子なれば互に愛隣の大義を全ふす可き也
- 一 一夫一婦の倫を保ちて家庭を濟め父子兄弟の道を盡す可き也
- 一 國家を振興して人類の幸福を増進する也
- 一 永生の望は信と義に依りて全ふせらるゝ也

あゝ此五大綱領は基督教會の新紀元にはあらずや。文字の數より見れば未だ百字に充ざるもの也。然れども其意味は萬民の言語を悉く使用して之を説明せんとするも盡るものにあ



らざる也。之を縮小すれば微細なる芥種の中にも宿ると雖も、之を暢張すれば宇宙を包むも尙は餘りあるもの也。要するに五箇の大宣言は余輩個性の發展の結果を示したるものに外ならず、最深最高の自覺信仰の産物に外ならざる也。世上一般の基督教徒が舊信條、舊教義、舊習慣を脱脚するの勇なき時に當り、敢てニカヤ信條の奴隸とならず、正統派非正統派の名分に拘泥せず、ルーテルに於て全ふせられざりし革新は更に茲に行はれたるもの也。未來の史家は之を以てルーテル以後の宗教改革なりと評すべき也。自由は靈性の生命なり神秘を追ふも心靈の生命なり。我黨が從來の教權主義を打破して自由討究の精神を明白にしたるは、心靈の生命なる自由を迫害し神秘ならざる迷信を鼓吹せんとする惡習陋風を破壊したるに外ならざる也。而して個人靈性の神秘を求め自由を慕ひ、加るに靈性夫れ自身の向上發展の存する處は、開國進取、忠君愛國を理想する誓文、勅語の眞精神を包含したる大精神の存することを確認せざる能ず。若し百の誓文、百の勅語ありとも國民個性の精華の發したるにあらず、唯時勢の料理人なる經世家が時勢の必要に應じて調理し塩梅したるに過ぎざらむか、事實に於て反古となるに過ぎざる也。別言すれば余輩は五ヶの誓文に勝り教育勅語に勝る偉大なる個性の發展を試みざる可らず、國是以上の大心靈の展開を有して始めて國是の精神を實踐し得るならむ。故に政治問題に先むじて倫理問題に走り、倫理問題に先むじて個性の自覺を教ゆる宗教問題に走る國民は、眞

に多望なるものと云はざる可らず。余輩は其多望なる國民の一人たることを名譽す。試みに茲に余輩の宗教的實驗としての五箇の綱領に就て説かむか、余輩は尙其自家の靈性の小なるが爲に無明の生涯を送り罪惡の奴隸たりしもの也。小たる自我は不幸にして無明罪惡を打破して渾身之れ光明の化身たる能はざりし也。然るに余輩は自家心靈の最高發展を基督の中に發見し、更に宇宙大の天父に自我の本來を發見するに到れり。茲に於て自己の淺見不徳到底一個の小人に過ぎざりしを慚愧悔改し、基督の心靈を徹して天父の靈懷に入るを得たるもの也。既に基督の中に見たる神の姿を自家胸中に發見したる余輩は、我同胞兄弟の胸中にも之を發見せざる可らず、人類神子觀は茲に其不朽の基礎を有するもの也。愛隣の大義は其必然の結果として全ふせざる可らず、余輩は基督の中に自己を見るが如く、天父の中にも自己を見ることを得る也。去れば同胞相愛の至情は更に精進向上して心を盡し精神を盡して天父を愛せざる可らず、天人共貫の人情の精粹こそ宇宙人生の最大光明最大生命なりと謂ふ可き也。愛は生命なり愛ある者なきは生命なきもの也。故に眞に天父を愛することを知り眞に同胞を愛することを知り亦眞に自己を愛するを得るものは、天地の至樂之れより大なるものはあらざる也。之れ基督教の宇宙人生を抱擁したる眞諦門なりと謂ふ可し。然れども余輩個性は宇宙人生の大に接續すると共に、家庭國家の小に聯結しつゝあることを忘る可らず。一夫一婦の倫を保ちて家庭を潔むると謂ひ、國家を振興して人類の幸福を圖ると



謂ふは、宇宙人生共貫の大意義を實踐躬行するの捷徑也。一夫の中に靈性の尊嚴を認むるものは、同一の價值あるものを一掃の中に認めざる可らず。人は皆神の子たる以上は其神の子が大天國の小模倣たる家庭を造らむとするに當つて、天父を敬愛するの至情を以てするは、家庭を神聖ならしむる所以と謂はざる可らず。斯の如き家庭の上に建設せられたる國家は、縦や其面積、軍備、財源に於ては貧にして小なりとするも、至大至高の邦家地上の理想國始めて茲に存す可き也。其王は天父の心を體得せる哲人にして賢者ならむ。彼は民に臨むに眞に慈顔愛腸を以てするもの也。彼は自己を民の胸中に置くもの也。彼は王者なる個人々々を代表したるものと確信するもの也。彼の眼中には國民個人の價値は神の如く映するもの也。彼は自己の中に神を見ると共に民の中に神を見る也。彼の行ふ政治は自己の意志にあらずして、神の意志と民の意志也、彼は民と神との前に全く自己を空ふしたるもの也。恁る國家は王の國家にあらずして民の國家也。否、民の國家にあらずして唯偉大なる個性、君民一體の靄然たる個性の國家也。偉大なる個性の國家にあざれば決して振興するものにあらず、人類の幸福を増進する國家は眞に斯の如き國家なりと謂ふ可きなり。彼は國家としてセルロフの理想よりも大ならざる可らず、ローツは自由平等正義の三大綱領に據りて米が獨の大合同を計らむとしたるもの也。然れども人類の幸福を増進する國家は人類の異同を超越し、天父の名に依りて、黒、黃、白の大人種の合同を理想せざる可らず、人類と云ふ眼界に於ては人類の異同は存せざる也。唯單に人類あるのみ。渠は皮膚に於て一致する能はずとも、心情に於ては相合す可きもの也。故に

恁る理想的國家の基本たる家庭は、此國家の理想を高明ならしむるが爲に、人種の僻見を排して心情の一致になる雜如の如き亦大に興味ありと云ふべき也。此家庭國家の理想教訓は基督教の俗諦門なりと云ふことを得可き。若し夫れ轉じて永生の望に到らむか、眞俗二諦を兼備したるものならざる可らず、宇宙人生の理想的方面と家庭國家の實際的方面とを、余輩の心靈的活動に於て具足するにあざれば、此大希望を全ふし得るものにあらず、乃ち余輩の精神は天父基督の世界的宇宙的天心靈と同化すると共に此天心靈が家庭國家の精神の中樞に活動して、人類改造、個性發展、新人文の鼓吹、新世界の出現の爲に國家世界の歴史的精神なりとて活動を永續する處、之れ乃ち余輩の永生と信する處也。信と義とは此眞俗二諦を説明したる意義深沈の文字也。「信」は保羅の信仰を意味し、「義」は雅各の實踐を意味するものにて、理想と實際を具備したるもの、之れ信仰と實踐とを一致したるもの也。「身若し靈性を離るれば死する如く、信仰も實踐を離るれば死するなり」とは、ルーテルの所謂『藁の福音書』に於ける金石の聲也。基督の心は理想と現實とを具足せられたるものにて、人類教化の勢力ある所以は乃ち其結果なりと謂はざる可らず。而も二千年前に一個の基督が流星の如く此世を去れりと云ふに過ぎざらむか、彼の精神は現實世界に於て今日の日如く大なるものにあざざるや燎々たり。然るに彼と信仰實踐を同ふする幾多献身犠牲の誠士、雲の如く現はれ來れるをもて彼の精神は愈々膨大したるならむ。此膨大する精神の中に幾多の余輩は永久不死の活動を有しつゝあるを見る也。榮譽を天父と基督に歸して活動する幾多の誠士は彼等と共に



無窮に永存する所以ならむ。  
 之れ余輩一人の實驗と理想に外ならざれども、要するに宇宙と人生と社會とに向つて個性を圓滿に發展せしめむとす  
 るに外ならず、之れ二大國以上の主張抱負なりと謂はざる可らず、余輩は或意味に於て二大國以上の個性たらざる可  
 らず、人の志望は大にして漸く小なる目的を達し得るもの也。殊に國是は國是夫れ自身に於て完全なるものにあらず、  
 之を解釋し應用するの識見能力なかる可らず、故に此識見能力を養成せんせば尠くも宇宙を相手として琢磨す可き  
 也。人生、國家、家庭固より余輩を練磨するの資料なりと雖も、識見能力は宇宙より來るにあらざれば、源頭を穿ち得  
 たるものにあらず也。西郷南洲は此修養ありしもの也、横井小楠は此種の人格なりき。然れど  
 も余輩は現今のクリスチャンの中に天品に於て異なりと雖も養ふ處は渠等に劣らざる多く  
 の人格あるを確信せざる能はず、境遇を異にして社會の表面に現はれざる地平線下の大人  
 格は星の如く輝けるを認めざる可らず、渠等は其質に於て小なり、然れどもクロンウエルの  
 の背後に鐵騎ある如く、健全なる國家には斯の如き隠れたる人格なかる可らざる也。奈良大  
 會宣言書の趣旨は此人格を養成するにあり、此趣旨に養成せられたる人格は二大國是に活  
 ける新解釋を與るもの也。余輩は今日の多數國民が國是以上の哲學的立脚地を有せざるを  
 悲し、渠等の大部分は國是以下の人格にして、更に進むではコンマ以下の紳士淑女と稱せら  
 るゝものも幾干なるを知らず、之れ國民の偽善的性格を尤も好く代表したるものならずや、

余輩の親友なる米人の日本觀に曰く日本國民は甚だ外を恐るゝの國民なりと、乃ち外部の  
 壓迫を恐れる國民は之れ日本國民也。渠等は自動的にあらずして他動的也。常に外の刺激  
 に依りて發奮するの國民也。故に渠等の文明開化は兒童の口より出る石鹼球の如し、好く  
 膨るゝと雖も内は空の空なるのみ。大詔喚發に依りて指導せらるゝ國家民衆も亦斯の如  
 し。渠等は實に憐む可き國民也。渠等は自家の腹中には何者をも有せず唯他人の指導に依  
 りて進む機械的種族也。然れども若し渠等の中に一個の水呑百姓にして大なる宇宙に對す  
 る自覺を有し貧弱なる商估にして宇宙の精神を自覺せるものあり、纖弱なる寡婦にして自  
 己の神の子たることを覺得したるものあらむか、國是以上の國民が既に業に其内に存在す  
 るもの也。奈良大會宣言書は眞に自覺ある國民の聲也。その背後には弱き婦人あり商人あ  
 り學生あり百姓あることを知らざる可らず。渠等の宗教的自覺は茲に相合して千古の大宣言  
 となりしもの也。日本民族も亦中々に多望なる同胞を有することを誇らざる可らざる也。

第五章 萬古の心胸を開拓せよ

余輩は國是以上、宗教的宣言以上の個人的自覺の中に宗教的生命を擷取したる新民族、新



同胞、新國民あることを懷ふ時に胸中無限の快心の動くを覺へざる能はず、渠等は精神的帝國の建設者也。理想的新日本は漸く渠等の胸中に實現せられむとす。其新帝國や無名の哲人の國也。無名の預言者の國也。個性の理想的發展は茲に明に視ることを得、偉大なる精力は茲に發動しつゝあり。渠等は地上の王國にはあらず、直に之れ無限悠久の王國也。此國に住する者の中にのみ眞正の愛國者あり、眞正の神の子あり、眞正の解脱の子あり。然れども此國民は常に地を離れて天に登らむことを理想するものにあらず、天より降りて地を開拓せんことを望むものにて、其解脱や理想の天地を天外に望むて羽化登仙せんことをあらず、戦ひ勝つて周圍を征服する處に存することを認むるもの也。故に此國に住する民は頗ぶる自主的也。活動的膨脹的也。従つて渠等はフェルザナンド、ラザルの急進社會主義に同情を有すると共に、フリードリヒ、ニーチエの君主的個人主義に賛同するもの也。唯斯國に於てはラザルもニーチエも理想化せられて始て生るもの也。斯國は眞に大なる王國也。

曾て史家は評して曰く羅馬の成るや一日に成れるにあらず、亦彼の亡びたるも一日に亡びたるものにあらずと。然り余輩は渠の建國の理想の中に既に滅亡の豫定せられつゝありしを認めざる可らず、尠くとも渠の有したる『生』の理想は『死』の病毒に襲はれつゝありしもの也。始に生あり而して死は渠と共に在りき。伊太利の一市邑より起りて渠が天下を併呑するや、何等の理想なき自我の活動に外ならざる也。四隣を侵して地理的膨脹を試むるの外、乃ち土より生じたる自我を土の上に廣めむとするの外、何等の高貴なる主張を有せざ

## 新時代の曙光

## 新時代の曙光

るもの也。渠は個人としての嫌厭す可き最大罪惡を白日堂々として之を行ひ、征服、掠奪、到らざるなくして地上の大帝國を建設したるもの也。渠の生存慾は盜むで活るにありき。強弱共に周圍の國家を征服し財寶を掠奪して膨脹したるなりき。而して彼國の民は之を以て國威發揚、國權擴張、富國強兵、殖産工業の大理想を行ふものとなせり。然るに不幸にして其生存慾の中には自滅の病毒を有したり、既に死は生に伴ひたり、渠等は始めより永存の運命を有するものにあらざる也。國は生きむとして死を抱きたるもの也。然れども死の運命は固より打破するに堅きものにあらざる也。亦之を打破し得るの機會なきにあらざりき。唯國は大なる修養を缺きたるが故に空しく此機會を作る能はざりき。渠は大と云ふ上より見れば頗ぶる大なるものあり、横に歐羅巴、亞弗利加、亞細亞に跨りて擴れるのみならず、縦にグリーンキ、猶太、埃及の哲學宗教美術を併呑し、政治に於ては殊に獨特の發達を有したり。經濟上には世界の富を蒐集し、武力に於ては優に世界の霸王たり、斯る大羅馬が何が故に一朝にして亡びたるか、此研究は彼邦國民性格の根本に向つて一大彈劾を意味するもの也。罪は國民性格の根本にあり、渠は膨脹することを知り併呑することを知り。然れども夫以上に何等の意味をも有せざるなり。殊に渠は統一政策に於て失敗したり。統一は外形を美にすと雖も常に民心を腐敗せしむ。斯の如く大羅馬は個人性格の根本



の上に建設せられたるにあらず、大は大なりとするも其大や蛙が蛇を呑たる如きものに  
て、自から破裂して亡ぶるの外なきなり。大羅馬は未だ充分に革新せられずして斃れたり。  
世界的性格は未だ彼國民の中に陶冶せられざりき。大國民の襟度は未だ知らざる處なり。  
羅馬は國民の野性の上に建設せられて、萬古不易の國民的神智靈能を發揮せんとして、其  
緒に着きし時に當りて敗亡の悲劇を演じたるもの也。然るに茲に羅馬の形體は亡びたりと  
雖も、其統一的精神をして羅馬教會として不死の妙域に容らしめたるものは基督教の恩恵  
なりと謂はざる可らず、若し此宗教にして今少し早く國民の性格を陶冶したらむには、  
羅馬は單にチャチーとして存在するのみならず、此チャチーの生命に依りて羅馬帝國の興  
隆を見たるならむに、不幸にして獸性の羅馬は改悔して神性の羅馬を發揮するに到らずして、建國當時に甚  
たる死の病毒は國民性格の骨髓を蝕するに到りたれば、既倒廻瀾の大使命を全ふる能はざりき。之れ基督教の羅馬帝  
國の間に萬斛の紅涙を惜む能はざる所以なり。聖カーゴステヌスをして遙に『神京』を理想信仰の天に望むで羅馬  
の悲惨なる末路の悲劇を残して天に歸らしめたる邦土や眞に憐れなるものにはあらずや、『神京』の理想は國民性格の中  
には成就せられざりき。天國は天に在りて地には降らざりき。之れ何人の罪ぞや、他なし神性ある國民が獸性を打破す  
る能はずして、獸性の發動する處遂に神性を犧牲にしたる結果なりと謂はざる可らず。神性は到る處に於て獸  
性の爲に迫害せられて大殘遇を受けたり。基督時代のユヂヤ國民も獸性の爲に神性を犧牲

に供したり。神性は人類の生命にはあらずや、基督は乃ち其人なり。然るにユヂヤ國民は  
其神性を逆殺して自から獸性となりて亡びぬ。羅馬が基督教を迫害して撲滅せんとしたる  
は自己の死滅を意味することを知らざりし也。茲に於て余輩は徒に『大』を理想するものは  
其理想の中に既に死を抱きつゝあることを認めざる能はず、滅亡の爆烈弾は彼の腹中にあ  
り、斯の如き『大』は生きむ爲めの『大』にあらずして、死せん爲の『大』ならむとす。天  
に登らむとする如き『大』なる理想は事實に於て陰府の開拓に従ひつゝあり、去れば余輩  
が國運の振揮を冀ふと共に、地理的膨脹以上、富國強兵以上、躰育武育以上、一大主張一  
大理想の存せんことを冀はずむばあらざる也。之を人に譬ふれば地理的膨脹は肉の肥滿を  
意味し、兵の強きは骨の逞しきを意味し、富の多きは血液を作るに似たり。然れども人の  
人たる所以は肉、骨、血液のみにあらず、人若し斯の如きものならば人としては甚だ不完  
全なるもの也、下等動物にも劣るもの也。下等動物すら無意識の中に互に愛することを  
なし、鳥の將に死なむとするや其聲悲しと謂ふにあらずや、萬有學者は渠等を研究して情  
あり涙あることを認むるもの也。況むや人類に到りては物質以上の神智靈能なかる可らず、  
乃ち理想なかる可らず、國民は如何なる場合に於ても國家の主たることを知らざる可ら  
ず、國民の神智靈能は富國強兵、國土膨脹に勝るものあるを要す。賢明なる國民は國家の



照魔鏡也。彈正臺也。國民的良心也、指導者也、光明也。彼は王者の行爲方針と雖も非なるものは之を彈劾するの勇なかる可らず、輿論の美名を犯し來るも非なるものは大痛棒を加ふの覺悟なかる可らず、地に泰平を出さん爲に來れるにあらず、刃を出さむ爲に來れりの大決心なかる可らず、絶大絶高生命を賭するの大主張の爲には君を棄て親を棄て知人朋友を棄るの勇猛心なかる可らず、千万人と雖も單身邁往の鐵石心を要す、國民は凡て斯の如くならざる可らざるものなり。カーライルは英國々民は縦や印度全土を失ふとも文豪シエキスピアを失ふ能はずと喝破しぬ。之れ唯に天才を尊重するのみにあらず、彼が宇宙人生の秘密に接觸して之を解釋せんとし、或は彈劾し或は批評し或は讚美し或は痛哭したる大神智大靈覺の高貴なる所以を教へたるものと思惟せざる能はず、余輩も彼と共に叫びむとす、印度一帯の屬領地、斯土に堆積せる無類の財寶、此富源を擁護する無數の精兵、是等は悉く塵芥に委するも一個高大なる偉人の神智靈能は英國國民の生命なれば之を失ふ能はずと、人格の權能は國土以上なり富國強兵以上なり、彼は國土に君臨し富國強兵を叱咤するもの也。余輩は斯る權能ある人格を有する國民の幸福を豫想せざる能はず、余輩は曾て政治家たらむことを夢想し、新聞記者たらむことを想像したり。然るに余輩の偏狹なる觀察は今日の國民に理想的政治を求むるの愚なるを思はしめ、木葉天狗となりて紙喇叭を吹き

立つる新聞記者の人格を疑はしめ、遂にキリストの中に余輩自身の大なるものを發見して、國民の間に彼の神智靈覺を鼓吹するは自から伊藤侯大隈伯を凌ぐ大人物となるよりも、不朽の光榮なりと信じて、傳道の事業に一身を靖献するに到れり。我同胞は曾て露國の爲に樺太を失ひぬ。然れども余輩の事業に依りて一個眞面目の高明なる同胞を養成することを得ば、寧ろ却つて非常なる國家の利益なりと謂はざる可らず。余輩は臺灣を失ふとも一個の内村鑑三氏を有するは國家の誇さす可きものなるを思ひ、一個の姉崎正治氏は北海道全部を以て購ふこと能はざる人格なるを思ふ時に、國民性格の陶冶に當る者の自ら國家の至上者たることを任ぜざる能はざる也。然れども眞の人格は他人の養成し得るものにあらず、唯天と自身にて成さるゝもの也。『天』とは之れ余輩の理想世界を意味すると共に、自身は之れその理想の兒たることを意味するもの也。此二大意味を識悟體得するものは信仰自覺の賜なりと謂はざる可らず、信仰は外に向ふと共に内に向ひ自覺は内に向ふと共に亦外に向ふ、主觀客觀の兩界を合一して自家胸中に攝取し終るもの將にこれ信仰自覺の產物なり。宗教は此間に現はれ亦此間に來る。宗教と倫理とは遂に余輩の人格以外に存在するの理由なきもの也。唯茲に問題となるものは世界に現存する歴史上の宗教に就て世上幾多の識者が不満足を感ずること也。殊に余輩は渠等宗教家の狹量にして神佛耶儒俱に之れ陷擠を事とし感情の衝突を専らとし大人の風を有するもの殆むど尠なきを遺憾とす。茲に於てか門外漢として宗教の



展覽會にても見物せんとするものには、一種の好奇心を起さしむるならむと雖も、誠實なる青年求道者は五里霧中に徘徊せんとし、取捨撰擇に苦むもの多く公平なる學者はアイデアレルリジョンを唱道して、各宗を一九にせんとするもの起るに到る。或教育者は曰く今日の如く宗教界が渾沌を極むる時に當つては、學生に宗教を信せしめむとするも、指導に苦むことあり、故に速に理想宗教の興らむことを望むと、之れ今日に於ける一部の聲を尤も好く代表したるものならむ。時代の要求は將に宗教に存することを自覺しつゝあり、唯此要求に應ずる者が偏狹陋見を顧ざるが故に、満足を與ふること能はざるが如し。然らば理想宗教は如何にして建設せらるるか、學者の書齋よりは容易に産れざることを認めざる可らず、井上博士の如きは斯問題を頗る熱心に研究し、解決の方法を講じつゝありと雖も、余輩は學者の冷靜なる頭腦の中に果して宗教は發生するものなるや否やを疑はざる可らず、保羅は基督の宗教の中に理想宗教を確認して心身を靖献するに到れり。基督は自己の宗教的使命を自覺して犠牲の生涯を送れり。宗教は斯の如く生命なる可らず、自から醉ふと共に人を酔はしむるものなる可らず、自から信する處に一身を献げて顧みざる至誠熱情を與へざる可らず、然るに博士の理想宗教の如きは身を以て之に當るの勇なく、従つて人をして一身を献げしむる程の生命を與ふること能はざるもの也。故に博士の意見の如きは單に人心の向ふところ時代の要求する思潮を紹介したるものと觀察する以上に、人生問題の解決に資するものなきを認めざる可らず、寧ろ此點

に於てはユニテリアンの有志者の如きは至誠熱情の欣仰す可きものあるを否む能はず、而して之れ博士の呼號に先じつて時代思潮の嚮ふ處を察し、多少の解決を與へむとして盡力しつゝある宗教倫理運動なりと謂はざる可らず、余輩は博士の言論よりも更に一段の尊敬と興味とを斯運動の爲に灑がざる能はざる也。如何となれば渠等は書齋の道樂に宗教の研究を爲すにあらずして、自由宗教則ち理想宗教の爲に身を以て盡しつゝあるを以て也。理想宗教は渠等の生命と謂ふ可き也。渺くとも生命となりつゝある也。然るに茲に注意す可きはカントは萬國の大學生を救ふの能力だに乏しきに、基督釋迦は世界億兆を救ふの能力あること也。之れ一は道理のみにて宇宙を解釋せんとするに對し、一は哲學と共に神秘の奥に徹底しつゝあるが故に、冷靜の奥に溫和なるものありて萬人をして隨喜渴仰せしむるものある也。人心の靈妙なるは今更謂ふの必要なしと雖も、無より有を生じ死より生を發せしむるが如き作用は人心の實驗する處のもの也。人の心は單に冷かなる原理を明にして満足するものにあらず、其原理は必ず肉を有し血を有するに到るにあらざれば満足せざるもの也。余輩の宗教に對するにも斯の如きものある也。自身の對境たる理想世界は此宗教の範圍に屬するもの也。而して此宗教は神、儒、佛、耶の四大宗教に區分することを得て、我邦の信仰界は空前の混雜を極めつつある也。故に余輩は曾て大膽に此四教を破壊して、而して失ふ可らざる根本原理を得むとて、自家胸中に於て悉く之を破壊し盡したるに、如何にしても破壊し得ざる三大原理を



發見するに到れり。乃ち先づ第一に自我の實在にして、我と云ふ意識の存する間は我は無なりと思はむとするも、無なる我が其處に現れ來ることを否む能はざる也。之れ實に小我の存在を認めたるもの也。第二には小我の對境たる大我の實在也。我の存在は如何にしても疑ふ能はずと雖も、我の生は死の伴ふあるを如何ともする能はず、病を解脱せんとするも意の如くならず、老ひざらむと欲するも心に委せず、我の智は有限を感ぜざる能はず、我の意は絶對なりと自得せしめず、我は有限の中に生滅死苦するものなるを豫想せざる能はず、保羅の所謂あゝ我れ悩める人なるかなとは自己の有限を認むる者の衷心の絶叫悲鳴也。茲に於て絶對定住の大我は人生の必要に於ても認めざる可らず、大我は永遠の生命にして不滅の光明也。彼は無始無終也。宇宙は彼の神殿也。彼は萬有の王也。彼は死なくして生あるのみ、彼は絶對的實在也。而して此大我と小我とを合一せしむるものは基督の心也。釋迦の心也。此大我は個性の父なる神にして、個性ある小我は神の子なりと信じ、加るに此二者は神と我とは一なりとの基督の自覺の中に融合せられつゝあるを教ゆるもの、之れ余輩の基督教也。而して余輩と感を同ふするもの新佛教徒諸氏の中にも甚だ多きを覺ゆれば、渠等の中にも基督教を見出し得るもの也。之れ四大宗教を貫通する根本原理にして此三大事實は如何に破壊せむとするも破壊する能はず、疑はむと欲するも疑ふ能はずして、依然余輩は基督教の立脚地に歸り來りて胸中無類の喜悅に充されたるを覺

ゆ。曰く我を信するものは死ぬることも活く可し、曰く我を信するものは限りなく死を見ざる可しと、之れ有限の生活に在りて無限の生涯を送るもの也。余輩は此我を見ざる可らず、此我は神に見ることを得ると共に自我に見ることを得、基督に見ることを得ると共に自己に見ることを得るもの也。更に適切に謂へば此「我」の中に神と基督と余輩とを認め、始て定住不變の生涯に入ることを得たるものと云ふ可し。建國の理想は個性の發展に此大なる我を顯現すると共に、國民的生活の中に此大なる我を實現するに存す。之れ國土膨脹以上の大理想なり、富國強兵以上の大主張なり、國家存立の理由は茲に存することを知らざる可らざる也。

余輩は常に聖經を熟讀するに當つて、基督耶穌がエルサレム城街を去ること廿七町、記憶す可きベタニヤの邑にて求道者シモンの招待を受けて晚餐を共にせられたる時、同席したる復活者ラサロの姉なるマリアが、來つて基督耶穌になしたる麗しき行爲は人類の靈的活動の極致を示したるものと感ぜざる能はず、此一段の記事は偉大なる人格發展の教訓を示すもの也。國家も個人も此キリストに對する美佳人の心情に學ばざる可らざる也。彼女は『眞正のナルダなる價たかき香油一斤を携ひ來りてイエスの足に塗り、亦己が頭髮にて其足を拭へり、油のにはひ徧く室内に満てり』。あゝ彼女は何が故に斯る奇抜なる行爲をなせりや、之れ乃ち愛弟ラサロを復活せしめ給ひし感恩の情を示したるものに外ならず、永遠の生命なる基督はラサロの死を打破し畢れり、ラサロは最早や基督の生命と合一したり、彼の妃



姉は其有様を見て感謝せざる能はず、マリアは此基督の大なる威能は神の力なると共に基督の中に動ひて已む能はざる愛の全能力なるを認めたり。基督の生命は愛なることを知らずして已む能はざりき。彼女は此生命に感動し香油を灑ぎ自己の王冠たる頭髪を以て之を拭ふ處に犠牲献身の大精神を示したり。彼女は實に深き感激の熱情を有したるが如く。靜にして思慮深き彼女の胸底にはキリストの胸底に燃へて已む能はざるもの、ありし如く、彼女の胸底にも此一大勢力の潜みを見る也。人の高貴なる所以は偉大なるものに感激して自ら立つの勇ある處にあり、大を認むることは何人も困難なることにあらず、唯其大に感激して精神の靈動其極に達するに到るもの、稀有のこと、謂はざる可らず、姉なるマルタは好く給仕を成すの伎倆を有したり、然れども彼女は妹程に感謝し得る性格を有せざりき。彼女は若し細君ならむか主人に對して好箇の世話女房なりしならむ。外交家の夫人にても成らむか交際社會は彼女の手腕に依りて世間に花を咲かせたるならむ、彼女は斯の如き性格の人なりき。深くも高くもあらざる也。聖女の面影は彼女の中には認むるに困難也。然るにマリアは宗教的情感の根底深く聖女たるの性格は彼女の美質なりしならむ。而して此二人は人類各自の二大性格を代表したるものにあらずや、手腕の人と性格の人は人類の二大側面也。人は何人とも雖も此二大側面の孰れかの側に樹つ可きもの也。中には此二大側面を一人格に具有するものもあらむ。我邦民は今や如何なる側面を代表しつゝあるか、八方美人主義は世話女房、外交家夫人の金科玉條とする處にあらずや、我國民は曾つて八方美人主義の名譽を得たり。上は

伊藤博文侯より下は博文館の主人に到るまで八方美人主義の使徒なりとは、日本のカーライルの痛罵したる處也。此名譽ある國民は才を弄することを樂む種族也。小刀細工を成して伎倆ありと誇る動物也。然るに今や渠等は性格の國民たらむとするに到れり。猿智慧の無遠慮なる活動に脆くも失敗したる國民は、漸く主義を重しとする性格を要求するに到れり。性格ある國民は地上に日本帝國を膨脹せしむるに先ち、主我的性格の中に不滅の帝國を建設するもの也。渠等は地上の日本を天上の日本にまで膨脹せしめんとする也。渠等は横に地理的膨脹を試むるよりも、縦に天國を自我性格に占領せんとする也。日本帝國の膨脹は乃ち國民性格の膨脹ならざる可らず、國威の發展は國民性格の向上ならざる可らず、大國民なくして大帝國は産れず、大人格はなくして大國民は産れず、大個性なくして大人格は産れざる可し。茲に於てか性格の陶冶、修養、訓練は軍備擴張に勝り富國強兵に勝り滿韓保全に勝る。手腕ありて性格なき國民は筋肉ありて血なき涙なき國民也。性格の存する處に主張あり理想あり抱負あるもの也。手腕は此性格に伴はざる可らず、或意味に於ては手腕に缺るあるも性格に富まざる可らず、殊に今日の日本は手腕の人多しと雖も性格の人甚だ尠なし。之れ天下國家の深憂大患にはあらずや、然れども悲むを已めよ曾て高山彦九郎を有し、平の清盛を有し、西郷南洲を有し、近松門左衛門を有したる國民は性格の國民たらざるを



得ざる運命あり。渠等は感激の人なり主我の人なり理想の人なり、性格の國民は將に渠等の如くにして更に渠等よりも大ならざる可らず、渠等は今日の國民の血が單純にして淺薄なれども性格ある古人の血を繼承したることを證明するに外ならず、將來の國民は渠等を學ぶ可きにあらず、渠等の發揮する能はざりし性格を發揮するに在るのみ。現今性格の國民を養成せんとして活動するものは、明治文壇特種の異彩たる樗牛會あり、此團體は日蓮の中に國民性格の偉大を認めたる故高山樗牛の性格を中心として組織せられたるもの也。彼は明治文壇の伊太利なり。一種のローマンチズムは彼等の運動に依りて鼓吹せらる。彼等はマリアが基督の中に自己の生命の大なるものを發見して、感奮激動のあまりその身の靈を彼の足下に献げたる如に、樗牛、日蓮、ニーチェ、ワグネルの爲めに感謝靈動して大なる燄に燃へつゝあり、余輩は渠等に多大の同情を表し殊に姉崎嘲風氏には敬服措く能はざるもの也。然れども樗牛氏が日蓮を偉大なりとするが如く、余輩は不幸にして日蓮の偉大を認むる能はず、余輩は寧ろ日蓮の偉大よりも、彼を巧に理想化したる藝術家としての樗牛の偉大を認むると却つて勝るものあり、樗牛と日蓮とは性格に於て一致するものありしは疑ふ能はず、其結果は日蓮をして餘りに多く自己の性格に融化したり。或意味に於ては日蓮の上行菩薩の自覺は、『我が新福音』の鼓吹者宮崎某が世界三個の預言者は釋迦、基督に次で乃ち我なりしと大喝するに似たりとも見るを得可し。我は神なりと叫ぶころ宮崎某が却つて日蓮よりも自覺の大なるものありやも

知る可らざる也。余輩は勿論多く日蓮を知るものにあらず、彼の遺文録は十數年前友人より借りて讀みたる位のもの也。其時の余輩の所感は日蓮の執着心と余輩の執着心とは相合して壯快謂ふ可らざるものありき。此快心謂ふ可らざるものは故樗牛氏に於て異常の崇拜と理想とを生ぜしめぬ。余輩は基督に感激する程に彼に感激する能はざりき。これ余輩の小なる所以か、果た日蓮の大なる所以か、未だ明白に斷定すること能はざる也。而して余輩の尤も感激する能はざりしものは、日蓮の豫言者的大論策として後昆に残れる立正安國論ならむ。其活眼の大ならざる其膽識の深からざる余輩は世として案下に此論策を投じ去れり。余輩は彼の中に北條時宗以上位の自覺ありしを認むと雖も、宇宙を吞吐する底の大性格は認むる能はず、彼は八百年以前の一個出色の人格なりしならむ、然れども世界の運命を左右する底の大性格にあらざることは余輩の眼に映する處の彼也。八百年後の日本と世界は彼一個の人格によりて何等の増減を感ぜざるものありやを想はしむ。余輩は寧ろ國民的最負目を離れて對岸大英國に視線を放つ時に、現代の大立物故セシルローツを追想せざる能はず、余輩は彼の氣魄に於て日蓮に勝る性格識見を觀取せずむばあらず、余輩はローツの中に大英國國民性格の一大權化を視る也。彼の如きは世界の運命を左右せんとする大英國國民の英氣の感發したるもの也。彼は英國國民の一朝一夕の産物にあらず、數百年間蓄積培養したる大英國國民の氣魄精神はローツとなりて化身したるもの也。彼の豫言者的大論策はアングロサクソンの大合同にあり、白哲人種獨英米の三大邦國を打つ



て世界的大帝國、若くは大共和國を組織せんとするに存す。而して正義自由平等の三大綱領に依りて世界を支配し、各民族の文明を開拓せんとするもの也。彼はアングロサクソンの代表的大精神也。クロンウエルを生じミルトンを生じたる大英國民は、詩人の夢と義人の意志とを綜合融和したる大ローヅを産出した。余輩は世界的大國民の性格は將に彼の如くならむと推賞せざる能はざる也。彼は此理想の爲に獨身の生涯を送れり、遺産は悉く此理想を實行せんとする學生教育の爲に献げられたり。彼は不可思議論者の如しと雖も正義自由平等は神の意志なりと信じたり。彼は世界に天國を成就せんが爲にアングロサクソンの使命を自覺し、其鋼鐵の如き意志を以て唇氣樓の如き夢を行はむとしたり。然れども一個の日蓮の背後に無數の日蓮ありし如く、一個のクロンウエルの背後に無數のクロンウエルあるが如く、ローヅの背後には無數のローヅなる可らず。現代英國が世界に雄飛する所以はローヅの背後に無數のローヅある立證ならむ。西哲曰く支那に於ては一個の帝王を有し、希臘に於ては數箇の帝王を有す。雖も、獨逸に到りては悉く帝王なりと、而して之れ英國民の爲には適切な批評なりと謂はざる可らず、彼は一個のエドワード皇帝を奉戴するのみならず、彼等自から帝王たるの威信を有するもの也。彼等は好く自己の意志に依りて自己を支配し得るもの也。天下に君臨し國家を支配し得る人物は多しと雖も、自己を支配し得る帝王及び國民は其數多からざるもの也。然るに渠等は此自己を支配し得る帝王たるもの也。大なる皇帝の背後には大なる王侯の人格を有する多くの國民なる可らざる也。余輩は此點に於て

現時の我同胞に嫌厭たらざるものある也。渠等の中には未だ自己を支配し得る性格あるものを見ざる也。余輩は曾て白石嘶なる世話物を讀みて封建時代の武士的性格が水呑百姓の娘にまで現はれたるを思ひ、大に天來の精氣に打たれたるものありき。封建時代に於ては武士的性格は獨り武門武士の特有たりしものにはあらず、百姓も町人も悉く武士的性格を有したるならむ。然るに今や是等の性格は全く破壊せられて再び視る可らざるにあらずや、國民性格の墮落も茲に到つて窮まれるを見る。今や一個の海老名彈正氏を除くの外、精神的青年學生の偶像となれるものなく、八百年前の日蓮の氣力を再び見むとするも能はず、況むや對岸大英國のローヅに到つては其影だも求むる能はず、國家として大ならむとする帝國は、個人として尤も小なる憐れなる者と成下れり。

余輩は茲に於てか『我』と云ふ問題に歸らざる可らず、日蓮が不惜心身の『正法』と謂ひ、ローヅの『神』と謂ひ、宮城野しのぶの『武士道』と謂ひ、是等は自己以上の『我』を意味するものにあらずや、渠等は皆自己に依りて自己の大を養ひしものにあらず、自己以外の『我』に依れるもの也。而して此自己以上の『我』は余輩の欣仰す可き理想にして、亦余輩の同化し去る可き實在也。大なる我を發揮せんとせば其根本を茲に發揮せざる可らず、余輩は日蓮、ローヅの徒たらむが爲に彼以上の大なる我を信仰す可きもの也。絶對の我に同化せざる可らず、宇宙の精神を汲まざる可ら



す、余輩の識見にして日蓮、ローズに停まらば彼等と併行するの人格なることだに容易のみにあらず、彼等の靴の紐を解くに過ぎざる可し。蓋し余輩の彼等に學ぶ可き處は自己に依りて自己の大を養ふたるにあらず、自己以上の大なる我に養はれたることなり。彼等は此我に感激したるものなり。此我に對して衷情の燃へて已む能はざるものある也。彼等はマリアが基督の膝下に香油を獻げて情感の激動、意志の躍動を示したる如く、彼等は自己以上の大我に自己を靖献するにあらざれば満足せざりき。彼等は自己以上の大我の中に自己の大なるものを發見したるが故に、呼吸相通ひ血液相通するの思ひを以て其大我に攝取せられたるものならむ。感激躍動は自己以上の物と何等の交感なくして起るものにあらず、自己と尤も大なる干係ありて始めて興るもの也。文藝批評家は嗜昔遠藤武者が袈裟に焦心したるを評して、彼は袈裟の中に自己の極致を見出したるものと謂へり。故に彼は袈裟を殺すと共に古き彼は死せざるを得ざりきと、余輩は戀愛に燃ゆる青年男女の心情に對する時に、亦此評者の言を以てせざる可らざるものあり、彼等は自己の美なるもの聖なるものを互の心情に發見して、之を戀ひ慕ひ之に感激躍動するもの也、此心情は將にプラトリーのアイデアに對するエロースとなるものにあらずや、宇宙の大我に自己を發見して、不惜心身は愚かのも縦や火の中水の中を辞せざる戀愛の至誠なるにあらずや、熱心なる信仰は此燃へて已まざる心を云へるもの也。ローズ日蓮等は此理想大我に向つて戀愛の至誠を獻げたる好男兒也。此點は大に彼等に學ばざる可らず、徒に彼を崇拜するも無益のものと也。寧ろ彼の信仰に學ぶに若かず、現代の日本國民に於て殊に然るを觀取せざる能はず。余輩は徒に天下の青年が英雄を崇拜するを見て、あまりに感服する能はざる也。英雄を崇拜する程の至誠熱情あらば何が故に神を信じ

宗教に歸依すること能はざるか、之れ彼等自らが偉大なる人格となる所以の道にあらずや、余輩は今日の我邦に此信仰に依りて人格を發揮したる眞人物の崛起を希望せざる能はず、横に廣からむとする國民の性格は、更に天に向つて暢びざる可らず、余輩は地上の日本より更に天上の日本に發展向上せざる可らず、而して商店の傭人、街頭の車夫馬丁の中にも王侯の人格を觀取し得るに到らざる可らず、一個の英雄の崛起に勝りて十人の健全なる市民の養成は却つて國家の至寶なりと謂はざる可らず、而も之れ單純の修養に依つて來るものにあらず、自己の大なる者を神の中に發見するの獨創的感激躍動なる可らず、自己の中に大なる神を發見するも亦然り。感激躍動は由來我國國民の特色なり。唯甚だ物質的なるを悲むのみ、國民の感激は今少し物質以上の世界に向はむとを要す、大なる我を創開し來るは物質以上の世界を開拓する所以也。此「我」の創開如何は我國運を左右する精神的威力に多大の影響ある者也。將を獲むとすれば馬を射よとば俚言の教ゆる處なれども、余輩は宇宙を獲むが爲に神を射ざる可らず。主觀の世界は實に絶大の世界なり、我主觀は直に宇宙の主觀に通ずるものにあらずや、基督の「我を祝しものは父を見しなり」の消息を窺ふに當に之を眞理と恩寵の倫理的方面より玩味し得るのみならず、亦之れ自覺と主觀の哲學的方面より觀察し得るならむ。余輩は之を倫理的に解釋して多大の教訓を擷取すると共に、哲學的に玩味して更に一段の妙趣あるを覺ゆ。乃ち倫理的方面より見れば基督の聖徳の中に神の聖徳の現はれざるを想見するものなれども、哲學的方面より見れば基督の主觀と神の主觀とは相合し、基督の自覺の中に神の自覺を見る也。基督の主觀の世界は實に大なるもの也。彼は神を敬ふと共に神と自己の合一を確認したるもの也。神



は萬物を我に賜ふ』の靈覺の中に森羅萬象を悉く攝取し去るもの也。彼の三寸の方寸は宇宙を吞吐して尙ほ餘裕綽々たるものある也。『我はアブラハムの在らざりし先より在る者なり』とは彼が歴史以上の實在者たることを自覺したるもの也。歴史上の聖人賢者も彼の自覺の前には何等の權能を有せざるもの也。彼の自覺は歴史研究の結果にあらず、萬有思索の産物にあらず、彼自身と神との覺得なり。從來の神に就ての思想は彼の自覺に依りて一大變遷を示せり。是迄猶太人の神は雲に乗りて現はれ、電光雷鳴に其姿を現はし、颶風に鞭ちて來れるに拘らず、基督に到りて人格に内在する處のものとなれり。萬有を超越したる神は萬有の中に在るのみならず、基督の主觀界に實在する處のものとなれり。彼は神の殿堂たるのみならず、神の化身なり。『父と我とは一なり』の自覺に依れば彼の外に神はあらざる也。神を萬有に求め史乘に索るは眞の神を覺得する所以にあらず、眞に神を覺得せんとするものは主觀に之を求めざる可らず、我心界の最高最上最聖の第三の天に尋ねれば、茲に神を仰ぎ見ることを得る也。大我の聲は茲に嚴然として響き震然として聞ゆる也。彼は眞に母の慈愛を有する父也。彼は財産を蕩盡して遠路に放浪せる放蕩子の親の如く、弱くして迷ひ安く小にして大志なき罪の子を攝取して、之を光明の子となし神の子となすの法力を有す。小なる汚れ多き我は大なる慈愛多き我に抱かれて、『父と我とは一なり』の定住不變の妙趣を覺得するを得る也。人は萬物の主長にして彼は萬有の王也、彼は萬有の有せざる世界を持って。神の世界、乃ち主觀の境界これ也。萬有の中心と人類の主觀とは相合するもの也。人類

の主觀を離れて萬有の主觀界に有せざる也。人類の主觀は無始無終の世界を領し、無限悠久の乾坤を獨占す。故に神の世界は人類を離れて存するものにあらず、人類の胸中に有して而も人類以上に及び時間以上に及ぶ主觀に存するもの也。肉體を有する人は晨に紅顔ありて夕に白骨となる、五十年の短時間すら生存する能はざる弱き者なれども、此肉體の人が開拓したる大主觀界を有せせんか、彼は千年萬年億年を占領して尙ほ餘あるもの也。肉の人は五十年の人なり靈覺の人は永遠の人なり、肉の有限界を蹴破りて無限界を開拓したるものは、基督夫れなり釋尊夫れなり。余輩基督を師とするクリスチャン夫れ也。基督の宗教は基督の外にあらず、余輩の宗教意識は基督の中にあり。余輩は基督を離れて宗教意識の極致を語る能はず、基督は亦余輩を離れて自己の宗教の他人に及ぼす影響を語る能はず。『我れ最早活くるにあらず基督我に在りて活るなり』、余輩の宗教意識は斯の如く彼と合一するにあざれば満足する能はざる也。基督の宗教は基督てふ大主觀を有する大宇宙の中にあり、『父と我との合致』は彼の宗教なり、余輩は彼の宗教を鑑寫したるものに外ならず、之れ余輩が自から神と稱するに勝り豫言者と稱するに勝り北條時宗以上の自覺を有するに勝りて、榮譽あり實力あり權能ありさなす處也。基督は曰く『女の産みたる者の中にパテスマのヨハ子程大なる者はあらず、されど神の國の最小の者とも雖も彼よりは大なり』と。余輩は茲に神、豫言者を自稱するの勇なき凡人也。然れども此凡人は王侯の頭上に鐵骨を加ふことを辭せず、寡婦、孤兒に萬斛の紅涙を惜む能はざるもの也。天下萬衆は今尙ほ此凡人を要するもの也。渠等は此凡人に學ばざる可らず、此凡人の宗教意識を玩味せざる可らず、此凡人に從はざる可らざる也。保羅は曰く『我に學べ』基督は曰く『我に従へ』と、彼に學び彼に従ひ得たる



人格に依りて國家生存の理由は一新し、建國の理想は更に一大發展を試む可き也。現代の日本は更に一段の心胸の開拓を経て一大變轉をなす可き也。

## 第六章 偉人の理想と國家の理想

朕は國家なりとは曾て國民個々の存在を認めざる専制君主の揚言したるもの也。斯の如き事を明言する君主は往々にして愚なるもの也。自己の權勢の大を認め、自己の意志の國民を超越するを認め、臣民は自己に默從するの外何をも認めざる倨傲、尊大、不遜の馬鹿君主の得意を懷はしむ。去れど賢にして明なる君主は國家と國民との別を知らざる也。自己を國家と視るのみならず國民と見るもの也。自己を主權者と考るのみならず同胞なりと考るもの也。彼は國民の全体なりと思惟し同胞の總体なりと思惟するもの也。彼は自己を没脚して國民全体の意志に依つて活くるもの也。故に彼は國民の貧苦を見て自己の貧苦と感じ、寵の烟の賑ふを見て自己の富めるなりと感じ、貴賤を論せず民は國の基なりと感ずるもの也。彼は民の尤も清く高き識見と思慮とを領解して色讀體得するの仁徳なかる可らず、彼は輿論に勝りて正義の聲に耳を傾けざる可らず、彼は國民の意志の聲に現はれざる

處を達觀せざる可らず、彼は眞に八面玲瓏公平無垢にして清健の意志なかる可らず、彼は君主たると共に國家たり國家たると共に國民たらざる可らず。彼は國家とは自己の意志を行ふにあらずして、國民の意志を行ふ處なるを知らざる可らず、彼は自からの意志に依つて存在するにあらずして國民の意志なることを知るを要す。之れ一國の君主は哲人たるを要する所以也。プラトリーの着眼の透徹する所以は茲にあり、然れども此哲人や推理默想の冷血漢を云ふにあらず、直覺的情熱ある活哲人を云ふもの也。大なる哲人は現在を離れて超越界を冥想するものにあらず、彼の腦中には既に天の宿るあり、無限の經綸の在るあり、高明なる識見の存するあり、時空を一貫する意志の強きあり、彼は宇宙の代表者なり、理想界の顯現なり、彼は自己眞我の發揮にして人類衷情の發露也。故に彼の使命は『時』の世界を開拓するにあり、國家と云ひ政治と云ふ差別世界に大宇宙を顯現するに存す。余輩は今に於て理想的英雄の摸型を描きつゝあるを知る。余輩は英雄よりも國民個々の大ならむことを主張すと雖も、其大なる個々の意志を行ふ處のものは、矢張一個の英雄なりと云はざる可らず、大なる個人は大なる英雄を造るもの也。大なる國民は大なる帝王を創造するもの也。斯る英雄は自から英雄を以て任ずるものにあらず、凡人が凡人たることを知らざる如く英雄は英雄たることを知らず、然れども百年千年の未來には其人格が嘗に大人のみ



ならず大人の大なるもの、嘗に聖人のみならず賢者の大なるもの、嘗に將軍のみならず將軍の大なるもの、然り、より大なるものあることを觀取するに到るもの也。余輩は此種の人格をフロレンスのサボナローラに見ることを得、瑞西のツイングリーに見ることを得、蘇格蘭土のノックスに見ることを得、雖も、更に高大にして深嚴なる人格をイスライル國の建設者モーゼに於て見ることを得る也。余輩は未だ嘗て彼の如く大なる人格を見る能はず想像する能はざる也。サボナローラも、ノックスも、ツイングリーも、其事業と人格とは要するにモーゼを師表として學びたるものならず、渠等の人格の中に小モーゼの顯現を認むることを得る也。然れども建國者モーゼに到りては更に大、更に高、更に深なるものあり、渠は古今獨歩の人格なり、余輩は渠に於て帝王の極致を認むるもの也。世の帝王は渠を師とす可き者ならむ。渠の意志は直に之れ國民の意志なりしと雖も、國民の意志よりも更に大なる意志の渠の全心全靈を支配したる者あり。何ぞや上帝の心乃ち之れならむ。國民の意志は神の意志ほど大なるものにあらず、隨つて國民意志の思ひ及ばざる處に神の意志は存するものあり、國民の師表たる王者は國民の意志よりも大なる神の意志に依つて國民に臨むの覺悟なかる可らず、此意志ありて始て國民の豫望を全ふするを得る也。渠は王者の家系に産れたるものにはあらず、亦渠は王者

たらむとして産れたる者にはあらずる可し。然れども渠は王者たる可き天才なりき。造化の意志は渠を王者たらしむるにありき。余輩は高等批評家の理窟としてモーゼを歴史上の人物とせざることを聽けり。彼等の或者は埃及よりカナンに到る四十年間のモーゼの大事業を目して、一種の小説と考ふるものあるなり。其理由は埃及バビロンの古史に見るも事實と信するに足る材料なきが故なりと。余輩は彼邦古代の古文學を知らざるもの也。故に假に評者の批評は正鵠を得たる觀察とせんか、ヒブリユウ文學の價值は更に幾層を加るものあり、縦や記者の頭腦の中に於ては一種の想像に外ならざりしとするも、聖書文學として既に存在して余輩之を讀むものを或は感激せしめ、或は涕淚滂沱たらしめ、或は感奮興起せしめ、或は靈動已む能はざらしむる血あり涙ある文學中の喜劇悲劇は、余輩をして實在の人格たることを思惟せしめ、苦心慘怛の事蹟たる信仰を與へしめて、事實の世界を跳躍するの感あらしむ。單に古代文學者の創作に成る物とせば世界は空前絶後の大文學を得たるものと謂はざる可らず、モーゼの上巻と稱する無名の記者はホームル、ダンテ、シエキスピアの諸文豪を綜合するも尚ほ及ばざる造化の伎倆を眞に凌駕する底の大天才なりと謂はざる可らず、詩人の創作は理想を現實化したる物にて、殊にモーゼの人格を中心とせざる歴史の如きは、空前の大理想の大現實化と謂はざる可らず、余輩は之を事實と信するを以て創作的大天才に對する相等の敬禮なりと信するもの也。況むや大理想を大現實化してモーゼの人格を創造したる如きは、歴山大王以外、ミーザル以外、子ブカデ子ザル以外、別に理想的大人物あることを教へたるものと謂はざる可らず、野獸的英雄豪傑に



相対して更に神性的英雄豪傑あるを示したるものはモーゼの歴史也。渠に依りて英雄の意義は新なる者となれり。神々しくなれり。野性は根底より淨められて神性となれり。英雄の事業は渠を俟つて新なる光彩を添へられた。自然の意志の強大なる者を世の所謂英雄なりせば、超自然の道義的意志の勇健なる者をモーゼを俟つて開かれたる英雄の生涯の新生面なりと謂はざる可らず、渠は眞に詩人の創作になる人格の如くローマンチカルなるもの也。飄蕩より駒か躍り出る如き面白き生涯也。然れども余輩は之を不幸にして單に小説、詩歌、戯曲とのみ信する能はず、人文發展の歴史に於て尤も光榮あり尤も意義ある活歴史なりと信せざる能はず、余輩が斯く信するは確實なる古史の有無に依るにあらずして、人類歴史の大損害は之を事實と信せざるにあるを以て也。人類の發展、國家興亡の歴史は之を事實と信せざる能はざる程に戯曲的なるものあれば也。

彼は宗教的人格と政治的人格とを具有したるもの也。祭政合一は彼の人格に於て全ふせられたり。彼は偉大なり深嚴なり、而かも慈愛なり温情なり。その人格は天地開闢以來未曾て視ざる理想の王國の建設者たるに尤も適切のもの也。世界は幾多の國家を有し、幾多の歴史を有すと雖も、未だモーゼの如く「信仰」と「まつりごと」を合一したる地上の理想的王國は認むる能はざるもの也。彼の事業は獨創的なりその性格は直覺的なり、彼は理想に富みて實際の活手腕を有したり。彼は將來起り來る宗教的社會改革家の鼻祖なり、然れども彼の如き人格は未だ彼以外には現はれず、彼ののみは古今獨歩にして萬古を照破するの

人格也。イスライル民族は其王國建設の理想を彼に依りて覺得したり。天國の實現に於て宗教と政治との尤も密接なる干係あることは彼の深く意識したる處也。故に彼の宗教は國家家庭の冥福を祈るのそれにあらず、直に治國平天下の問題也。彼の神は死せる者の神にあらず、直に活ける者の神也。其神の天地に於ける經綸と政治家の國家社會に對する經綸とは相合す可きものなるは、彼の早くより認めたる處也。故に彼の眼球に映じたる神は、超自然的の意味ある精神界の君主也。民族の首腦也。エホバは我儕の王なりとは彼等の深く意識したる處也。殊にモーゼの生涯と其事業とは神を君主として其使命の爲に盡瘁努力したる結果也。彼が民族に對する政治的大理想の明白に成れるものは、埃及に於ける百万の同胞を率ひて四拾年間の大旅程に登りたる後也。シナイ山は彼の理想の表白せられたる聖山也。四拾年間の大旅行の中心は將に茲に存するもの也。余輩は彼に依りて三個の大理想を認めざる可らず、一は宗教的倫理主義なり、一は宗教的社會主義なり、一は宗教的帝國主義なり。彼の倫理主義は十誡に於て明に知ることを得る也。曰く盜む勿れ、姦淫する勿れ、殺す勿れ、虚偽の誓を立つる勿れと、之れモーゼの宗教的倫理主義なりと謂ふを得べし。峻嚴にして高明なるモーゼの倫理的性格は、十誡中の數句の中に發露せられたり。竊盜犯と殺人罪とに相對して姦淫罪と虚言罪とを同一の罪惡として戒飾したるは、眞に驚く



可きの大憲法なりと謂はざる可らず、『殺人』と『虚言』之を法理的立脚地より觀察しなば、固より同一の罪惡とは認むる能はずと雖も、道義的意志の最大高調に在りて之を考ふれば、倫理的性格の尤も清く高く強きことを示すもの也。『殺人』『竊盜』の大罪なるが如くに、姦淫虚言を大罪なりと誠認する倫理的性格を國民の中に訓練するにあらざれば、人類生活の意義を全ふする能はざる可し。彼の社會主義は單純にして幼稚なり。然れども其大なる社會に對する理想は此幼稚なる物の中に胚胎しつゝあるを思はざる可らず、利未記廿五章に掲げられたる『安息の年』の制度の如きは、芥子種の如き社會主義にして歲月と實驗とを経て成長發展しなば、空の鳥を宿らしむる大樹の如く世の弱き者の生活状態を救済す可きもの也。而して其安息制度は人が六日間勞働して七日目に休業する日曜制度を擴張したるものにて、乃ち六年間働きて七年目には全く働きを休みて土地にも人にも休養を與るもの、更に七年を七度繰返したる五十年目には奴隷あらば悉く奴隷を解放し、金錢の貸借は此年に於て悉く帳消となし、土地を賣買したる者も悉く相互に戻すもの也。故に五十年目にはイスライル民族の生活上の差別は或程度まで打破せられて平等均一に歸る也。之れ不完全なれども社會主義實行の年にあらずして何ぞ。大人の心の中には同胞は赤兒の如し。モーゼの眼より見たる國民は現在及び將來を一貫して愛兒たりしもの也。慈眼は同胞の差別を

打破して平等に歸らしむ。モーゼの心情は仁徳深厚なる理想的帝王を忍ばしむ。如何に彼が民の幸福を自己の幸福となせしやは此一事に據るも想像し得て餘りあるもの也。若し夫れその帝國主義に到りては現代の淺薄なる帝國主義者が三たび玩味するの價值あるもの也。曰く『汝等若し我法令に歩み我誠命を守りて行はば、我平和を汝等に與ふ可ければ、汝等は安むじて寐るを得む、汝等を懼れしむるものなかる可し。我また猛き獸を國の中より除き去らむ、劍汝の國を行きめぐることも有らじ、汝等は其敵を逐はん、彼等は汝等の前に劍に殞るべし。汝等の五人は百人を逐ひ、汝等の百人は萬人を逐あらむ、汝等の敵は皆汝等の前に劍に殞れん』亦曰く『汝等若し我汝に命する此一切の誠命を善く守りて之を行ひ、汝等の神エホバを愛し、その一切の道に歩み之に附隨しなば、エホバこの國々の民を悉く汝等の前より逐ひ拂ひたまはむ、而して汝等は己れよりも大にして能力ある國々を獲るに到らむ』と。之れ上帝の示す處として國民に宣言したる帝國主義の要旨也。天行の健なるが如く神意に合したる國民品正の極致を完ふしなば、帝國の膨脹期して俟つ可しと謂ふに在り、斯の如き帝國主義は現代世界の大潮流たる帝國主義に更に新なる教訓を示すものならむ。余輩は以上の三大主義を以てモーゼの建國の理想なりと思惟するもの也。之を我邦の神武に比すれば其人格識見の大小高下に於て頗ぶる徑庭あるを忘る可らず、余輩は我祖



國の建設者神武に依りて斯る教訓を學ぶ能はずして、却つて亡國の運命を脱脚する能はざりしイスライル民族の首領に依りて學ばざるを得ざるを悲む。彼は三千三百年以前の人物にして神武は二千六百年以前の人物にあらずや、然るに文明進歩の程度如何は斯の如き言論以外の大教訓を余輩に教ゆるものある也。イスライル民族が精神的權威を以て人類を支配するものあるは、決して偶然にあらざる也。

殊に大に注意す可きは此三大理想を一貫して生命あらしむるものは、エホバを畏れ彼を信するの活宗教也。此宗教なからむか彼の理想は空想とならむとする也。彼の理想を空想より救済せるものは此宗教也。世人往々モーゼの宗教を以て君主の統一力なき渠等民族を支配するに當時の信仰を利用したるものなりと云ふ、斯の如き批評は却つて評者の人格を疑はしむるもの也。其識見は物質以上に及ばず其靈覺は宇宙の本體に徹せざる平凡の性格を有する者なることを證明す。寧ろ評者の淺劣を暴露するに過ぎざる也、モーゼの信仰は萬古動す可らず、彼の事業は信仰の結果なり。活ける神の力の如き力は彼を信する信仰の中に燃へてモーゼの理想を民族間に生命あらしめたるもの也。余輩は堅く確信す神に對する無我の信念なくして理想事業は成就するものにあらざるを。余輩が小なる隠れたる善を行はむとするにも、信仰なき時には却つて現はれたる善を好みて之を行ふ能はざることを感せざる能はず、故に余輩が全く私心を去り民の俗論をも顧みず、高き天意と清き人意とを大膽に之を行はむと

するに當つては、千萬人と雖も我往かむとの大信仰なきにあらざれば、容易に理想は行はれざるならむ。モーゼが理想的事業を行はむとするに當つての精神生命は、唯只エホバに對する燃るが如き信仰ありしのみ也。彼は此點に於て純然たる宗教的人格なりき。彼は宗教家の腸に經世家の血を混じたるもの也。否彼に現はれたる宗教的性格は天意を地上に行はむとするに在りて、彼の經世家たるは直に宗教家たる所以なりき。彼は常に天意如何を考慮し一たび天意を信したるものは万難を排して之を行ふの勇ありたり。彼は自己の意志の正大なる處に天意の存するをを知り、民意のあることを知りて行ふたるもの也。彼は天意にして亦直に民意なりき。彼はイスライル民族天れ自身なりき。彼を有せざるは渠等民族の精神生命を有せざる也。渠等民族の中に於ては此偉大なる人格の理想は直に國家民族の理想たりしもの也。

翻つて我帝國の爲に懷ふに日本將來の國是となる可き大理想の發揮を要すること甚だ切實也。余輩は今に於て五ヶの誓文以上の物を要求し、教育勅語以上の物を要求し、奈良大會宣言書以上の物を要求す。尠くとも今少し明瞭にして適切なる綱領を要すると明也。或人は余輩に尋ぬるに日本將來の國是如何を以てせらる。余輩は答るにモーゼの三大理想を近世的智識を以て解釋するに外ならずと云ふを以てしたり。單に理想と云ふ上より見ればモーゼの三大理想は、今の世に於ても千古の卓見也。其着想は洵に新鮮なるものと云はざる可らず、唯之を解釋し實踐せんとする場合には、大に近世の批評智識を要することなる可し。



然れども更に翻つて懐ふに近代文明の理想は卅世紀以前の大人格モーゼの理想に漸く相合せんとするものあるを否む能はず、而して近代思想の尤も複雑なるものを代表したる我帝國思想界の現状に於てモーゼの理想に一致せんとするものあるを確認す。彼の理想は三千年間に種々なる實驗批評を経て近代文明の理想となれることを認めざる可らず、然らば近代文明の理想とは如何に曰く基督教的道德主義、曰く漸進的社會主義、曰く倫理的帝國主義是れ也。基督教的道德主義は決して一種の杓子定規を云ふにあらず、人道の表式を謂ふもの也。基督教的道德の背面は基督教的な人道なりと謂はざる可らず、竊盜、殺人の大罪と相俟て嘘を云ひ姦淫を行ふことを大罪なりと認むる如きは、大なる人道的精神より來れるもの也。世の近眼者流は竊盜と云ひ殺人と云はゞ概して大罪惡をなせるものと思ふと雖も、竊盜に竊盜あり殺人に殺人あることを忘る可らず、然れども其罪惡たるは否む能はず、恐る可き罪惡なると共に嘘は人心の虚偽を代表し、姦淫は男子が婦人を肉情の奴隸と考ふるものにて、一は自己の非人格を示し、一は他人を非人格として見るもの也。自己と他人に對する罪惡の中に於て斯の如く大なるものあるを見ず、人格を否認するものは事實に於て人道を無視するもの也。其結果は大にしては國際間の虚偽的外交となり、小にしては家庭相互の紊亂を見るに到る。世界の罪惡は若し此の虚偽と姦淫を撲滅することを得ば其大部分を掃蕩すること

を得可き也。殊に竊盜殺人の如き犯罪の原因を探究すれば、多くは嘘と色と酒との産物なることを認むるに足る。國家興廢の大問題の如きも亦嘘と色と酒とに依りて波瀾を捲起し來るもの多し。故に大なる人道を全ふせんが爲に小なる道徳を躬行せざる可らず、道徳は形式にして人道は内容也。別言すれば基督教は人道の宗教なるが故に、基督教的道德と謂はむには直に人道を意味したる道德なりと考ふ可き也。殊に我邦には此方面の道德に於て大に缺如たるものある也。我邦の紳士淑女は公私を論ぜず竊盜犯、若くは殺人犯をなせりと明言するものあむには、直に名譽を毀損したるものとなして、法庭に之を訴ふるの勇あるもの也。然るに渠等は姦淫を犯したりと云ひ、虚言を吐きたりと云ふことも、名譽を侮辱したるものとして法庭を煩すの勇はあらざる可し。之れ虚言が殺人罪の原因となるが如き怖る可き罪惡なることを知らざるもの也。沙翁の悲劇オセロはオセロが手巾紛失の真相を誤覺化せる虚言の結果、彼の如き世界最大の悲劇を見るに到れることを教ゆるもの也。人情の世界に於ては虚言は恐怖の可き罪惡はあらず、尙ほ更に怖る可きは姦淫の罪なり、オセロはオセロはオセロの姦淫を信じて遂に最大悲劇のヒーローとなれるもの也。主婦の姦淫を信じて憤激する良人の心は、亦直に轉じて主婦の心たることを知らざる可らず、渾身の愛を献けたる主婦と雖も良人の貞操なきを知り、姦淫を犯しつゝあるを知らば、其家庭は愛情の上に於て破壊せられたるもの也。會に家庭の破壊を見るのみにあらず、殺人罪は其結果として殆ど日毎の新聞記事に掲げられて、社會の耳目を驚動するを見る。或意味に於ては虚言と姦淫とは殺人罪に勝る大罪惡なりとの道念を我國民に意識せしめざる可らず、基督教的道德主義は將に一大飛躍を試む可きの機會也。我國民は斯主義に依りて今後大に性格の陶冶を試みざる可らず、虚言を吐きて得々たる國民は人類中最劣等の



國民也。卑劣なる國民は余輩の嘔吐を催す可き國民なり。大事たり小事たるを問はず、人としての面目に對して斷じて虚言は謂はぬこの強健なる人格ある國民に非ざれば、世界の國民には容易に成り得ざるなり。漸進的社會主義とは温健なる社會主義を謂ふものにして、乃ち尤も實際的なる理想を意味するもの也。而して世には國體と社會主義とは恰も氷炭相容れざるに似たり杯、評するものありと雖も、斯の如きは愚論も甚しきもの也。縦や國體と一致するにせよ、一致せざるにせよ、元來一國の帝王は社會全體の幸福を主眼とす可きものにて、彼は少數者の帝王にはあらざる也。富める者貧しき者を共に天に代つて撫育するの大任あるもの也。彼は此意味に於てソシアルデモクラシーたる先天的使命あるもの也。かの歴代皇帝中の皇帝たる仁徳の如きは、其精神に於て儘にソシアルデモクラシーたりしことを認むるに足る。民の富めるは乃ち朕の富めるなりとは、之れ民主的精神の權化にはあらずや、故に國體の精華は民主的精神を代表して國民幸福の普遍的布及を計るに存す、之れ我國民の忠君愛國の精神を全ふせしむる所以なり。如何となれば國民は自己の眞我を皇帝に於て確認するを以て、怒る尊敬す可き皇帝を受せず、怒る皇帝に忠を盡さざるは、國民自らが自己を受せず、自己に忠を盡さざる所以なれば、彼等は之を以て非常の苦痛と感す可き也。國民は今や漸く自己を皇帝に於て見むとを需めむとす。我皇室は徹頭徹尾忠君愛國の至誠を多數國民に全ふせしめむとせば、皇室が民意の代表者となりて國民全体の幸福を計り幸福の平均を行ふとにせば、教育勸語の期許に勝りて忠君愛國の精神を感發せしむるものあるは、皎として日月の如きものある可き也。此點に於て大化の大變革を斷行したる孝徳は民主的精神の權化なることを知らざる可らず、其群臣及び東國の國司以下百

姓に示したる大詔の如きは、此大精神の發揚とも見る可し。曰く自今以後君に二政なく臣に二朝なからん、曰く萬民を宰る者は獨制す可らず、要らず臣翼を須つ、是によりて代々の我皇祖等、卿が祖考と共に俱に始めたり、朕復た神護力を蒙りて卿等と共に治めむと欲す。あゝ之れ何等の美にして麗はしき福音ぞや、民と君とは胸底に於て合一したり。民は皇帝に於て自己の化身を見たり。皇帝は民の意志を以て自己の意志となせり。斯の如くにして民の中に忠君愛國の精神感發せざらむと欲するも能はざる處也。民は君に誠忠を期し、君は民の心を以て心となせる一種美妙の民主的精神は、我帝國をして今日に到らしめたる國體の精華なると共に、愈々帝國を世界に君臨せしむるの大精神なりと謂はざる可らず。今や代議政體の缺點漸く明ならむとするに際し、政治と經濟との合一的解決を促す社會問題は亦將に噴々驚々たらむとす。而して之れ實に世界の大問題となれるもの也。我皇室は此點に於て仁徳の心々大化の大方針に依りて一大變革を豫想せざる可らず、爾曹我に居り我爾曹に居る』この基督の心は君と民との中心を貫通す可き大精神也。モーセは實に此心を持って、幾疑は此心に支配せられたり。賢明なる東西の經世家は皆此心を有したり。君民共和の政治的秘訣は此一句を出ること能はざるもの也。倫理的帝國主義は主義主張ある人物の取らざるを得ざるもの也。基督が最後に弟子に勅して曰く爾曹萬國に行きて民に福音を教へ、父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよと謂へるは、宗教的帝國主義を教ゆるもの也。況むや自己の意識を行はむとするものは、其處に大なる帝國主義的精神あることを認むるを得可し。余輩の倫理的帝國主義は此個人人格に基礎を有するもの也。余輩の人格は之れ直に帝國主義の化身なり。



愛の帝國主義は我人格の要素にあらずや、善の帝國主義は我人格の生命にあらずや、山中の賊を捕るの勞は之を辞するも好しと雖も、心中の賊は之を捕へて眞善美化するの義務あるもの也。余輩の人格は尤も好き理想の帝國主義の産物なり。理想の善は百難を排して之を行ふの勇なくむば、余輩の人格はあらざる也。故に余輩は善の理想に依りて王たらざる可らず、善の奴隷にあらずして之を行ふの主たり。之れ帝王的人格にあらずして何ぞ。斯の如き帝王的人格は國民を擧て具有する處のものにせざる可らず、倫理的王國は斯の如き國民の産物なり。天國の擴張に愛と善との帝國主義の伴ふが如く、倫理的王國は倫理的帝國主義を要するもの也。倫理的帝國主義は今の外交政界を一變せざる可らず、國際公法に新生面を開かざる可らず、徒に愛國の名に依りて他國の權利を蹂躪するが如きは、倫理的帝國主義の否定する處也。彼は貧にして人道を叫ぶを悦ばず、富むて正義を行ふを祝するもの也。彼は絶對的非戰論を謂はず、亦絶對的主戰論をも謂はざる可し、唯今の世に眞に主義を行ひ理想を實現せんせば、地に泰平を出さん爲に來れりと思ふ勿れの覺悟を要するを斷言し得る也。衣服を賣りて双を買ふ可しの氣力なくんば雄進邁往すること能はざる也。絶對的平和主義者も其主張を行はむとするには特に驚く可き喧嘩腰を以て呼號叱咤しつゝあるもの也。渠等は最後の目的を達せんとする場合には、多分剣を買ふて血を流すことを辞せざる可し。之れ渠等の帝國主義にあらずして何ぞや、渠等の帝國主義に反對するは世の所謂帝國主義に反對するものにして、余輩の倫理的帝國主義にあらずる、と明白也。渠等が地上の理想國となす瑞西の如きすら全く軍備を有せざる者にあらず、國民

悉く軍人たるもの也。倫理的帝國主義は國民を擧げて人道の精兵たらしむるに存す。精兵は人道の爲に武裝を辭する能はざる也。

然れども三大理想を實現せんと欲せば君民共に天に對して新なる信仰を有せざる可らず、天を虚靈として見るにあらず、天地宇宙の實在にして活ける神として信じ、之を敬ひ畏るの至念を以て行ふ可きもの也。毫末も私心あるを許さず、毫末も邪念あるを許さず、直に神の心を以てするにあざれば、此三大理想の實現は夢想に過ぎざる可し、『我を信する者は我行ふ處を爲さん且つ之れよりも大なることを爲す可し』、信仰の威力は此數句の中に明なるにあらずや、基督の行ひ給ひし處よりも大なる行ひを爲し得る信仰の威力は、かの三大理想に勝りて大なる理想を行はしむるものあるを認めざる可らず、此三大理想に勝りて大なる理想を行ひ得る信仰の威力ありて、始てかの三大理想を圓滿に行ふことを得る也。基督の心は直に之れ神の心たるを知らば、之を信するの意義も亦明なるにあらずや、然るに日露交戦に際し歐米人殊に英米兩國を除きたる以外の國民にして、日本に多く同情をよする處の者な佛國巴里のリュウ、ド、ジュモン紙上或論者の調査したる結果は、社會主義の徒にあらずるもの殆むと稱にして、渠等の多くは自から無宗教なると共に、併せて大に日本の無宗教を悦ぶものを見ゆと、余輩は斯る佛國新聞紙上の批評の結果を深く信用する者にはあらず、然れども社會主義者は何が故に無宗教の人なるか、余輩は社會主義の如き理想は基督教的信仰ある者にして、始て行ひ得る者なるを信するが故に、頗ぶる研究の價値あるものと思惟せざる能はず、余



置は惟ふに佛國の舊教の如きは市民の信仰自由を迫害するに共に、渠等の宗教が多く富者の宗教となれるが故にあらざるなき。余輩は歐米の基督教が少數強者の宗教となりて、多數弱者の宗教たる資格なきを聽くもの也。救世軍の運動は基督教界の一大缺點を補はむとして起れるものなり云ふを見れば、正統派基督教徒の現状既に業に豫察し得て餘りあるを見る、況むや舊教に到つては羅馬帝國の統一的意志を繼承したるもの、個性の自由を許容せざるは明々白々の事實なりと謂はざる可らず、渠等が無宗教を理想するは自然の結果たる反動の産物也。此秘機を領解せずして徒に社會主義者を罵るが如きは事實の真相に徹底せざる不明の結果ならむ。余輩は耶と謂はす佛と謂はす富者の奴隸たる宗教を厭ふもの也。眞正の宗教は貧富兩者を超越して渠等を指導す可きもの也。殊に基督教に到りては其然るを信するもの也。基督は強者の不義を鞭撻し給ふと共に、小なる者に一杯の冷水を與るとを教へ給ひたり。彼は強弱兩者を超越して之を精神的に救済せんとしたるもの也。故に歐米に於ける富者の味方となれる基督教の衣服を奪ふて、彼が本來の面目を發揮するを要す。基督は心の貧しき者の友にして富者の友にはあらず、肉に於て富めりも雖も心の貧しき者は彼を友となすことを得、夫に反して縦や肉に於て貧しき者も雖も心に於て富める者は彼の友たること能はず、亦彼を友とすること能はざる可し。無政府黨虛無黨の如きは富者が肉に於て富めるが如く、心に於て富める者にあらずや、渠等は富者が富に於て暴慢なるが如く貧に於て暴慢なるにあらずや、基督は斷じて兩者の暴慢には同情を表するものにあらず、彼は兩者の貧しき心に同情を表して共に救済せんとするもの也。然るに事實は容易に斯の如き理想的心事を實現せしむるものにあらず、茲に於てか基督の心を以て心となせる一大英雄の出現を希望せざる能はず、別言すれば近世的大モーゼの出現

を祈らざる能はず。彼は天を相手として天の理想を世に行はむ。義人にも不義人にも雨露の恵を與へ日月の光輝を私らしむる神は、地の全面に幸福の遍きを冀ひ給ふが故に、彼は大膽に其神の意志を此世に明にせん。強弱兩者は其偉人に依りて暴慢に陥るの罪惡より救はるゝに到らむ。彼等は富と労働と愛情とを分割して互に他人の悦びを以て自己の悦びと爲すに到らむ。神は彼等の父となり天は彼等の足となり基督は彼等の師となり彼等は鼓勇して不朽の恩寵に浴せん。地上の理想國は遂に茲に實現するに到らむ。此國には社會主義は無用となり無政府黨は跡を絶つに到らむ。余輩は天下の帝王たり經世家たる志士仁人が基督教の天國の意義を深く味ひ、時代の凡ての思潮を綜合する底の大識見を確立して、新なる治國平天下の意義を發揮せんことを望む。

第七章 豊富にして永遠なる精神的生命の帝國

今や世界は矛盾と撞着とを以て充され、思想上の混沌また驚く可き複雑を意味するに際し、近世的大モーゼの出現を望むも怪むに足らず、然れども古きモーゼは偉大なりと雖も一國の建設者に過ず、其人格に於て宇宙大なるものを發見し得ざるは怪むに足らず、余輩は前章に於て論じたる三大理想の如きも、建國者モーゼ以上の新人格に依りて解釋せらるゝことを認むるもの也。今や要する處のものは偉大なる人格と共に、其人格の發生し來る精神的



生命に外ならず、余輩は此生命を何人に依つて得むとするか、此生命は何人の中に泉の如く湧潰しつゝあるか、詩人の詩腸にか、學者の性格にか、否、否、余輩は渠等に依つて容易に満足すること能はざるもの也。學者は余輩に深奥なる真理と明晰なる批評とを語ることを得るものなり。唯彼等は生命に於て缺くる處あるを如何にせむ、詩人は余輩に淡きこと夢の如き詩想や花か星に彷彿なる歌を聴かしむることを得る也。唯彼等は生命の源泉に涸渴しつゝあるを奈何にせむ。去れば余輩は現代の學者詩人に走せることを已めて、尤も古き舊きナザレの偉人格の中に此生命の永遠にして豊富なる者を發見せん。

基督を觀察するには神の國の王たる方面を有し、迷へる羊の救主たる方面を有し、人類の指導者たる預言者の方面を有することを識らざる可らず、彼が約翰傳第十章に於て詩を歌ふが如き趣味深くして意義多き牧者と羊の比喩の如きは、救世主たる性格を描出して餘蘊なきを認むるもの也。殊に此麗はしき油繪を見る如き比喩談の中に於て、「彼は盜まむとし殺さむとしはさむとするの外なし、我が來るは羊をして生命を得、且つ豊ならしめむ爲なり」と倏忽として獅子吼し給ふ處を仰げば、温平たる牧者以上一代を警醒指導する底の大預言者の性格を想見することを得る也。生々の氣は彼の全心全靈を支配しつゝあるなり。余輩は茲に彼の大なる識見を窺ふことを得可し。基督の産れたる當時の國狀は、余輩の生存する現代の日本とは頗ぶる趣を異にし、悲歌慷慨の徒をして亡國の哀歌を高吟せしめたるのみならず、思慮遠大の士をして祖國千年の

經綸を明ならしむるの大機に遭遇せしめたり。彼は此時代に産れて人類を指導するに先ち祖國を指導するの使命を有したり。彼は人類を受くること深かりしが如く、祖國を受くること深かりき。唯その愛の顯現する處に到つては頗ぶる趣を異にしたるものありき。モーゼ、エリヤ、エリミヤ、イサヤの如き霸氣と熱誠と信仰との化身を有する國民は、歴史に湛へられたる渠等の血と涙に依りて基督に先つて幾多の愛國者を起したり。此愛國者の言論は突飛にしてその運動は野獸の如きものあり、彼等の祖先は破れたりと雖も埃及と戦ひ、巴比倫と戦を交へ、アツスリヤと血戦を試み、羅馬の侵入を受けたる時にも敵愾心の向ふところ、大に彼と戦ひたることを記憶す。猶太の國史は内憂外患の歴史なり。その國民は歴史的に養ひ得たる繼兒根性によりて深刻なる感情的性格を有したり。何人も彼邦の歴史を讀過するとき斯の如き悲惨なる國民の歴史は、亦ど再び見得るものにあらざることを感じ、血液の沸騰するものあるを覺ゆるならむ。渠等は悲劇を以て起りて悲劇を以て畢りたるものなり。然れども渠等は愛國心強く燃るが如き霸氣を有し、異邦人を傲然として睥睨するの槩あり。斯る國民的性格はその宗教の陶冶したる處也。渠等は萬國萬民の中に於て唯獨の眞神を信するさなし、異邦の神は野人の信する邪神なれども、自國の神は我儕を特別に撰び給ふたる正義の神なりさなし、隨つて渠等は特殊の恩寵を神より受る寵兒なりさなし、幾度困難に陥るも神は必らず此神國を護り給ふと確信したり。渠等の宗教は斯の如く國民的なると共に、その愛國心は狭くして深く強きものなり。自國の優等は其の宗教と愛國心を俟つて



自負せらるゝと同時に、異邦人の劣等なることを確信して疑はざる處也。此偏狹にして高慢なる國民的性格は敵國外患に對する時に、舉國國民悉く燃るが如き情火に不穩の霸氣を加へて、劣等なる異邦人を打破せんとの運動となれり。怪戰羅馬の脚踏に蹂躪せられたる渠等は、歴史的に養成せられたる不穩の情熱に燃へつゝあり。如何にもして敵國の蹂躪より獨立せんとして躍起運動を試むる愛國家、慷慨家、煽動家は各地に蜂起して風雲を叱咤せんとす。斯る種類の風雲の兒は二百三百の同志を糾合して巨大なる仇敵に一矢を報ひすむば已まず、渠等は當時多數の俗論に支配しらるゝ國民に、ヤンヤと喝采せられたる仲々の人氣取愛國者なりき。使徒行傳に掲載せられたるチウダと謂ひ、ユダと謂ふ煽動的一揆組の首領は乃ち夫等の亞流なりき。然れども當時の國民は渠等首領の一方の旗頭たることは信じたりと雖も、其一方の旗頭を綜合し風雲を支配する鯨龍の如く、渠等風の子たり雲の子たる小首領を支配する大人格を要求したり。國民はヤンヤと喝采する渠等の小なることを認めて更に大なる歴史上の豫言者が豫想したる大人格メサイヤの出現を俯仰天地に泣願す。天は此時に渠等の要求に應じて一個の偉大なる人格を降世せしめたり。基督イエスは渠等に洗禮のヨハネ、エリヤ、モーゼ、古預言者の再來なりと意識せられて、一部の國民には小首領を統一する大首領の出現と思はれたり。眞に彼こそ國民の豫望を双肩に擔へるメサイヤならむと預想したり。然るに彼は不思議にも夫等の小首領とは提携するの模様なく、却つて賣國奴と目せられたる税吏、罪ある婦人、貧しき者を相手にして、

悠々精神的教育に従事し風雲の機漸く熟せんとするものあるを識らざるに似たり。彼は國民の喝采する愛國家、煽動家とは頗ぶる趣を異にしたるのみならず、國民多數が金科玉條となせる宗教的儀式を破壊し、併せて從來の教義に反する新説を提唱して民心を惑乱するかの如く想像せられたり。而して此想像は時日を経るに従つて事實となり、國民は彼に於て國家的大問題なる獨立運動に冷淡にして却つて當時の國民的生命たる宗教に對する謀叛人を見たり。汝等は白く塗たる墓の如しと評せられたる舊宗教の腐敗を知る良民は、風雲の叱咤に勝りて新福音新宗教を要求しつゝありしが故に、此宗教的謀叛人の聲に耳を傾むくる者多く、謙遜にして沈着なる大人格はこの良民等に末頼もしき首領なりと慕はれて、ガリラヤ州に於ける彼の勢力は醇良の民をして舉げて風靡するに到らしめぬ。

然るに茲に悲む可きは基督の大きき大なる理想は、國民の小なる低き豫望と矛盾し始めたること也。天下の風雲忽々突飛なる方面に向つて動くに對し、基督は淡きこゝ水の如き態度を以て超然として知らざる者の如し。其コントラストは恰も大流の水面波瀾層々躍るが如く狂ふが如く成れば成る程、海底は愈々深く靜にして自家面上の波動を知らざるに似たり。彼は天下の風潮が輕浮薄街上の黄塵を舞はしむること多きに反して、動かざること泰山の如く天地鳴動するとも無窮に靜なるが如し。之れ國民は自稱愛國者と共に外に向つて烟火の如く燦たる活動を成すに、彼は至誠燃るが如き衷情を以て内に活動を試むるが故に、反對の現象を示すものなり。而して此反對の現象は兩々相對するが如きにあらず、



相錯し相衝突して火を發せざれば已まざらむとする也。要するにこれ二個の人生觀の錯綜なり衝突なり。煽動的愛國者は遠大の思慮あるにあらず、唯肉を喰ふにあらざれば已む能はざる敵國に向つて、爆裂彈の破裂する如く仇を打たば聊か溜飲を下すとを得と云ふに外ならず、ロマに反抗して勝つか負けるかは意とする處にあらず、唯黙して彼の屬國たることを忍びざる也。彼等は彌次馬の如く自から飛び火に入るもの也。愛する祖國をも併せて消へざる火に投ずることを辞せざる也。基督の眼には彼等煽動家の心事に亡國の兆あることを認めたり。屬國を轉じて更に亡國たらしむる不穩の未來を有することを觀破したり。彼は此時に於て彼等の狂瀾怒濤の盲動に反對して『柔和なる者は福なり其人は地を嗣ぐことを得可ければなり』との福音を説くの必要あり。而かも彼等は此福音に耳を傾けざるなり。彼等は唯怨みと嫉みを解するのみ、而して唯慷慨の餘り久遠の思想なくして反旗を翻すのみ、基督は最早彼等に柔和の福音を説くの愚なるを知れり。彼は叫んで曰く『羊の牢に入るに門よりせずして、外より踰るものは竊賊なり強盜なり』と、蓋し彼等が國民を指導するに道を以てせずして、一揆謀叛を獎勵する心事と方法とに大彈劾を試みたる也。基督は更に彼等の運動の結果を評して曰く、『竊賊の來るは盜まむとし殺さむとし滅さむとするの外なし』と、余輩は彼等の觀察の正鵠を得たるを驚かざる能はず、彼は國民の幸福安寧を標榜する煽動的愛國者ら

が、自家運動の輕舉盲動を顧みずして屬國の悲境にある國民を、舉げて國民的に殺さむとし滅さむとするものにて、唯彼等が得る處のものは自稱愛國者の虚名を盜むに外ならざるを知れり。國家の運命を賭して自家の虚名を得むとする彼等の心事は、獅子身中の虫とも評す可し。斯の如く彼等鼠賊の心事を暴露して鮮血淋漓たらしめたる基督の胸中、將に預言者の態度を以て俗論黨を彈劾するの眞勇は千古の下凜として余輩の胸底に響あらしむ。而して彼は自己の立場と使命を明にして曰く、『我きたるは羊をして生命を得、且つ豊ならしめむためなり』。鼠賊は盜まむとし殺さむとし滅さむとするに、彼は國民に生命を得させ、其得させたる生命を豊富ならしめむとするにあり。煽動的愛國者は祖國滅亡の使者にして、彼は生命と復活の天使なりき。

余輩は今に於て此の基督の聲に耳を傾けざりし猶太國民の爲めに痛恨の涙なき能はず、彼は煽動的運動に國民が附和雷同せずして、靜に柔和に精神的生命を發揮せんことを警告したり、別言すれば外敵國に對しては柔和なる態度を以てし、内國民の存在に就ては豊富なる實力を養成せんことを奨勵したるなり。基督の豊富なる生命とは國民各自の豊富なる精神の實力を意味するならむ。彼等國民が此の精神的生命の發揮に着眼し、眞に實力ある國民とならむが、他日世界列國の運命に如何なる變化を與へたるや、未だ容易に明言し得るものにあらず、彼等國民が眞に精神的生命を







殖力を失ふに反し、比較的猛勇ならざる動物は愈々着殖力を逞ふするの有様を見る也。之れ驚く可きの現象なり、國家としても猛勇なる歴山大王の帝國は斃れシーザルの帝國は亡び、シヤレマンの帝國は失はれビートルの帝國は衰へむとするに、ビクトリヤ、エドワードの英國、マツキンレー、ルースベルトの米國は愈々健全なる基礎を得て國力を發展せしめつつある也。余輩は帝國の將來を考るに徒に軍國主義、乃ち武力を以て世界に君臨せんとするが如きは、時勢遅れの尤も甚だしきものなることを警告せざる能はず、殊に今や日露戦争は連戦連勝の形勢を以て始終しつゝありと雖も、斯の如き武勇に依れる勝利は必ずしも帝國の前途を多望ならしむるものにあらず、武勇夫れ自身は帝國の前途直に滅亡を豫想せしむるもの也。茲に於て武勇以上の生命の日本帝國を建設せざる可らず、『天國は汝等の中にある』如く生命の日本は余輩の中にあるもの也。地上の日本は朽るも無久に朽ちざる帝國を余輩の胸中に開拓せざる可らず、生命の日本は現在に活きずして將來に發展するもの也、彼は無久の未來を有するもの也。彼は天地を失ふるも我生命は活きむるの自覺あるもの也。彼は有限の日本國に於ける無限の日本國なり。彼は無限の生命を以て有限を開拓するもの也。『あゝエルサレムよエルサレムよ』の聖者の悼詞は有限の日本國には伴はざるを得ざるものなり、されど『我が國は此世の國にあらず』の高大なる理想は無限の日本國には珍奇なる言葉にあらず、斯の如き日本國は『世界の日本』にあらずして宇宙の日本國也。彼は世界の榮枯盛衰を超越して宇宙と共に生存し、宇宙と共に發展す可きものなり。『我を信するものは限りなく死を見ざる可し』、『我を信するものは死ぬるも活き可し』、『我を信するものには生命を得且つ豊ならしむ』、生命の日本國は此『我』の中に存することを知らざる可らず、此『我』なき日本國は既に空に空なるもの也。『我』は國家の柱石なり、『我』は國家の生命なり、『我』はアルパなりオメガなり、『我』は大宇宙なり大天地なり、『我』は有限と無限との實體なり、『我』は活動なり發展なり向上なり。『我』は光明なり希望なり、『我』は我を支配し宇宙を支配す。『我』なき處に國家はあらず世界はあらず宇宙はあざる也。大なる『我』の現はるゝ處武あり富あり文あり偉業あり乾坤あり。世界の歴史と國家と文化とは皆之れ『我』か如何なる程度まで現はれたるやを示すに外ならず、彼等の活動、彼等の進歩、彼等の飛躍は乃ち『我』の生命を意味するものなり、ナポレオンは明に『我』を見たるものなり。キリストは深く『我』を見たるものなり。奈翁の見たる『我』は余輩が足を地に着けて太陽を見るが如くに、地上の事業に執着して『我』を見たるが故に、其明に見たる『我』は小なる半面の『我』なりし也。基督の見たる『我』は天より見たるものなり、自覺の中心に立ちて『我』を見たり。故に余輩が地に足を着けて太陽を見るが如くにあらずして、彼自から地球の中心なる太陽となるにあり。外より見たる我は小なるを免れざるに内より見たる我は幸にして大なり。外より見たる我は恰も玉子の轉々するを見るが如し、内より見たる我は形體を破つて發展する生命なり。余輩は之れより聊かこの内部より見たる生命の我に就て語らむと欲す。余輩は内より見たる『我』を語らむとするに當つて淺薄なる宗教意識と雖も、その意識を離れて生命なく哲學なく權威なきが故に、自己の宗教意識を中心として意見を語らむとす。茲に大に生命の存することを明にし、活ける哲學のあることを信するもの也。然らば宗教

第七節 豐富にして永遠なる精神的生命の帝國



意識とは何を意味するものなるか、余輩は之を客観と主観とに對する倫理的哲學的實驗の産物なりと云ふ。眞の我は此實驗の中に發展し宗教意識は此實驗の中に醸成せらる、別言すれば宗教意識とは眞我の發展それ自身なり。眞我の發展には二個の對境を要す、主観と客観とこれなり。眞我は主観と客観との兩面を具有する高貴なる實在也、余輩は主観を離るゝ能はず、亦客観を離るゝ能はず、是等の兩界を綜合したる主なるものは乃ち眞我也。此眞我は始に重に客観界の經驗に依りて發展し來る。人文發展史は余輩に語るに太古の人類は客観あるを知りて主観あるを知らざるもの也。而かも客観界の實驗を積みて主観界は非常の發展なすものなり。茲に大に味ふ可き千古不磨の意義あることを知らざる可らず、客観の實驗に依りて發展し來る主観は宇宙の首腦たるこそ是れ也。宇宙は此主観に依りて物質以上乃至筋肉以上の實在となるものなり。宇宙は物質に依りて高貴なるものとなるあらず、筋肉のみの宇宙は意味あるものにあらず、筋肉以上、物質以上の主観ありて始て高貴なる所以を知らしめ、思想精神の能力ありて始て妙味あるものとなるなり。物質の世界は精神の支配を受く、物質は奴隸にして精神は君主なり。天に在つては秩序整然たる日月星辰、地に在つては道義一貫の善行嘉言、此整然たる秩序と一貫の道義とは宇宙の主観を意味するもの也。然れども余輩は天然と人間とを貫通する法則を俟つて主観を知るのみならず、法則以上のパワーに依つて主観の消息を知ることあり、希伯來人の宗教思想は此點に於て頗ぶる奔放を極む。彼等は神は疾風に乗りて現はれ給ふと云ひ、海の波

の上に神は在すと云ひ、轟々たる電雷、益を覆すの驟雨、神は此中に宿りて人類に臨み給ふと云ふ詩人の思想の中に、宇宙の『我』が力となりて現はれ其力の中に力以上の『我』あるとを歌ふを見る也。此『我』は汝等を子となし亦汝等の父とならむとは彼と人類との干係を尤も巧妙に歌ふたるもの也。『我は在りて在るものなり』とは彼等の思想したる絶對的實在にして、正義の神にましますせば正義の觀念を以て彼に従ふ國と民とは世界に冠たるものとならむとは、尤も熱心に高調するところ也。而して是等の詩人の思想の深く高き處を發揮して、神は完全なる愛を有し給ふ人類の父なりとの信仰を余輩に鼓吹せられたるものは、救主基督也。彼は宇宙の『我』を圓滿完全なるパーソナルにして燃ゆる愛なりと認め、眞と美の極致を紹介せられたり。彼の神は此愛の力を以て天地を支配する主宰力也。彼の神は此愛の意志に依つて宇宙を統一するもの也。彼の神は此愛の智力に據りて天地を經營せらるゝ也。彼の神は斯の如く愛の神なるが故に亦大なる憎みと妬みとあり、我に従ふ者は恵を千代の後にまで及ぼすと雖も、我に逆くものには父の罪を子に及ぼして三四代に到らしむると云ふなり、一たび彼の憎みに觸れなば個人も國家も忽にして亡ぶるもの也。父の罪を子に及ぼす恐る可き罪の遺傳は、神の意志に逆ふたる神の憎みの結果にして、其民と其國とを亡ぼすに到るまでは已まざる可し。而かも其憎みと滅亡との中に神の大なる愛は現はるゝ也。乃ち神の意志は此間に發展し來るにあらずや、猶太の國家と國民とは亡びて基督の大あり、羅馬の國家と國民とは滅びてローマンカソリック



の大あり、印度は亡びて釋尊と其宗教の大あり。グリーキは滅びてソクラテス、プレトと其哲學の大あり、徳川の偉業は斃れて平田篤胤と其識見の大あり、茲に於てか知る神の憎みは有限にして無意味の方面にのみ限られて、神の恵みは無限にして價值ある者と共に悠久に在る也。故に如何なる個人如何なる國家を問はず、其志望の大なればこそ神の見て有限なるもの、無意味なるものこそば、彼等は其内容なき志望と同一の悲惨なる運命に遭遇す可き也。天下萬國の萬民にして此内容なき志望を抱ひて、有限無意味の最後に向つて歩武を進めざるもの果して幾干なりとするぞ。内容なき志望とは物質的欲望のみを云ふなり。彼等は美しき方法に依りて姦淫を行ひ、文明の手段に依りて豪盜を行ひ、滑かなる舌を以て苦き虚言を吐き、巧に人の膏血を搾りて死に到らしむ。此物質的欲望の世界は失樂園の大魔王を祖宗となして、其民は暗黒の鬼となり、權變の外交、劍戟の帝國主義、其足は血を流さむ爲に早く、其手は他に苦痛を與へむ爲に用ひらる。神の大慈悲の憎みは大なる猛烈を以て此物質的欲望の權威を逞ふする處に現はるゝは、決して怪む可きことにあらず、之れ古來の預言者が『惡魔の業を毀たむ』との氣概を以て、大打撃を試み大破壊を仕遂げむとしたるものにて、此破壊の中に大なる慈愛を視ることを得る也。限り有るものを打破して限り無き物を獲せんとするは、神の大なる至情にあらずして何ぞ。基督は曰く

汝等軍勢にエルサレムの圍まるゝを見れば、其亡び近きに在るを知れ。其時ユダヤに在る者は山に遁れよエルサレ

△に在る者は出でよ、田舎に在る者はエルサレムに入る勿れ、これ刑罰の日にして録されたる事の皆應ずる日也。其日には孕みたる者と哺乳兒ある者は禍なるかな、これ地に大なる災ありて怒りこの民に及ぶべければ也。人々刀の刃に斃れ且捕はれて諸國に曳れ、エルサレムは異邦人の時満るまでは異邦人に蹂躪さるべし。また日月星に異象あるべし、地にては諸國の人悲み海と波との湍流によりて顛沛、人々危懼しつゝ世界に來らむとするこゝろ俟ち憫む可し、これ天の勢ひ震動す可ければ也。其時人々は人の子の權威と大なる榮光を得て雲に乗り來るを見る可し、此等の事の成始む時には起て汝等首を翹よ蓋し汝等の救ひ近づけば也。

亦曰く

無花果と凡ての樹を見よ、既に萌せば汝等これを見て自から夏ははや近しと知る、斯の如く汝等も此等の事の成るを見れば神の國の近きを知れ、誠に我れ汝等に告げむ、此事皆成るまでは此世は逝ざるべし。天地は廢るべし然れども我言葉は廢る可らず。

とこれ罪惡の國家亡びて而かも其間より永遠の生命なる神國の發展し來るを歌はれたるものなり。内容なき志望を有する虚榮の國家は、汝より出たる物は汝に歸るが如く亡ぶるに到らむ。之れ悲む可きことなれどもより大なる生命の國家は内容豊富にして不朽の精神の上に現はれ來るとせば、有限を去りて無限に入れるものと謂はざる可らず、而して此無限の國家は個人品性の中に建設せらるゝもの也。罪惡の國家も個人品性の墮落の中に成就せらる。嘗て古聖アブラハムはソド



ム、ゴモラの爲に神に祈りて曰く、彼地に五十人の義人あらば亡ぼすことを赦し給ふやと云へるに、神は然り答へ給ひたり、然るに五十人の義人もあらざる也。四十人にて亡ぼし給はざるやと云へば神は然り答へ給ふ、卅人にては如何と問ふ、神は夫にても好しと答へ給ふ、廿人にては尙ほ足れりやと聽けば尙ほ赦す答へ給ふ、最後に十人あらば如何と祈れば神は尙ほ大慈愛を以て好しと答へ給ふたる也。然るに不幸にも十人の義人すら存在せずして彼地は永遠の滅亡となれり。彼地には記臆す可き一人の賢人すら産れざる也。彼地は全く物質的欲望の爲に滅亡したるもの也。國家は茲に大なる教訓を學ばざる可らず、國家は單に國家として意義あるものにあらず、内に明星の如き個性ありて始めて意義あるものとなる也。國家の國粹は不朽の個人品性に存す。國家は此個人品性の高低上下に依りてその運命を左右せらる。神の憎みを免れざる國家はこの個人品性の高貴なるものなく、時代の彈劾者たる豫言者なく、一世の警醒家たる哲士なく、百歳の光輝たる神人なく、偉大なる個性の中に國粹の權化を有せざる結果也。若し斯の如き個性ありて百代の師表となり、人類世界に其感化を及ぼすことを得むか、縦やその國家は滅亡することあるも國民を支配したる國粹は茲にコンホルゲヨンをなすに到る。乃ち滅亡と云ふは形體に過すしてその精神は偉大なる個性に依りて世界人類の中に復活するに到る。斯の如き滅亡は幸にして死にあらずして生也。精神的復活也、偉大なる國家は斯る不死の最大個性を有する處に存するもの也。されば余輩は神の愛憎を歴史上の國家の興廢に依りて學ぶのみならず、余輩個性が神の愛憎を眞に體得する處のものならざる可らず、余輩個性が眞に神の愛する處のものを愛し、神の憎む處のものを憎むの勇あらば、國家の運命を死の手より救ひ出すことを得るもの也。神の愛憎は既に業に人類と個人の中に宿れるものなり。

余輩が正を愛し不正を憎むの心はこれ乃ち神の愛憎の眞意を得たるものにあらずや、神の愛憎と雖も個性の中心を貫ぬける愛憎の情と異なるものにあらず、唯彼は我よりも明にして精緻なるものあるなり。余輩の眞心は神の賞罰の信仰に依りて鋭敏なる發達を爲すなり。神は儼然たる倫理的實在者なれば個性若し此實在を意識しなば其意識の程度の進むに従つて、余輩の個性は眞に權威ある倫理的性格を形成することを得るなり。余輩の倫理的性格が愈々發展し來る處に神は明に顯現し來るなり。神の顯現する處小我は滅脚して大我の活動となるなり。小我の超越的方面は大我と合致する處なれども、その現實的方面は大我と大に矛盾するもの也。故に其現實的方面を打破して宇宙の大我に合するに到つて、始て無久の生命あり永遠の活動あるを見る也。余輩の倫理的性格は大我を實現する處也。乃ち余輩は余輩自身の性格に依りて活くるものにあらずして、大我に依りて生ることを意味す。大我は之れ活ける神にはあらずや、彼は天地宇宙の絶對我なり彼は萬有を一貫するヒインクなり。此ヒインクは眞なり美なり善なるのみならず、愛なり義なり聖なり。國家も個人も此ヒインクを精神生命となし希望光明となせるものにあざれば、永遠にして豊富なる生命を擲得したるものにあらず、殊にヒインクの宇宙精神と同化したる個性の綜合に依りて組織せられたる國家こそ、理想的永遠の養ある國家となる也。

我帝國は武勇に於て優に世界の耳目を驚かしたり。忠君愛國の精神は世界に冠たるものとなれり。東亞の一孤島は既に嶄然として世界に頭角を現はしたり。滿韓に於ける彼の勢力は強大となり、世界は一個有力なる發言權を有する新興國を得たり。然れども余輩は研究



せざる可らず、武勇は果して永遠の生命なるか、忠君愛國の精神は果して無窮の生命なるか、余輩は懐ふに忠君愛國は尙ほ自からを愛するが如く武勇は尙ほ腕力を揮ふが如し。斯の如き自愛若くは腕力の中に國家永遠の生命ありとせば、これ實に不思議なること謂はざる可らず、自愛と腕力とは幾多の國家を亡ぼしたるを見るも、永遠の生命を持続せるものとは豫想するだに能はず、世界の歴史は自愛と腕力とに依りて一時國家を興すが如きも、其間に決して永遠の生命なきを證明して餘あり。余輩は此見地に在りて世の卑近なる實利論者の主張を耳にする時、『盜賊の來るは盜まむとし殺さんとし威さむとするの外なし』の警句を追想せざる能はず、渠等は名勢、權勢、金勢の三大勢力を理想して、より大なる勢力に着眼せざるものなり。富を望むで富以上の理想なく、名聲を望むで名勢以上の理想なく、俗權を望むで俗權以上の理想なき時は、直にこれ人格の死を意味するもの也。人は物質的勢力を希望して夫以上の高き欲望乃ち理想的希望なくむば、直にこれ精神的墮落也。人格的自殺也。物質的欲望に對する理想的希望は宗教に屬し倫理に屬す。精神的向上發展超越之ぞ眞に理想的希望ならむ。故に單に物質的欲望のみを主眼として生存する個人と國家とは、人道公義の大敵たる泥棒にして其結果は自殺と滅亡あるのみ。而かも理想的希望を有するものは、生命を得ると共に其生命は愈々向上發展して豊富なるものとなる也。さらば其生命とは何を意味するか、乃ち小我

を脱脚して大我に一致するを云ふ也。余輩が一步々神に同化し神に進化する處は生命の豊富なる所以なり。如何となれば神は絶對の實在なり、宇宙の深き處に存在する生命活力なれば、余輩が神と同化するは永遠の生命と同化する所以也。寧ろ生命の化身となる所以也。余輩の人格にして斯の如く生命の化身となり、大我の化身となり、神の顯現となるに到らむか、茲に新なる使命の加へられることを記憶せざる可らず。余輩は如何なる場合に於ても國民たることを辭する能はざるが故に、國家に對する使命の大なるを自覺せざる可らず。猶太民族彼等は滅亡の國民となりたれば、最早國民たる者にあらずと思は、非常の間違也。渠等は勿論猶太國民にはあらず、併し渠等は猶太種の獨人たり英人たり米人たるにあらずや、滅亡して世界に散亂するも國家を脱脚する能はず、従つて國民たることを辭する能はざる也。余輩は滅亡するも國民たらざる可らず、自國を離れたる自國の國民たらざるべからず、爰に人類の存せん限り國家は存し、國家の存せん限り國民は存す。既に國民は永久に存するものとせば、余輩は英人たり佛人たり米人たる能はず。徹頭徹尾日本民族たらざる可らず、余輩既に此願望ありとせば將來の子孫皆然りと想像せざる可らず、余輩は茲に於て國家的生命の永遠を冀ふと共に其生命の發展擴充を期せざる可らず、國民的使命はここに生じ國家的發展はここに起らざるを得ず。その使命その發展とは何ぞや、曰く余輩が神と同化して大我の顯現ならむとする如く、國家と神とを合一して宇内に號令するに存す。個人性格の中に神の國を成就するのみならず、國家を擧げて神の國とせざる可らず、神と國との合一、これ神と人との合一の產物なり。個







ものは、殆むど人種的偏見を有せざるのみならず、英人若くは米人の如き人類の一人となるなり。皮膚の色の如き言語の如き宗教歴史風俗習慣の相違は人種的偏見を醸すの有力なる材料也。而かも同一なる宗教、同一なる言語、同一なる風俗、同一なる習慣、同一なる歴史に教育せられて、尙ほ且つ人種的偏見を有することを得るや、赤き色に對して黄褐を耻するか、亦是黄色に對して色の白きを耻するかの、一種の羞耻心のみを残すに過ぎざる可し。之れ人種的偏見を以て斷じて先天的の者にあらず、境遇と教育との結果に過すと謂はむとし。乃ち後天的のものなりと云はむとする所以也。

故に人類思想の産物なる人類觀よりすれば、人類は皆同一なりとの結論に到ることは何人も否定する能はず、主觀の世界に於ては人類の差別は無となるもの也。草木國土悉皆成佛となるが如く、人類は皆神の子なりとは人類思想の哲學的見地也。此見地よりせば人類は平等無差別の大觀にまで進む也。而かもこは人類進歩の前提にあらずして、その結論なることを知らざる可らず、此結論は容易の産物にあらず、哲學的思索の苦心經營を過ぎて茲に到る也。人類は皆この結論に到るにあざれば世界人類の安寧幸福は容易に來るものにあらず、健全なる文明は此思想の發展に伴ふて始て起り來ることを忘る可らず、然れども此思想は學者の書齋には講究せられつゝあり、詩人の頭腦には既に歌ふ可きものとなれりと

雖も、この思想が學者の書齋を脱し詩人の頭腦を離れて人類の根本的感情を支配する常識となるまでには、尙ほ幾世紀間を経べきものなるや殆むど想像するに難きことなりと謂はざる可らず、難きことなりと雖も遂に來る可きものなり。來るにあざれば已まざる可し。唯茲に到るには二個の關門を経ざる可らず、曰く民族的偏見、曰く人種的偏見これなり。

今や漸く世界は民族的偏見を脱して人種的偏見に進みたるなり。一の關門を越へて他の關門に入れり。民族的偏見は祖國的精神の根源をなし、人種的偏見は大陸的精神を養成せしむ。古代の文明は此民族的偏見の産物にして國家を離れて渠等の文明は見る可らず、ギリキの文明は希臘獨特の産物なり、埃及の文明は埃及特殊の産物なり。猶太の文明は猶太一國の産物なり。渠等は互に自國を尊しとなして他國を侮蔑し、自國の文明のみを誇張して他國の文明を顧みざる也。これ無邪氣なる國自慢の結果なりと謂はざる可らず、民族的偏見の産物なりと謂ふ可きなり。歴山大王がホーナルの詩集を携へて戰陣に在りたりと云ふ如きは、彼が希臘文明の寵兒たることを示すものなり。故に彼が劍戟の閃くころ、馬蹄の響くころには詩聖ホームル等に依つて産れたる希臘文明を扶植し、當時の世界を此文明に依りて統一せんとしたることを想像するに足るなり。然れども國家的文明は決して永續す可きものにあらず、一たび三國三種の國家的文明が羅馬に綜合せられて、殆むど千年の永き陶冶融合を経たる結果は、羅馬教會を中心となせる拉典文明の爆發とな



り、更にルーテルのプロテスタントに依りてテユウトン文明の勝利と新紀元とを拓き、今やアングロサクソン文明の跋扈を見るに到る。これ國家的文明より進むで人種的文明となり、民族的開化より飛躍して大陸的開化となれるもの也。東洋の文明は固より誇るに足るものなしと雖も、我帝國は古代の希臘、若くは羅馬の位地にあるものにて、印度の哲學と美術とは支那の倫理法律と相合して我邦に輸入す。而して印度も支那も我邦も國家的文明を脱脚して大陸的人種的文明となれるものを見ずと雖も印度はアングロサクソンの勢力に壓倒せられ、支那は同じく列強の脚下に閉息し、唯彼等の精神生命なる哲學倫理の思想のみは我邦に在りて偉大なる發展をなせり。西洋文明に對する東洋の文化は大陸的と評する程に盛むる者あるを見ず、隨つて彼等の文明は國家的にして人種的にまでも容易に進歩せざる者也。此點に於て異彩を放つものは我帝國なり。彼は民族的精神の強大なるものあると共に、人種的精神の猛烈なるものある也。彼は東洋の盟主を以つて任じ東洋の指導を以て任じ東洋の新進國を以て任じ東洋の生命を以て任ずるもの也。亞細亞人種はその進退興亡の運命を彼の肩に擔はしめつゝある也。朝鮮の事大主義は追々衰へて我邦に據らむとするなり、清國の頑迷固陋は漸く覺醒して我邦を師表せんとするなり、蒙古も我邦の文化に隨喜し暹羅も我邦に學ばむとす。彼は茲に於て東洋を背負ふて樹つと共に人種的感情を大に煽發せんとするに似たり。世の策士は揚言して曰く將來興り來る世界の大騒動は黃白兩人種の人種的争闘ならむと。我帝國が東洋の盟主たる大抱負は此所謂大策より割出せらるゝに似たり。然れども斯る意味の東洋の盟主は恰も事實に於て陷落しつゝある旅順口の露國艦隊の敗殘を卒ゆる司令官に髣髴たるものにて、

衰象滅殘の東洋弱國を卒ひて我帝國は何をなさむとするか。歐米に於ける黃禍論の如きは斯る大策士の空論に對する風聲鶴唳のみ。余輩は茲に於て東洋の盟主杯稱することの甚だ無意味の用語なることを懷はざる能はず、指導者は必要なり未だ盟主の必要を見ず、彼等は教育せらる可きものにて未だ獨立して盟主を戴く程に發達したるものにあらざる也。故に余輩の人種的情感は他人種に對する敵愾的人種感にあらずして、同人種に對する救濟的博愛的人種感ならざる可らず、先づ彼等は救ふの必要あるものなり。彼等は國家とし人種とし個性とし政治教育悉く博愛的精神を以て救濟するにあらざれば、歐米人の怖るゝ世界に黃禍をも起す能はずして最後の悲劇に到らむのみ。

ドクトル、ギユリツキ氏は『日本の進化』を論じて我邦を西歐グリーキの位置に比す、海老名彈正氏は更に同氏の説を評して希臘に勝る統一力あるところ羅馬に髣髴すと論ず。余輩は懷ふに昔の日本は知る能はざれども、世界に於ける日本の位地を自覺し始めてより希臘のそれと羅馬のそれを併有して、東西兩洋の思想を湊合する位地にあり。此點に於て我帝國は羅馬に似たりと謂はざる可らず、羅馬は西亞の美術と北歐の哲學とを融合したるもの也。日本は東洋の羅馬として東西兩洋の文化を綜合統一して新文明を發揮せんとするに存す。嚙昔の羅馬は西歐の日本にして今日の日本は東洋の羅馬にあらずや。羅馬は自ら斃れたりと雖も彼は死して歐羅巴全土の文化を救ひぬ。歐羅巴の今日あるは羅馬の恩惠なることを知らざる可らず、余輩は我日本の運命が羅馬と同一なるや否やを知らず、余輩は彼と同一の運命に陥ら



ざらむが爲に、野に叫ぶ人の聲たらむとを期すと雖も、若し不幸にして滅ぶるとも東洋は  
 我の存在に依つて救はれざる可らず、況むや生きて亞細亞全土を指導するは我帝國の使命  
 なるに於てをや、余輩は地理と天分に於ては日本と羅馬とは酷似する處のものを認む。然  
 れども其死と滅亡の運命に於ては遂に酷似せざらむとを希望せざる能はず、殊に日本は羅  
 馬よりも其天分の内容に於て深大宏高なるものあるを識認せざる可らず、乃ち羅馬は死し  
 て天分を全ふしたりと雖も日本は生きて古代羅馬の比にあらざる大使命大責任を全ふせざ  
 る可らず、古代の世界は羅馬なりしと雖も、今代の世界は五大洲なり、随つて古代の如く  
 單純にあらずして今代は益々複雑に向はむとす。單純なる使命は死して全ふすることを得  
 ることあらむも、複雑なる使命は活くるにあらざれば完ふすること能はざる也。余輩は此  
 意味に於て正成が死を愛したる性格よりも、三成が生を愛したる性格を理想せざる可らず、  
 古代羅馬は死を愛したり。されど我は生を愛せざる可らず、然らば如何にして其生を完ふ  
 す可きか、要するに其秘訣は偉大なる國民的性格を感發するに存す。余輩は此點に於て實  
 に英國の偉大を學び米國の偉大を學ばざる可らず、余輩は英國の偉大をオセロ劇中の佳人  
 デスデモナの性格に學ぶことを得るなり。佳人デスデモナは英國々民の偉大なる性格を予成陶冶したる指  
 導者なり國民的精華なり。余輩は此美佳人に於て人類としての英國人を見る也。その性格天使の如く快調にして美麗な  
 る彼は、その神の如き心を以て人種的偏見を打破したり。或評者は沙翁は斯劇に依りて英國民に人種的偏見を教へたる  
 者なりと云ふと雖も、余輩は寧ろ人類としての英國民の理想を示したるものあるを惟はざる能はず、彼がムアー人の中  
 に偉大を認め崇高を認め神聖を認め戀愛の極致を認め理想の男子を認めたるは、民族的偏見は勿論人種的偏見を超越し  
 て、黑白兩人種を單に人類一如と達觀したる人類思想發展の極致を示すものにあらずや、今日の大英國は決して  
 單純なる修養に依りてその性格を發揮したるものにあらざる可し、然れどもベーコンの哲  
 學なりノックスの宗教なりヒュームの批評なり凡そ人類に關する思想は此デスデモナの性  
 格に總括せられて耳に聴かしむる説教、理性に訴ふ哲學、研究心を鼓舞する批評に勝りて、  
 直に英國民の眼と心情とを開拓し、彼は偉大英國國民性格感發の女神となれる也。エドヰンア  
 ーノルドが近代詩人の榮冠を以てして我邦歴史上の美佳人袈裟に無量の同情を表し、新橋  
 の藝者をワイフとなせる如きは、偶々以て佳人デスデモナの感化を受けたる英國民の面白  
 き附録なりと謂はざる可らず、而かも彼が亞細亞の光に釋迦を歌ひ、世界の光に基督を歌  
 ふどころ、彼は茲に黒色のインデアンを見ず、質實なるヂユウを見ず、直に彼は茲に全人  
 類を見たり。哲學的詩人の胸中には唯萬人の心あるのみにて、大英國民の大なる所以は乃  
 ち之に外ならざる也。殊に米國に於て面白きは大統領ルーズベルトが黒人の首領ブーカワ  
 シントンをホワイトホールに招ひて、喰ふと共に心情を吐き椅子は異なれども手は握られ

る彼は、その神の如き心を以て人種的偏見を打破したり。或評者は沙翁は斯劇に依りて英國民に人種的偏見を教へたる  
 者なりと云ふと雖も、余輩は寧ろ人類としての英國民の理想を示したるものあるを惟はざる能はず、彼がムアー人の中  
 に偉大を認め崇高を認め神聖を認め戀愛の極致を認め理想の男子を認めたるは、民族的偏見は勿論人種的偏見を超越し  
 て、黑白兩人種を單に人類一如と達觀したる人類思想發展の極致を示すものにあらずや、今日の大英國は決して  
 單純なる修養に依りてその性格を發揮したるものにあらざる可し、然れどもベーコンの哲  
 學なりノックスの宗教なりヒュームの批評なり凡そ人類に關する思想は此デスデモナの性  
 格に總括せられて耳に聴かしむる説教、理性に訴ふ哲學、研究心を鼓舞する批評に勝りて、  
 直に英國民の眼と心情とを開拓し、彼は偉大英國國民性格感發の女神となれる也。エドヰンア  
 ーノルドが近代詩人の榮冠を以てして我邦歴史上の美佳人袈裟に無量の同情を表し、新橋  
 の藝者をワイフとなせる如きは、偶々以て佳人デスデモナの感化を受けたる英國民の面白  
 き附録なりと謂はざる可らず、而かも彼が亞細亞の光に釋迦を歌ひ、世界の光に基督を歌  
 ふどころ、彼は茲に黒色のインデアンを見ず、質實なるヂユウを見ず、直に彼は茲に全人  
 類を見たり。哲學的詩人の胸中には唯萬人の心あるのみにて、大英國民の大なる所以は乃  
 ち之に外ならざる也。殊に米國に於て面白きは大統領ルーズベルトが黒人の首領ブーカワ  
 シントンをホワイトホールに招ひて、喰ふと共に心情を吐き椅子は異なれども手は握られ



たること也。米人は黒人を排し、アフリカ人の如き紳士淑女の間には殆む共々に伍する者すらあらざるに、ル氏は社會の毀譽褒貶を超越して、黒人のモーセを優待し彼を尊敬す可き紳士として厚遇したるは、米國民の偉大なる性格を代表したるものと謂はざる可らず、余輩は此大統領ルーズベルトの心情に佳人デスマナの麗しき心を見ることを得る也。余輩は新民族主義の理想として斯る優麗博大なる人類思想の實現を期せざる可らず、新民族主義は哲學宗教藝術以上に於て國民各自の性格にその人類的大思想を具體顯象するに存す。而して此人類的大思想の發展し來る處はオセロデスマナの如く、實に結婚問題の上に存することを知らざる可らず、唯異人種相互に交際す云ふ如きは一種の美と眞とは窺ふに足るも、未だ人類思想の極致を示したるものと云ふ可らず、人類思想の極致は交際以上の結婚問題に現はる。結婚は人種の改造にて人類の革命也。基督は「亦人々西や東北や南より來りて神の國に産するならむ」と謂ひ、「我には此牢にあらざる外の羊を有す、彼等をも引來らむ、彼等我聲を聞かむ、遂に一の群一の牧者なる可し」と謂ふを見れば、此理想抱負を具體ならしめば宗派と人種とを全く合一するにあるや燎々乎たり。余輩は印度人なる釋迦、猶太人なる基督に對して印度を見ることを得るや、果た猶太を見ることを得るや、否、否、見ることを能はざるなり。唯余輩は彼に於て人を見るのみ、人種を見るのみ、彼の眼中には民族の差別も人種の差別もなく無始無終の人類あるのみ。余輩の新民族主義は此人類無差別の見地を發揮するに存す。余輩が精神的に印度人なる釋迦、猶太人なる基督と結婚するが如く、精神と肉體とを合せて清く氣高き各人種の紳士淑女が結婚しなば、カナの婚禮の如き百花爛漫たる状態は人種的偏見を打破して人類思想發展の

上に顯現することを得可し。而して斯の如き大理想を行はむとするに當つての一大條件は、尠くとも宗教と哲學とに依りて頭腦と心情を開發修養したる識見聰明を要することは是也。余輩は宗教と哲學とはその形而上の方面に於ては殆む同一のものと信するものなり。而かも宗教は實踐理性を重むるを以て哲學の思索と共に道德倫理の躬行を強請する者也。西語に哲學をフフロソフと云ふは、フロソスの愛とソフヤの智慧とを合して哲學と云ふに到れるもの也。故に哲學とは謂ひ更ゆれば愛の智識と云ふと也。故に若し宗教とは神と人とを結合することを意味すとせば、哲學は其結合力なる愛の智識を極むると謂ふ可き也。愛と智識は別言すれば情感と理性にはあらずや、美と眞とを離れて哲學はあらざる也。而して此美の對象となるものは圓滿完全なる宇宙の中心、無始無終にして天地の絶對理想なる善なる神なり。完全なる理想善は美なるものなれば、之を不完全にして有始有終なる余輩が慕ひ焦れて隨喜渴仰已む能はざるの至情、これ實にプレトリーの聖愛也。この聖愛を全ふするの道と眞理を理性に求むる處、ソフヤの起る所以ならむ。愛の盲目なるとは最古の希臘人の理想たりし愛の神が盲目なりしと云ふを以ても明白なり。然れども眞正の愛は盲目なる可らず、プレトリーは愛の盲目の神に眼を入れたるものなり、龍點睛を缺くに似たる躍るが如き清き愛に點睛を加へたるものは彼也。盲目なる愛の神は智慧の樹の果を喰はざりし以前の原人夫婦の如し、而かも人の人たる所以は智慧の樹の果を喰ふたる後にあり、眞正の愛は原人の如く成る可らず批評眼なかる可らず向上精進の理性なかる可らず、茲に於てか人の心はフロソ



●●●●●ロソフ井ヤならざる可らざる也。余輩曾つて青柳有美君と共に本郷附近の某古本屋の前を過ぐ。有美君微笑を含んで曰く、此本屋には美人の娘ありて幾多の青年學生を引着したるに、此頃不在となりて學生の顧客大部分を失ふたりと、斯の如きは固より普通の事にして奇も妙もあらずと雖も、相手が有美君の事とて一種の情想に打たれたるを覺ゆ。無趣味なる生活を爲せる學生が美人の在る處に集る、こゝに大なる哲學の存するものにあらずや、彼等は自己の無趣味を感ずると共に美有り趣味ある人を需むるものなり、尙ほ適切に謂へば萬人の胸中に存する理想のイデアが美人となりて其幾部分を現はしたる處を隨喜渴仰するもの也。彼等の中には美人の美を皮に求め骨に求むるもの多からむと雖も、其皮や骨の中にもイデアの現はれざるを認むるもの多からむ。而かも此イデアは假象のイデアにして實相のイデアにはあらず、一休が美人の顔に唾を吐きたりと言ふは假象の美を超越して真相の美を覺得せんことを教へたるもの也。落花流水の悲歎は假象美に伴ふ痛切の恨事なり。故に眞に愛の智慧を有するものは假象美の不満足を真相美に到りて充すことを得るなり。この真相美とは乃ち神の姿を云ふなり。神は其産み給へる獨り子を賜ふ程に世の人を愛し給へり、人の神を愛するは神に愛せられざることを自覺する時也。神人を愛し人神を愛す、この我と神との交感より生ずる清き愛を以て結婚する處のものにあざれば、醜業婦と墮落外人との結婚の如く祝儀は醜儀と化する也。基督は天國を以て新郎新婦の婚縁に譬へられたることあり、天國は婚禮の式の如く百花爛漫たるものなり。随つて余輩の主張する結婚は天國が麗はしき結婚の意義を有する如く、天國の神聖なる意義を發揮する處のものならざ

る可らず、肉に依れる結婚は肉なり靈に依れる結婚は靈なり生命なり眞理なり。余輩の知人に『ほそ路』と號する詩人あり、彼は産れながらの厭世家なりしが養ひ得て達人となるに到れり。彼れ此頃華燭の典を擧ぐ、夫人はこれ綠眼金髪の歐米美人なり、余輩は彼に於て余輩の理想的結婚を見るなり。夫人も厭世的趣味を有する人にして其人は乃ち其人なり。彼等若し虚榮心の化身なるハイカラ黨ならむには、余輩は極力反對したりと雖も彼等は共に理想の人也。肉に死して靈に活くる人也。故に満腹の同情と尊敬とを以て之を迎へたるのみならず、余輩の理想の漸く余輩の長友に依りて實現せられたるを祝するものなり。神の國に於ては何人も神と結ぶを得るが如く、理想の新民族主義は我帝國をして人種的偏見を打破する地上の理想國たらしむるにあれば、『人々東西南北より集りて神の國に座する』が如く各人種を愛の智慧に依りて合同融化せしむるの新主張を行はざる可らず。

余輩神戸に在りて多くの雜種兒を見たるに、顯著なる事實は父母の人格ある人は比較的醇良の子女を有すと雖も、人格なき父母を有する者は殆むと人間として失敗したるものらしく想像せらる。而して斯の如き人はノアの洪水以前に創造せるものなりしならむと思惟することあり、彼等は實に父母の缺點のみを遺傳して美點を繼承せざるもの多し、而かも之れ彼等の家庭教育の結果ならむと想像せらる。主人は無教育にして射利を之れ事とする卑劣なる外人にして、母は娼婦若くは賣淫婦の左團扇の生涯に入れるものなり。殊に父よりも母の心事には結婚當時より一種厭ふ可き陋劣なるものあるなり。斯る家庭の多數は人の子



を人の子として教育するの資格なき者なり。父母の缺點のみ發揮せらるゝも怪むに足らず、我邦人の中にも斯る家庭は甚だ多し、未だ以て墮落外人の家庭のみを輕蔑す可きにあらず、要するに無教育無宗教無道德の家庭は惡遺傳の伏魔殿なり、民族は墮落し人類は滅亡す可きのみ。之に反して吾に民族を救ふのみならず、人種を人類の大理想の中に融化して人類を神の子たる意識に於て救ふ處のものは、『神を愛するの智慧』を深く養ふ結果として始めてこの大目的を達することを得可し。惟ふに萬國の人を統一し訓練し支配せんとするものは、法律若くは國民的道德を以て成し得る事柄にあらず、唯只『神を愛するの智慧』に充て始めて彼等は信仰理想を同ふして統一せらる可き也。余輩が先きに此點に力癪を入れて高調する所以のものは、乃ち此點に存するものにて、新民族主義は此信仰を完ふして始めて成功するものなり。然らば余輩の新民族主義とは何を意味す可きか、單刀直入余輩の理想を語れば大々的雜種民族を造るにあり。而して此民族を精神的に支配し修養せしむるものは、正義にあらず、自由にあらず、平等にあらず、唯『活ける神を愛するの智慧』のみ。この愛の中に清き正義あり、優しき自由あり、床しき平等あり、故に此大民族を吞吐する國家も此愛に依りて施政を試みざる可らず、孝と謂ひ忠と云ふ將に此愛の別名に外ならず、若し忠孝の思想感情より聖なる愛を排し去らば最早忠孝はあらず也。忠孝の中心生命はホーリーロープにあらざるなし。聖愛は此二大思想の精神なり、聖なる愛の聖の中には宗教的畏敬の情念を有す、故に聖愛は敬愛の意味深重なるものなり。此敬愛の意味深重なる聖愛を以て親に對し天皇に對する時、茲に忠孝は産れ來るものなり。神を敬仰する心を以て君親に對するが故に、その忠や孝や尤も清く深く強きものあるならむ。されば此大民族の君となり

親たらむとする者も『神を愛するの智慧』に充ちたる人ならざる可らず、民に對し子に對するや神を愛するの清き心、神の人類を愛し給ふ其大なる愛を以て其子と其民を育て治めざる可らず、斯る大民族國を實現せば人類學上の理想國を實現したるもの也。之れ人類思想の天國にあらずして何ぞ、萬國萬民は黄金乳香没藥杯を供物として此理想國に來らむ。新しき歌は萬國萬民の口に依りて此理想國に向つて歌はれむ。新なる神の眞理と恩寵はこの理想國に依つて萬國萬民の上に輝かむ。

この大民族主義は常に余輩の理想する處の者にあらず、既に我民族發展の歴史が其幾分を實行し來れるもの也。驚く勿れ我國史の第一頁を繙きたらむものは、天孫人種の征服者が劍を揮ふて地を領したるのみならず、九州東北中國に於ける異邦人種を吞吐して既に業に大雜種國民を造りたるもの也。大和民族は亦の名雜種民族と云ふこと也。雜種國民にあらずれば大國民となるの資格なし、大民族となるの資格なし、大帝國を建設するの資格なし、既往に於て雜種兒を統一して大帝國を建設したる我愛する祖國は、更に將來に於て大々大に各人種の雜種兒を統一したる大帝國とならざる可らず、斯の如き帝國は世界の歴史に未だ曾つてあらざる處也。我邦既に宇内の覇主たらんさせば必らず將來天地開闢以來の大帝國大民族たる覺悟なかる可らず、而して此覺悟を行はむとせば世界に未だ曾つてあらざる嶄新卓抜の新理想なかる可らず、余輩は死せるセシルローズを千尋の地底より呼起して、『我今日本民族の前に樹つて靴の紐を解くにもたらざることを感ず』と、彼をして慚悔せしむると共に彼の理想を理想とするアングロサクソンに一大洗禮を施さる可らず、彼等



は自家の優等を誇り劣等人種を支配するの特權は獨り彼等の掌握する處となす、之れ未だ余輩の理想よりすれば大國民たるの資格なき所以なり。故に余輩は余輩を輕蔑する敵たる彼等を愛して、生殖作用を以て併呑するの勇なかる可らず、而かも今日の儘にて彼を併呑せんとせば彼に併呑せらるゝのみ。余輩の人格は彼に於て數歩を譲る者なり。彼に勝るの人格を養成するに非ざれば併呑せらる可き疑ふの必要な程也。『洵に洵に我爾曹に告げむ優等人種を制するものは唯優等の人格あるのみ』。これ我同胞の記臆す可き天來の警句なり。オセロがデステモナを制し得たるは彼の人格が優等なりしが故也。我畏友『はそ路』が靜肅なる白美人を制し得たる所以は優等の人格ある結果也。人格は恐る可き征服力なり併呑力なり人格の向ふ處には敵なし、『光は暗きに照り暗きは之を悟らす』とも照り輝く處に暗黒は征服せられ併呑せらるゝのみ、人格は光明なり生命なり、人種の優等は人格の優等には及ぶものにあらず、人種の優等は恰も磨かざる珠の如し人格の優等は磨きたる珠也。磨きたる珠は理想の顯現にして磨かざる珠は尙ほ理想を去ること遠しと云ふ可き也。

或意味に於ては結婚は抑も未なり、平等無差別の愛情は第一義なり。而かもこの愛情や精神と精神の接觸、人格と人格との感應より生ずるものにて、結婚は愛情の全体にはあらず、愛情の一部現象に外ならず、精神と精神との合一は結婚に勝る大調和なり。故に離婚を目的として單に異人種との結婚のみを理想せば、斯る種類の人は人格なく輕薄にして取るに

足らざる人のみ、彼等の結婚は政畧のみ、權謀のみ、世に尤も卑む可きものは此種類の人物也。斯の如き結婚の弊害あるは同族異族を問はざるなり。弊害は一のみ、流毒の大なるは一のみ、現代の日本は藩閥倒れて閥閥興れりと云ふにあらずや、自家の位地名譽を開拓せんが爲めに、戀愛を犠牲にするも結婚政畧を行はむとする者多しと云ふにあらずや、斯る人物は外人と結婚するも結婚を利用して何事をかなさむとするもの也。若し夫れ人生の大問題なる結婚にして斯の如くならむか、その害毒の大なる殆むど余輩をして堪ざらしむるものあらむ。去れば眞正の結婚は愛と人格とに依らざる可らず、男女共に人格を以て世界を征服するの覺悟なかる可らず、人格ある者は愛を受けるのみならず、大に敬せらる可きものなり。彼は萬人をして聖愛を感發せしむる威力あり。之れキリストをして『マリヤは好き方を撰べり』と叫ばしむる處のものなり。人格の向ふ處は調和なり感激なり無差別なり。保羅が羅馬を征服したるは人格にあり、基督が全人類を捕虜となせるも人格に存す。基督や保羅や實に萬人の聖愛を感發したるものなり。奈翁をして歎せしむれば、基督の愛の王國の爲に死するものは殆むど無數なり。彼は萬人の愛人なり戀人なり、無數の大丈夫は彼の爲に身心を靖獻せざれば満足せざるなり、無數の童貞女は彼が爲めに水火の難を辞せざるなり、これ彼が『神を愛するの智慧』を以て私心なく萬人を愛したる結果なりと謂はざる可らず、彼は斯の如くして萬人の王となりその帝國は萬國を統一せざれば已まざらむとするなり。余輩は茲に學ばざる可らず、我國民は未だ全人類の師表となり慈親となる大人格を生ずるに到らず。人格ある國



民は斯る大人格を生ずるものなり。この人格は世界の各民族、各人種を統一する底の威力あるもの也。我國民は其方面に一大修養を試み、釋迦を生じ基督を生ずる程に人格ある國民とならざる可らず、

否寧ろ我國民が釋迦の人格を具體し基督の人格を具體して、世界人類の我民族の前に出る時、その愛と徳に感泣流涕して已まざるものあらしめざる可らず、彼の武器は愛なり正心なり眞實なり、この武器を以て世界を征服し人類を開拓して大日本帝國を世界人類の胸中に建設する也。故に新日本民族主義は四千五百萬同胞を生かせしむるに足らざる大八洲のみに確立す可きのみならず、五大洲の表面にこの新日本民族主義を打立つる也。豊葦原の瑞穂國は龍蛇の如き蜻蛉洲のみを云ふにあらず、世界全土を擧げて豊葦原の瑞穂國となすに存す。舊日本が雜種兒の産物なりし如く、世界人類を雜種兒たらしめて茲に新日本大民族を養成するなり。論者或は云はむ劣等なる人種なるを如何せんと、保羅は之に答へて謂はむ『我儕一つ體に多くの肢あれども皆その務を同ふせざる如く、各人キリストに於て一つ體たれば亦互に肢たるなり』と、新日本民族主義は人種の優劣を以て人類の價値を上下することを許さざる也。余輩は謂はむ『我儕の身體に四肢あるが如く人種の別ありと雖も、その人類たるに於て一致し亦互に別れをるなり』と、新民族主義は斯の如く人類主義と一致するものなり。隨つて日本帝國は萬國萬民の日本帝國なるなり。各人種は此帝國内に於て何等の差別上下を有せず多幸多福の生活をなすことを得るなり。萬國萬民はこの大日本帝國國民たることを光榮とするに到らむ。而して斯の如き大なる夢の我日本民族に依つて行はれむと地

のセシルローツは『あゝ我は嘗つて小なる夢を見たるを愧つ』と浩歎するなる可し。

然るに此時國粹保存論者の聲として心耳に響くものあり、若し斯の如き君の理想を行はむとせば金甌無缺の我國體を奈何せんと、之れなり之れなり問題は乃ち之れなり。然れども此問題は決して恐る可き問題にあらず、何の苦もなく解決せらる可き問題なり。余輩は茲に我國體の精華を基督の山上の垂訓中より引かむか、如此するは天の父の子ならむ爲なり、夫れ天の父は其日を善者にも惡者にも照し、雨を義者にも不義者にも降せ給ふ』と、之れ基督教の骨髓なると共に實に國體の精華なるものにあらずや、天子は天徳を體したるものにて萬民平等無差別なり。別言すれば天子が天徳を萬民に光被せしむると共に、萬民が共和政治に勝りて天子の高恩に感泣する之れ國體の精華に外ならず、唯問題は天子が天徳を體し得るや否やにあり、若し眞に天子にして『神を愛するの智慧』に充ることを得ば聰明を飲く處の者も賢聖の人となることを得、聰明なる人は更に一段の賢聖を加ふことを得可し。而して余輩の耳に響きたる國粹論者の國體觀には皇室の問題と共に血統問題の伴ふことを豫想し得るものなり。乃ち彼等は異人種を我國民の中に加ふるは國民の血統を紊すの怖れありと考ふるも、斯の如きは如何に彼等が哲學的見地に飲くる處あるかを知悉するに足る也。

血統論の如きは髓に無學の産物なり。中華の民が異邦の人を北狄野人に見たるも毫も相違を見る能はず、我民族は既に雜種の國民なれば此國民の大觀よりせば人類は悉く血統の正しきものなることを知れるもの也。何となれば人類は之







に足らず、余輩の子孫が白人の併呑力に敗北して白人化するに到らむか、余輩の子孫は喜むで白色の皮膚を有す可きなり。少しも憂るに足らざるなり、皮膚は彼に譲りて精神と血液とは彼を併呑せば足れり。併し斯る觀察は頗る白人を買冠りたる恐白病に罹れる者の病的觀察のみ、余輩は徹頭徹尾日本民族が世界人類となりて地球の全面を支配するに到らむことを確信して疑はず、故に大に雜婚を試み各人種の中に余輩の血液を分配す可し。之れ天地宇宙の造物者に代りて人類を改造する處ののなり。日本民族の血液の洪水が全人類の膚中に流れ込まむとき、古き各人種は一新せられて新人類を創造するに到る可し。之れ廿世紀以降數百年間に亘れる人類改造の大洪水ならむや。この洪水は人種的偏見を打破して眞に人類は神の子なりとの人類思想の産物たる精神融化の新人類を創造するを以て目的となす。此日本民族の全人類の精神に湛へし血液は、我民族と人類との新約の血にして、世界の各人種は此血を汲まざる可らず、この血の流通する處は黒人の中にも、白人の中にも、黄人の中にも、人を見出すと共に神を見出すにあり。生理上心理上人は皆一なりとの活眞理を具體實現して血あり涙あらしむるに存す。言語は異なり宗教は異なり習慣は異なりも人の内には神の聲あり、その神の聲は人類は一なりとの理想の響きなることを明にするに存す。新日本民族主義は人類は一なりとの此絶對的觀念の上に立つもの也。而して此觀念や決して新らしく學者の頭腦に生じ、識者の識見となれるものにあらず、古き古き眞理の一なりと謂はざる可らず、然れども一大帝國一大民族が此眞理に隨喜渴仰して世界に實現せんとする者は、我大國民の外にある可らず、此大國民は余輩の絶對的人類觀を實踐す可き使命を奉じて新なる血の約束を人類と結ばむとする也。我大國民

は斯の如くして人類其者の代表となる也。常に代表となるのみならずその慈顔愛腸は人類全体を抱くなり。而して此大なる人種救済者たる大國民に依りて白人は白人たるを脱し、黒人は黒人たることを脱し、黄人は黄人たることを脱し、渠等は人類として理想的な新日本民族主義の系統に屬し、此大主義の理想を實現して新人類となるに到る可し。故に新日本民族主義は絶對的人類觀の理想に存す、彼は黄人を保護せんとし白人を保護せんとし黒人を保護せんとするにあらす、全人類の別名乃ち新日本民族を造らむとするに存す。主義は元來精神なり理想なり、この主義理想を實現せんせば小なる島國根性を脱脚し、全人類と同化せざる可らず、而して眞に此理想に忠實熱切にしてその實現に盡せば、其大理想に於て全人類と共に我國民は永遠不滅なるに到らむ。『スヘクテートル』記者は我國民を評して『彼は黄人にして黄人にあらず、亦固より白人にあらず、然れども彼は白人の文明と黄人の思想とを融合して世界無比の新民族たるに到れり』と曰へり。余輩は此批評を以て知己の言となすに躊躇せず、余輩の理想は黄人にあらず白人にあらず、乃ち絶對的人類觀の産物なる新民族を造るに存す。新なるアダムエブは此理想の中にあリ、新人類と新文明とは此理想の中に宿れり。幸に此理想は理想あり信仰ある者に依りて生殖作用を以て實現せられむとす、余輩は此些々たる我民族中の新潮流が智あり識ある健全なる人士の大潮流となりて、新人類の創造を急速ならしめむことを理想せざる能はざる也。



## 第九章 神聖帝國の建設

新時代之曙光

神聖帝國の基礎は偏狹なる民族觀にあらず、固陋なる國民觀にあらず、暗愚なる人種觀にあらず、萬國萬民を共通する『人』てふ觀念に存す。この『人』てふ觀念が圓滿完全なる理想に進むとき、その燦然燿赫の光輝は偏狹固陋暗愚なる民族國民人種の暗黒なる側面を打破し盡して光明の側面を發揮し來る。この『人』てふ觀念の理想的發展進化を爲せる民族、國民、人種の個性の中に神聖帝國は實現するなり。別言すれば神聖帝國は哲學、宗教、倫理の眞と美と善とを具足攝取したる個性人格に内在し亦外在す。この帝國は縦や『豊葦原の瑞穂の國』と云ふ如き桃源鼓腹の同胞を垂涎三尺たらしむる詩歌的美名を以てするも、其小なる範圍面積の國土を以て満足するものにあらず、尙ほ進むで大陸に膨脹せざる可らず、然れども此大陸は未だ地球に膨脹するの楷梯に過す、その地球すらも尙ほ且つ遂に宇宙を占領するに到らしむる雲の梯に外ならざる也。去れば此宇宙は余輩謂ふ所の神聖帝國の内に攝取せらる可く、此神聖帝國は亦かの人格てふ觀念の具象實現の内に攝取せらる。而して此人格の内に攝取したる宏大無量なるものを海獸の海潮を高嘯する如く、萬丈の光

## 新時代之曙光

新時代之曙光

餓として吐露し來るや更に茲に地球大陸宇宙瑞穂國は清新なる意義あり千古の光明ある神的宇宙の千姿万容と聖化するに到る。

然らば此『人』とは如何なる意味の者ぞ『人』は萬有最高の現寫にして萬有と共に生存するもの也。而かも亦萬有を超越して萬有以上の生活に入らしむる處のものあり。萬有多くの客觀のみの存在物なるに『人』に到りて主觀を有する存在者となれる、これ實に萬有以上の生活あらしむる所以也。生活の意義は主觀ある者に到りて始て明白也。植物の如きは生存あるのみにて生活を去ること遠く、動物は稍々深き意味の生存あるのみにて生活の影を追ふに過ぎざるに、主觀の發達したる『人』に到りて生存以上の生活を試むるに到れり。生存以上の生活を試むるものは是れ或意味に於ける萬有以上の存在者たることを意味す。然れども『人』悉くは未だ主觀の萬全に發達したるものにあらず、人の中にも上中下の階級ありて獸我に生活するものは動物の生活と殆むご平線を均ふせんとし、人我に生活するものは漸く萬有以上に位ひし、神我に到りて萬有を超越したる生活となる也。而して斯る生活の相違は人と人との間に視るのみならず、個性發展の實歴に於て明白に色讀することを得るなり。譬へば幼兒が慈母の胎内の安樂國より苦樂の日月永遠に輝くこの天地に呱呱の聲を揚げて兩三年を経過する間は、無我無心にして萬有の一斷片に過ぎずと雖も、一たび



「我」と云ふ感覺の發揮し來るや、この「我」の中には獸たり人たり神たる要素を混合したるものにて、輕蔑す可きものあり、亦大に尊敬す可きものあるなり。此時に先づ主觀は産れ始めたるものなり。人の生涯は之れより序幕を開き幾多の暗闘活劇を経て大團圓まで進む也。而して此人の生涯の大團圓を見るに或は神に成れるあり、或は魔に成れるありて悲劇の主人公あり喜劇の主人公ありと雖も、光明劇の主人公となりて大團圓を告ぐるもの甚だ尠なく、暗黒劇のヒーローとなりて樂園失落の最後を告ぐるもの甚だ多きは、余輩の常識の明白に示す處のもの也。人の多くは覺醒の徒にあらすして醉生夢死の徒なり。これ或は貧富の懸隔にもよらむ、教育の布及宜敷を得ざるにもよらむ。我執偏僻の罪にもよらむ、孰れにせよ凡人多くして大聖少きは人類の歴史の語る處也。而かも文明の理想は人類を擧げて悉く大聖たらしむるにあり。魔たらしめずして却つて神たらしむるにあり。別言せば魔は纏て神たるものなり。凡そ人たらしむものは否寧ろ耳目鼻口を有して好く此官能を使用し得る處の者は、如何なる野人黒奴と雖も魔たらむとして魔たる能はず、竟に神たらむとするもの也。有美君の如き魔を以て任ずる人すら善と云ふ字を冠らむとする也。魔は竟に善を戴かざる可らざるもの也。否善とならざるを得ざるものなり。故に渾圓球上苟も「我」と云ふ意識を有する動物たらむには、その旨我たり無我たるを問はずその「我」の有する理想を具足するか、若くはその理想に苦められて生涯の大團圓を告げざるものは殆むと稀なりと云ふ可し。

余輩は之れより此「我」に就て更に深く講究せざる可らず、別言せば宇宙より見たる「我」の位地は如何之れ大問題なりとす。わが神觀茲に於てか一題目となる。余輩は嘗つて夏期の猛陽烈威を逞ふする時に當り、「山の宗教」と云ひ「海の宗教」と云ひまた「野の宗教」と云ふ如き雅趣ある問題を捕へて論ずると謂はむより寧ろ歌ふたることありき。余輩若し一たび足を千山の高きに進めて、地に遠く天に近き大空を仰ひて立むか、小なる我は天地の大氣に吸ひ込まれむとするの思ひあり、若し一たび一葉の扇舟に桿して湖心洋上に浮び、水天髮髯の間に遊ばむか、涼風我を吹ひて没我の境に入らしむるあり、若し一たび杖を曳ひて佳人の秀眉の如き新月の匂ふ緑野に高臥し、白露深き更開けたる天地の靜氣に接せんか、心自から融けて露ならむとするの味ひあり。大なる自然に對しては我は恍惚としてその威嚴と恩寵とに酔はざるを得ず、これ此大自然の深奥なる處に威嚴と恩寵との根源なる大なる力あることを認むるが故なり。此力は物力以上の力として余輩の主觀に接觸するのみならず、倫理學者は茲に斯學の基礎なる善を發見し、哲學者は茲に相對の親なる絶對を視出すもの也。公平にして冷靜なる判断を以て考ふ時にプラトンの至善、孔聖の天と云ふ觀念より以上にも以下にも出る能はざることを感ぜざる能はざる也。基督と雖も哲學若くは倫理の理窟を研究して此大なる力を説明せんとするに當つては、多分渠等古今聖賢の歸結を脱すること能はざりしならむ。

然るに基督の皇天に對する態度は思想にあらすして心情なり。研究にあらすして直覺なり。遣り出したるにあらで實驗なり。基督の宗教的心情は朝に夕に微吟し玩味したる幽玄にして博大なる詩篇に依りて感發せられたるが如し。殊にダビ



① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕



を統一する無限の力は眞の意志と云を得べきも、基督の心情を透して紹介せられたる神は愛の意志なりき。余輩は美の中に愛を見るは尋常の事、進むでは自家胸底に存する道義の大法の中にも神の愛を見、國家興亡の正義の鞭撻の中にも愛を見ることを得る也。罪惡を憎む道義の大法は愛の嫉みの意志にして、此意志に依りて個性は潔められ亦高めらるゝ也。墮落と滅亡より救ふ道義の大法は之れ愛の意志にあらずして何ぞ。國家興亡の歴史は箴言記者の所謂『義は國を高め罪は民を辱かしむ』の大教訓を教ゆるもの也。ニコライ司教の日露戰爭觀は『義軍は勝ち不義軍は破る』と云ふにあり、茲に愛の憎みと謂はむより憎みの愛と謂はむか尤も適當なる大なる意志、大なる力を見ることを得る也。舊約の預言者は當時の國民がエホバを離れて偶像を信する者を姦淫をなせるものとなし、エホバの炎ふの如き嫉みの憎み其頭上に來らむと警醒したり。人情を研究せば眞の愛情には嫉妬の伴ふもの也。故に忠實に正義を受する者は神の愛を受くることを得と雖も、不義不徳に陥る時には道義の大法に於ける個性の如く、國家も大なる憎みを免るゝ能はず、彼は憎みを受け破れ若くは滅ぶるものなり。その破れや新なる國家を造らむがため、その滅びや他の國民と人類を覺醒せんがためならむか。近くは露國破れて其國却つて救はれむとす、神の愛は眞に大なりと云ふべき也。然れども神の愛は常に斯の如く消極に現はるゝのみにあらず、憎みの愛嫉みの愛の

奥に海の愛の意志は存するもの也。約翰をして謂はしむれば『神はその獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり』と、ルートルは此聖句を評して新約全體を含蓄したる小ゴスペルなりと賞し、新島襄氏は此一句を聖書中の富士山なりと評せりと云ふ。而して此一句を尤も好く説明し得る處のものは路加傳十五章の牧者が迷へる羊の一匹を尋ねむが爲に、九十九を牧場に殘して山を越へ谷を渡りて跡を追ふ慈愛の心、亦是家産分配を父に乞ふて之を悉く蕩盡せる放蕩兒が遠國に流浪して饑饉に遭ひ、豚と共に生活するの悲運に陥りて前非を甚だしく慚愧し、謝罪の哀情を齎らして歸國せる彼を鷓首して門前に迎ふる慈父の激越なる慈愛の中に、充分その深遠崇高なる意味を説明して餘蘊なきを信す。茲に於て余輩が少年詩人にして樂手なりしダビデと共に、『エホバわれの力よわれ切に汝を愛しむ』と始に歌はしめたる宇宙絶大の中心力は、今や『エホバわれの力よ汝は切に我を愛しむ』と歌ふにあらざれば満足する能はざるに到れり。余輩神を愛するにあらず神却つて此卑しき余輩を愛し給ふと云ふ、感恩感激感動の宗教意識を生ずるの已む能はざるに到らしむ。この深き宇宙の神秘、絶大無遍のミステリーの極粹を發揮したるものは、基督にあらずして何人ぞや、余輩は天に對する彼の心情の深さ高さ大さを察知するに苦まざる能はず、これ余輩の神觀の一斑にして『我』なる者の大部分は宇宙と結合し宇宙の主宰力となりて、天地を支配し人類に君臨する處のものとなれり。此『大なる我』は『獨りの外に善き者はなし乃ち神なり』との至善觀として基督に映じ、『凡ての物は父に屬く』との萬有を綜合する絶對觀として彼に映じたるを見るべきを得。



基督の神は愛なりと雖も此愛や印度の哲人が想像したる觀音亦は彌陀の如き或は希臘人のビーナス神の如き者にあら  
ず、先きに觀察したる如く美と眞と善との意志にして宇宙を經營し之を統一し之を化育する宇宙絶対の主宰力也。故に基  
督謂ふ處の天父の意義には絶対を意味し至善を意味し慈愛を意味し主宰統一を意味し人格を意味し無限を意味するもの  
にて「父」の一字以て宇宙を吞吐するの堅あり。而して此父の所在は那邊に存するや、答へて天なりと  
謂はむ、然らば其天とは那邊を意味するや、客觀界の蒼々の天は未だ以て此天の眞味を語  
るに足らず、去れば天とは客觀界を意味するよりも寧ろ主觀界、乃ち時間空間を打破して開  
拓せられたる理想界の最と聖き處を意味するものと謂はざる可らず、宇宙構造の奥に此理  
想界あり、人類主觀の奥に此理想界を仰ぐ。これ「宇宙」と「人」の據つて樹つ處の中心  
點なりとす。この理想世界は廣大にして無遍なり。茲に智慧あり光明あり悠久の解脱あり  
無窮の靈覺あり。この理想界の王は宇宙より見たる「大なる我」にして此「我」こそ絶対  
の解脱、絶対の靈覺、光明也。智慧也。然らば更に人類より見たる此「我」の位地如何、  
人類と此「我」との干係は自然界とそれとの干係よりも、其意識的なる交感に於て一層密  
接なるものありと謂はざる可らず、茲に於てかわが人觀亦一題目となる。  
人觀の中心は基督觀なれば余輩の基督論定りて夫より得たる人類觀に歩を進むることこそ  
ん。これ乃ち基督論の高調に到らば一望指顧の下健全なる人類觀の全豹を窺ふことを得べ

ければ也。預言者ナタンが王侯ダビデに與へたる天來の啓示は、預言者の直感より直に王  
侯の直感に慫へたる迄にて、恰も電光石火の如く頭腦より頭腦に閃きたるのみにて、預言  
者も王侯もこの天來の啓示を以て自覺實驗となし、茲に不朽の王國を建設するが如きは、  
遂に彼等の爲し能はざる處なりき。然るに基督は祖考ダビデが猶太建國以來空前絶後の大  
帝國を打建て國民的崇拜の偶像となれるに反して、祖考の未だ爲し能はざる方面、乃ち割合  
に彼等に閑却せられたる神人父子の大思想の奥底を開拓して、新なる宗教を新なる理想世  
界の顯現として發揮したり。基督の神觀は宇宙最奥の琴線、その切々情々たる大絃の響きを  
萬古の下人類の胸底に響かしめむとして、その靈性に絶大絶高の「調」あらしめたるもの也。  
『エホバわれの力よ』と歌はしめたる神は、人の愛するに勝りて大なる愛の力となるに到  
れり。既に神觀は崇嚴にして麗はしく床しき内容と形によりて確立したり。然らばその人觀  
は如何人觀は彼の自家意識也。乃ち彼に依りて「父」の全體は發揮せられたるのみならず、  
その「子」たる真相も漸く明白ならむとす。此子たる意識の天地に宣言せられたるは、ヨル  
ダン河畔に於て領洗せられたる時、鳩の如き聖靈の聲に依りて讚美せられたるもの也。余  
輩は此時に於ける彼の感激感動の強大なるものあるを想像するとき、亦端なく靈鷲山頭の  
古聖が曉天明星の輝くを見て、豁然として大覺悟道に入りたりと云ふ靈智明達の強大なる







の啓示に接したるは卅年間の長き修養と其自得の結果なりと謂はざる可らず、彼は卅にして傳道に従事し給ふや固より家庭は忘れ給はず、而かもはや家庭の人にあらず宇宙の人なり人類の人なり。

長き卅年間の彼は家庭の人にして亦修養の人なりき。此卅年間の人生の實驗に加ふるに修養を以てしたる彼は、残る三年間の生涯に尤も大なる事業を成就して最後を遂げたり。その大なる事業の成就とは何ぞや、乃ち大人格の發揮とその全勝利これなり。先づ劈頭第一に勝利の月桂冠を得たるものは猶太原頭に於ける四十日四十夜の大試練也。石を匏とするの誘惑煩悶は母あり兄弟ある清貧なる基督の爲には、大に同情を値する衣食住の問題、別言すれば生活に干するの難問なり。神殿の頂上より己が身を下に投げむこの誘惑は驚天動地の大企業心の變形にして、清水の舞臺より飛降るが如き雄氣を揮ふて人目を聳動するの奇警卓抜なる企畫を試みむとしたるもの也。萬國の榮華を見るの誘惑は自國の敗亡を懷ふと共に、祖考ダビデが大猶太帝國を建設したるが如く萬國を征服せんとする大望心の動きたることを示すものならむ。この大誘惑に遭遇したる彼は氣力充溢、雄心鬱勃たる稀代の壯年たることを證明して餘りあり、而かも卅年間泰然自若として修養したる彼はこの大試練を其剛毅の如き意志を以て理想信仰の鐵錘を揮ふて擊破したり。靜に猶太原頭の殘月淡き時歩を居村に向つて運び得たる彼は、世界的

大征服を試むるに勝りて自己を征服し得たる萬世の下欽仰す可き大人格たりしなり。麴の試練に敗北しなば彼は富める人となるも困難なることにあらず、企業心の誘惑を脱する能はざりしならむには何事かを爲し得たるならむ、世界征服の野望を行はむか多少の目的は全ふし得たるやも知る可らず、而かもソロモンの榮華を實現し得たるや、モルガンのトラストを企畫し得たるや、ナポレオンの大武力を揮ひ得たるや、これ大なる疑問なり。雖も彼若し其方面の修養を試みなば、勿論大なる天才を發揮し得たるを確認するに足るものあるを懷はざる能はず、然れども彼は獸我の命する處に向つて一身を献げむとするには、天性餘りに清くして高かりき。彼はソロモンたりモルガンたりナポレオンたり得ざるが爲に、其方面の誘惑を諦めたる者にはあらず、彼若し獸性の命する處に従はむか疾風迅雷の大活動を爲し得たるなり。然るに彼は獸性の人にあらずして神性の人なりき。彼の神我は獸我の慾望を全く否定したり。彼若し人我の人ならむには獸我と神我とを臆懼として調和したるや明白也。斯の如くして彼は天使と抱擁すると共に惡魔と握手して所謂乾坤一擲の英雄兒となりしならむ、手に唾して起つる機運兒となりしならむ。然れども彼は不明瞭にも獸性と神性を調和して人我の人となることは爲し能はざる處なり。彼は妥協の人にあらず唯征服あるのみ。神我は獸我の前に大勝利を博したり。獸性は神性の爲に全く蹂躪せられたり。猶太原頭に天使をして凱歌を歌はしめたる彼は光風霽月精魂玲瓏たる全き神性の人なりき。既に自我の分離とその矛盾衝突を経過して凱旋したる靈界の勝利者は、全き神性の人として社會の獸我と戦ひ、同胞の獸我と戦はざる可らず、自家内部の獸我を征服したる彼は更に社會と同胞の獸我を征服せざる可らず、彼をホザナよホザナよと迎ひたる社



會と同胞すら獸性に依つて迎ひ、彼を石にて打たむとしたる者は尙ほ更ら獸性の命する處に從ふたるもの也。神性の人は是等の衝突矛盾を経てゲツセマ子の心理的大悲劇を迎るに到る。これ理想と現實の衝突。愛と嫉みの撞着、天真と虚偽との破裂と云ふ可き也。而かも既に業に自己に勝ち得たる彼の社會と同胞とに勝ち得ざるの理由あらず、勿論勝ち得可きものなり。ゲツセマ子とカルバリーとは同一十字架の両面也。一は神性に依りて惱み一は神性に依りて悦びたるもの也。神性とは天父のその如き愛の意志を云ふ。聖山の夕には此愛の心に依りて同胞と社會の滅亡近きにあるを悲まざる能はず、同胞と社會を愛すれば愛するほごその悲み更に一段を加ふ。ゲツセマ子の聖者は愛に燃へて苦みたる十字架なき。此時の苦みは多く國民を思ひ同胞を懷ふの至情に燃へて苦痛甚だ多かりしが如し。然るに國亡ぶるも國民の招く處なるを思ひ、彼等が罪の結果なることを思ひ、その運命を悉く天父の御手に一任し給ふと共に、『我には外の羊をもてり』との抱負、一國民滅ぶるも尙ほ救ふ可き世界人類ありとの大慈愛の中に希望と光明を擲取して、光明赫々としてカルバリー山上最後の十字架より久遠に人類を抱き給ふ大御心を示し給ひぬ。而して此勝利の生涯を更に光彩あらしむる處のものは復活の哲理也。愛の生涯は決して死を以て其生涯を結ぶものにあらず、天に復活すると共に萬人の胸中に復活するを示したり。然り彼は聖靈の

子として産れて復活の子として大團圓を告げたり。

去れば聖者の健闘と勝利の生涯は如何なる消息を余輩に齎らすかと云ふに、一言以て評せば愛の意志の勝利なり。天父は愛の意志の實體にして聖者は其顯現なりと謂ふ可し。人格は意志に伴ふものにして其意志が更に燃ゆる愛の意志たるに到りて聖者の人格となるに到る。救ひと犠牲とは此愛の人格が神と人に負へる尤も大なる務也。而かも更に進む可きは愛の人格の中心となれる博大崇高なる其宗教意識也。救ひと犠牲の主眼は此意識を人類に意識せしむるに存す。『我を見し者は父を見しなり』と云ひ、『父と我とは一なり』と云ひ、『我は途なり真理なり生命なり』と云ひ、『彼を信する者をして限りなき生命を得せしめむ爲なり』と云ひ、『我は生命の趣なり』と云ひ、『神の子と云へばこそ何ぞ神を讃す』と云ふ得む』と慎重なる態度を以て説き去り説き來る處、聖者の胸中自覺光明の赫々たる大天地あることを示すもの也。『天國は此處に見よ彼處に見よ』と云ふ可きものにあらず爾曹の中に在り』と教へ給ふとき聖者の右手の指は自家胸底を指されつゝありしを仰ぐに足る。聖者は常に『我』を中心として道を説き給ふ。此『我』の中に永遠の世界無窮の宇宙は開拓せられたり。此我は父なる宇宙の大我を抱きつゝあるものなり。此我の中に父なる神は在すなり。此我や夫れ自身はや神の國たるもの也。此我や直にこれ活ける哲學、活ける倫理、活ける宗教なり。聖者の意識は洵に廣大無邊なりと雖も甚だ單純なるものあり、これ萬人の友となりて萬人を此意識に伴ひ得る所以也。聖者の愛の意志は殆む宗教的絶対の權威なりと雖も、此意志を全ふせしむるものは更に其奥にある此宗教意識なることを忘る可らず、此大々的宗教意識が根本







隠れて存し、『益くひ詰くさる』價值なきものは憐む。之れ聖者のブライトサイドの人觀に對するダークサイドの人觀にあらずや、多くの義人、預言者は此ダークサイドの人に依りて苦められ、聖者の生涯は此種の人に依りて悲惨なるものとなれり。茲に神我と獸我との妥協したる怪む可き人我は憐むなり。然れども人の將來は獸我を脱すると共に人我を没脚し、全く神我に攝取せられざる可らず、然り如何なるダークサイドに立てる人にも神我の聲は響くなり。曰く『悔改めよ』曰く『新に生れずば神の國に入ること能はじ』と、余輩は此胸中の一大革命、若くは一大コンボルジョンを経てダークの人は直にブライトの人と化するを見る。ダークは人の現實なりブライトは人の理想なり。而して眞のクリスチャンとなるは此現實を打破して理想を實現するにあり。茲に於て救は新なる意義を以て講究せられざる可らず、余輩は自問自答して云ふ救ひとは何ぞやと、救ひの意義は神我を宿し亦神我を生ずるにあり、別言すれば神我の極致たる基督を宿し彼を生ずるにあり。余輩罪を悔改めてバプテスマを受るまき我胸中に響く聲は、聖者のヨルダン河畔に於ける聲に、程遠からざるものあるを覺へざる能はず、曰く『汝は彼に依りて既に神の子たり』と、我内に隠れて宿りたりし神の子は茲に新に生れたるものなり。基督は既に我内に臨み給ひたるなり。去れば余輩は保羅と共に『我れ最早活るにあらず基督我に在りて活くるなり』と謂はざる可らず、獸我と人我は茲に到りて全く神我に攝取せられたるもの也。故に救ひとは『爾曹の内に基督の姿なるまでは産みの苦みをなす』の保羅の心事を以て、我内に神我の姿を圓滿完成するに存す。

惟ひ見よ余輩の胸中の槽には既に聖者の宿れるにあらずや、父の業は我務となれるにあらずや、我胸中の宿痾は醫さるると共に、我同胞に與る福音のパンは残り十二の籠に充ちむ程の豊富なる經驗を時々刻々甜めつゝあるにあらずや、古き我は基督と共に十字架に附けられ、新しき我は彼と共に復活更生したるにあらずや、斯の如くして獸我の形を取れる我は救はれて神の子となれるにあらずや、基督は此我を祝して曰く『我爾を僕と云はず友と呼ぶ可し』と彼の人觀は茲に至りて圓滿なる極致に達したる也。神は基督の中に在りて彼を神とし、彼は我内に宿りて我を神となさむとす、基督の大神義正に茲に存すと云ふ可し。

宇宙の『大なる我』は人類に内在して自己の圓滿なる實現を期す。神聖帝國の建設はこの神我實現の妙境に存するものなり。聖者が宣して『神の國を求めよ』と云へるはこの神我の實現を意味するにあらずや、余輩は聖者がダビデの爲し得ざる處を發揮し創開し給ひし如く、神武日本武の豫想せざりし處を爲すの覺悟なかる可らず、神の國の建設は乃ち夫れなりと謂はざる可らず、教會問題は直に茲に伴ふものなり。別言すれば神聖帝國の建設は直に之れ教會問題に外ならず、ダビデ、日本武は武力を以て各自の大帝國を打建てたり。教會の擴張は福音の武器に據らざる可らず、教壇の勢力は尤も好く此武器の活用に供せられ、文壇の勢力また好くこの武器の運用に妙ならしむ。然れども是等の二大勢力に勝れる一大勢力は余輩の人格に存す。クリスチャンスピリットは今や世界文明の眞髓となりて文化の大勢を指導しつゝあり、これナザレの聖



者を中心として起れる靈的運動の效果なり。雖も、此中心を圍める余輩クリスチャンの勢力をも無視する能はず、教會は一種の精神病患者の治療所の觀あるに似たれど、亦一種の精神的健兒の團體なることを知らざる可らず、微傷ある患者は全く治癒して雲を呼ぶの健兒なるもの也。此健兒の勢力は基督の生命をして社會に接觸せしむる處に存し、基督者は全く社會を神デバインライズ化するに存す。余輩は此點に於て基督がこの健兒を「友と呼び」給ふの眞意を味はざる可らず、基督の大業を翼賛する健兒は縦や匹夫下郎と雖も、僕たる域を脱して同志の一人となれるものなり。彼は此同志の胸中に活きて彼の生前に於て爲し能はざりし大なる事業を全ふせんとするものなり。彼の遺業の成敗利鈍は一に是等の人の双肩に懸れり。彼は生前に於て同志の徒を鼓舞作興して曰く「我を信する者は我爲す處の業を爲さむ且つ之よりも大なる事を爲す可し」と、余輩は基督生前に於て爲し給ひし業を爲すと共に、更に大なる業を爲すの使命あり。二千年間の文明史は我黨の同志に依りて此大使命を全ふせられつゝあるを證して充分なるものあり、クリスチャンスピリットをして世界最大の勢力生命たらしめたるものは、基督直接の事業にはあらず主の天命を奉じたる同志の効果を否む能はざるなり。勿論彼等同志は悉く榮を基督に歸して空しき心を有するも明白也。余輩も其誠意に習ふて二千年後の今日、更に將來に對する開拓の大精神を新にせざる可らず、二千年間の事業よりも未來は無限なり永久なり。余輩の使命は更に新にして大なり、日本帝國に於ける今後の荒寥落莫たる精神界の開拓は實に大なるものなりと謂はざる可らず、東京に於ける宗教家大會開設の後桂太郎氏はインブリー氏に書を寄せて曰く、露國に對する日本國の態度はアングロサクソン主義にあり、日本の勝利は人道、平和、自由、進歩のアングロ

サクソン主義の勝利を意味すと、余輩は桂氏の玲瓏たる性格に推服するものなり。然れども余輩は幸にしてアングロサクソン主義以上の者を有す。何ぞや基督の宗教基督の人格これなり。今日のアングロサクソン主義は多少の基督教的理想を代表すと雖も、彼岸を去ること甚だ遠しと謂はざる可らず、余輩は我黨のクリスチャンチーを以て我帝國の精神界を開拓するのみならず、更にアングロサクソン主義を開拓せざる可らず、神聖帝國の建設者は此宗教的大運動者なり。彼はナザレの聖者によりて世を潔め世を救はむとし、人を高め人を生さむとするものなり。人はこの聖者に依りて聖化せられ、世はこの聖者に依りて革新せらる。或老儒者會つて曰く基督は實に幸運の人なり、彼は前にバプテスマのヨハネを有し、後には使徒保羅を有したり。これ彼が天下に紹介せらるゝと併せて其事業が成功したる所以なりと、余輩はこの批評が果して適切なるや否やを知らずと雖も、神の國と其義とは基督のみに依りて社會に擴張せられず、彼の精神を以て精神となす幾多無名のクリスチャンありて、彼の精神を膨脹せしめ、救ひの勢力範圍を暢張せしむるあるは事實なり。故に或意味に於ては教會は精神患者の治療所なりと雖も、更に治療以上の問題あるを忘る可らず、乃ち眞に救はれたるクリスチャンは天國の有志家となり、天國の愛國者となりて其國の運命を背負ふて立つの氣魄精神にまで進まざる可らず、従つて彼は日夜に罪に泣くが



如き薄志弱行を許さず、彼は罪の征服者勝利者たらざる可らず、曾つて一人の關西の青年信徒來りて罪に苦むを語る。余輩鼓舞して曰はく予は罪に惱むの人に千萬無量の同情なる可らず、予も實に惱みたる一人なり。然れども洗禮者ヨハ子は世の罪を負ふ神の羔を見よと謂ひ、保羅は彼を信する者は肉と其情及び慾を十字架に附けたりと謂へり。予は基督が予の罪を負給ひしを信すると共に、古き予は基督と共に死して我はや活くるにあらず、基督我にありて活るなりとの自覺を有するに到れり。これ罪に惱む者の一大福音にあらずや、律法を立つるは罪を増さむ爲なり、されど罪の増す處には惑も愈増せり。所謂道徳、所謂罪惡の煩悶苦闘を脱して眞理と恩寵に充る天地の寵兒たらむことは、クリスチャンの大主眼なりと謂はざる可らず、而して此靈界の眞の妙趣はアバ父と呼ぶ子たる靈に充されて、この子たる意識の中に神を見、基督を見、天國を見るに到らむか、茲に始て獲得し獲たるものと謂はざる可らず、語り終りて予自身天來の正氣に充るのみならず、彼も亦大に得る處ありたりとて喜悅に充て去るを見たり。彼は醇良なる學生なれば他日天國の有志家愛國者となりて其運命を背負ふて立つに到るや明白なり。神の國の健兒は自己の弱きを知りて基督に依りて罪の赦しを得、亦彼に依りて眞に古き已れの死せるを實驗せる者なるを要す。弱きを知りて敬虔の念に燃たる有志家愛國者こそ眞に天國の健兒なり。基督は彼の中に働き彼は基督の中に生きて神の國と其義とを愈擴張せらる可き也。ダビデは曾つて舊時代の神の國の健兒なりき。彼祈りて曰く『願くは僕ダビデの家を爾の前に堅く立しめ給へ』、亦曰く『願くは永久に爾の名を崇めて萬軍のエホバはイスラエルの神なりと曰しめ給へ』と、爾の前に堅く立しめ給へと云ひ、永久に爾の名を崇む

ると云ふ、得意の絶頂に登れる彼は斯の如き理想と主張とを以て、自家の大憲法となせり。基督は余輩天國の健兒に示すにクリスチャン生活の最大理想と最大確信とを以てし給ふて曰く、『天に在す我儕の父よ、願くは聖名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ爾旨の天に成る如く地にも成させ給へ、我儕の日用の糧を日毎に與へ給へ、我儕に罪を犯す者を凡て免せば我儕の罪をも免し給へ、我儕を誘惑に遭はせず惡より救ひ出し給へ』と、これ天國に於ける健兒が唯一の信條となし唯一の綱領となす可きもの也。天國がクリスチャン生活とならむとき此極致以上に出ること能はざる可し。故に天國の健兒は自家生活の意義を新ならしむると共に、社會生存の意義を新ならしめざる可らず、別言すれば基督若し此の廿世紀の世に生存し給はば政治に對し、外交に對し、實業に對し、戦争に對し富貧の懸隔に對し、科學の發達に對し、自己に對する高等批評に對し、正統非正統の評論に對し、牧者相互の反目、信徒相互の壓轢、文學美術、哲學倫理に對して、如何なる態度を採り給ふやと云ふことを講究し、隨つて教化の方法傳道の計畫教會の方針に就ても改良す可きものは大に改良し打破す可き者は大に打破し、個人生活の中に神の國を扶植するのみならず、國家社會も神の國とせざる可らず、自から道に進むと共に治國平天下の問題を講究するは、神聖帝國を建設せんとするもの、焦眉の急務なりと謂はざる可らず、今の世は渾沌の世なり思想界は五里霧中の間にあり、余輩の講究す可き神學問題、社會問題、世界觀人生觀の宿題は幾多解決を促す可く眼前に提供せられつゝあり、過渡の時代は依然として其道程に存す。故に若し我輩がチャーチ



1以上の大王国を地上に建設せんことを、神の聖名を崇むるの道を明にすると共に日毎の糧を與るの道をも示さる可  
 ならず、嘗て個人靈性の救済者たると共に國家社會の進運を指導したる教役者は、漸く社會に遅れたりとの酷評を受け  
 むとす。故に今後の教役者は此思想界の矛盾多き過渡の時代に際して、理想的クリスチャンの人格を發揮すると共に社  
 會の大勢を支配するの識見を開發せざる可らず、併せて天國の有志家たり愛國者たる處のものも、是等の二大方面を修  
 養啓發せざる可らず、別言すれば此過渡の時代に際して神の國の圓滿なる意義を明にし、我帝國  
 を救済せざる可らず、譬へば今の腐敗せる社會を救ふの理想は余輩の胸中に明確なるもの  
 あるや、極端なる社會主義運動を健全なる進路に向はしむる定見ありや、文壇の不健全なる  
 ローマンチズムを救済し得る程に宗教神秘の妙味を味ひつゝありや、思想界の黒潮青年  
 詩人の懷疑を光明化する程に智見の徹底したる者ありや、一たび余輩に接したる弱き者を  
 罪惡に陥らしめざる精神的感化力を擲得しつゝありや、亦罪の人迷の子をして商人が土中  
 の眞珠を發見したるが如くに、感泣して天國に入らしむる迄に宗教の眞味を味ひつゝあり  
 や、保羅の所謂『福音の愚』は茲に其眞價を發揮し來るなり。此愚の意味は君子の容貌は愚なりと謂ひ、大人は愚に  
 近しと云ふ如く、大智の極致を意味する者にして、バタ臭き神學論やザヤミ臭き社會運動にては、此愚の眞意を明にす  
 ること能はざる可し。天國は教會よりも大にして福音は教義よりも廣きもの也。故に神聖帝國を建設せんことを直に我  
 帝國を化せざる可らず、福音を天下に宣傳せんことを時代の思潮を教化せざる可らず、教會は此點に於て遠大なる使命

を有す。彼は國家の制度を改革し、時代の黒潮を淨め、個人靈性の光輝を發揮せざる可らず、故に教會は社會の革新、  
 思想界の指導、個性の悔改に就て識見と活動とを具備せざる可らず、是等の點に於て教會は今少し新なる意義を發揮し  
 來らざる可らず、宗教は寺院の專有物にあらず、教會は社會の中心生命なり。現代の預言者をして叫ばしむれば斯る教  
 會は帝國中の帝國なり、内部生命の日本なり。彼は新なる帝國を創造し、新なる社會を創造し、新なる個性を創造せざ  
 る可らず、人道、自由、平和、進歩、平等のアンタゴニズム主義をも聖化して、其實相を發揮せしむるは社會の中心  
 生命たる彼の使命とする處也、これ余輩の神觀と人觀との古きが如く極めて陳腐なる教會觀なり  
 とす。余輩をして尙ほ少しく歩を進めて語るを得せしめよ。乃ち余輩の神觀は亦直に余輩  
 の理想的宇宙觀なり。余輩は基督教のパーソナルゴッドを領解せざる迄は、宇宙は一個の  
 暗室にして盈れば缺くる日光以上に何等の光明界あるを知らざりしか、天上は理性の根本  
 にして意志の本源なることを思ひ、正義は永遠の勝利者にして愛は無窮の生命力なるを知  
 りて、かの物質と勢力の奥にその勢力を支配しその物質を統一する人格的實在あるを確認  
 するに到れり。此人格的實在は宇宙の趣旨、宇宙の心、宇宙の精神に外ならず、宇宙の意  
 味は天地よりも更に大なる理想を有す。天地と云へば蒼々たる天、茫茫たる地を聯想せし  
 めて夫以上に何等の感想を與へずと雖も、既に宇宙と云へば物質的感想を逞ふする天地以  
 上に、靈の意義、理想の意味を豫想せしめて所謂物質、所謂勢力以上の或者を聯想せしむ



るは、頗ぶる快心に堪ざる處のものにあらずや、天地の奥の奥を發揮して始て宇宙の意義は全ふせられたるもの也。乃ち物質勢力の上に理想あり、此理想は活ける實在なり。物質も勢力も此理想的實在ありて始て意義あるものとなり、神秘なるものとなり、詩人を歌はしむるに足り哲人を酔はしむるに足る、希望あり光明ある宇宙は一大家庭となる也。この大家庭の主人は理想的實在なる人格にして余輩個性の活ける父也。有神論殊に基督教の弱點は茲に存すと評するものあり、然れども余輩は答へて謂はむ、一種の哲學者は神は絶對にして不可知者なりと云ふも其弱點は孰れか大なる。彼は茲に理性の本源を求めざるに似たり、哲人は眞の理性は宇宙の根源より來ると云ふ、されど哲學者は此根源を不可知者と爲すが故に、自己の理性の本源をも知らざるもの也。斯る意味の宇宙は彼に於ては最大暗黒のみ。希望なく光明なし。彼は自己の理性の機能に於て失望し果た自殺したるもの也。此宇宙本體に對する暗黒論者が往々にして人生の彼岸を否定し希望の實現光明の勝利を非議する者あるは怪むに足らず、彼は宇宙に對しては樂しき我家なりと思はざる也。彼は暗黒と失望あるのみ、斯る人の人生の戰場に敗北するは必然の運命也。今や我邦にはこの暗黒と失望の子の甚だ多きを懐ふの時、不可知論者の罪亦甚だ輕からざるを批判せざる可らず、宇宙觀明かならざれば人生の發足點を擱取する能はず、彼は天地の孤兒なり宇宙の迷兒なり、然れども若し彼等に宇宙の人格を知らしめ、理性の本源を神秘の中に求め、意志の活動を理想的實在の中に觀取しなば、茲に光明あり希望ありアバ父と呼ぶ床しき者を見出し、宇宙は樂しき我家となり、鳥歌ひ花笑ふ片々たる現象も悉く基督教的樂觀の好材料たるに到

る。人生の意義茲に於て一變し、貧きにも富めるにも自家存在の理想的意義を發揮するを得可し。茲に到つて余輩は二個の結論を得たり、曰く不可知論者は宇宙と人間の自殺を理想する者にして、基督教の理想的宇宙觀は此自殺的曲學を撲滅するにありと、此理想的宇宙觀は神聖帝國建設の第一要義なり。次に余輩の人觀は直にこれ余輩の理想的世界觀を意味す。世界は曾つてアダムエブが樂園を失ひ約百が惡魔の苦悶に悩みしより惡魔の巢窟なりと誤認せらるゝに到れり。殊に神の子基督を十字架に磔くるに到りて人類は悉く惡魔の子なりと思はるゝに到れり。余輩は茲に大なる矛盾を認めざる可らず、乃ち惡魔の子に十字架に刑せられたる基督は何が故にその惡魔の子らを我母我兄弟たり得ると教へたるか。然らば彼は惡魔の子なりしか、否々然らず、彼は實に活ける神の子にあらずや、彼は此神の子の心を以て萬人を見たる也。彼は時には蝮の胤、偽善者、狐よと云ふ如き警問を放つて人耳を動したり。而かもこれ個性全體を評したる者とは思はれず、神の子たる彼の心の鏡には蝮よりも大なる、狐よりも高き個性の映じたることは否む能はず、糧に勝り衣に勝る生命を有する「人」は、蝮に勝り狐に勝るものあるは固より彼の觀取したる處ならむ。唯彼はその大なる「人」に伴ふ狐の如き動物的性格、蝮に近き毒々しき昆虫的性質を極力打破し給ふたるものならむ。彼は山上の垂訓に爾曹の敵を愛し爾曹を呪ふ者を視し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害する者の爲に祈禱せよと教ゆ。然



れども若し余輩が其敵を領解して敵の中に同情を表する點を見出さずして、單に敵を愛せんとするは余輩の爲し能はざること也。敵を徹頭徹尾悪魔として其罪を赦すは恰も寛仁大度にして一見罪を赦したるに似たりと雖も、自己の心に映する敵は既に人として死せる人也。自己の心に於て人を殺しなから敵の罪を赦すも其寛仁大度は偽善者の寛仁大度に外ならず、故に基督の敵を愛せよとの教訓を活して實踐せんせば、敵の中に眞に愛し得る處のぞを見出さる可らず、神の心は乃ちこの神秘なる愛の中に存す。死せる者を活す基督の奇蹟はこの余輩の心の働きをも意味する者なり。基督は最後の大神蹟を余輩に示して曰く、父よ彼等を赦し給へ其爲す處を知らざるが故なりと。若しそれ當時の反對黨が基督の眼に悉く悪魔を映じたらむには、彼が天父に罪の赦しを請へるは彼の偽善なり。世に若し絶對的の悪魔あらむか縦や赦しを乞ふとも赦さる可きものにあらず、之を赦すせば天父は悪魔に讓歩したるもの也。咄々怪事の妥協也。余輩は斯る無意味の神を宇宙以外に驅逐せざる可らず、然るに幸にも彼の眼には自己を殺すの人を悪魔と思惟したることなく、敵人の胸中に人の子の宿れるを確認したり。敵人自身すら意識せざる大なる物を彼は觀取したるなり。勢ひ猛き敵人の獸の奥に隠れたる神我の保護を開放し自由の爲に彼は天父に罪の赦免を請はれたる也。神と基督の前には人類は皆神の子なり。唯人類が眞に其意識に達する爲にコルホルジョンを経過して罪の赦免を得れば足れり。人若し其意識に到達せんか天地は百花爛熳たり。人生はゴールデンエーヂ也。百花爛熳の天地は戦ひ勝つ瞬間にあり、黄金時代は自己を征服したる胸中にあり、故に人は生れ乍らに戦ひの子なり征服の子なり、この戦ひと征服の中に彼は光明の子たり希望の子たり得るものなり、彼は天の使と相撲を

取れるヤコブに似たり。目的を達せざれば已まざらむとす。世界は眞に神の子の修練場と謂ふ可き也。これ神聖帝國建設の第二要義なり。次は余輩の理想的國家觀なり。余輩の理想的國家は其帝王、其國民が何者にも勝りて神を敬し、理想的宇宙觀の大盤石の上に立ざる可らず、宇宙の眞意を體し、神の聖旨に合せざる國家は神聖帝國の第一要義を飲くものなり、神なき國家は個性を有せず、人權を有せず、道徳を有せざるもの也。故に彼は先づ神と合せざる可らず、而して彼は更に人類と一ならざる可らず、世界の改造の爲に存することを知らざる可らず、若し彼の存在の理由より世界を理想郷となし人類の神我を發揮するの二大主張を除き去らむか、はや彼の存在の理由は消へ去るなり。茲に於てか余輩の教會觀は移して以て理想的國家觀とするもの也。余輩の理想は政教分離にあらず政教一致なり政教合體なり。政治を俗人の手に委ね教育を俗物の手に任せつゝある間は、教會の理想は天下の日蔭物なり、神の聖旨は地上を去ること甚だ遠し。政治は元來祭事にして神の祭壇に於て行ふものなり。政治思想に宗教的思想を發揮するは國民政治の腐敗墮落を救ふて神聖ならしむる所以なり。教育の主眼にして宇宙の經濟人事の原理を教ゆるもの神の宇宙經綸の眞意を明ならしむるにあれば、神を有せざる教育は神聖と高明とを飲き、遂に無意味なる草の學、蟲の學、礦物學に墮落するならむか。教會に到りては王を教育し政治家を教育し國民



全体を教育する處なり。この教育の主眼は彼等を擧げて活ける神の子をなすに存す。彼等をして神の顯現たらしむるにあり。教會は國家の主腦なり、彼ありて國家の神我を發揮し、天父の意志を行ひ人類の幸福を増すことを得るなり。此教會は猶太教、天主教、希臘教の團體の如く思想の自由なきを許さず、亦自ら正統教會杯稱して異端征伐を快とするが如きは此教會の靴の紐を解くの資格なし。此教會の特色は天空闊大なる自由を有して健腦活識の消化力を有するに存す。釋迦も孔子もソクラテースも皆此教會に集めて彼を基督化するなり。別言すれば彼等の教理學說の缺點を捨て、其長所に依りて基督教を説くなり。此教會は古今の賢人聖者の識見と人格を殺さずして却つて基督教を以て活すなり。故に此教會に來る王は賢帝となることを得、政治家は明相となることを得、國民は擧て神の子となることを得、此教會は頑愚固陋偏見を打破し盡して公明正大宏度の人格を發揮するもの也。此教會の實現する國家は社會主義も新機軸を出して新はれ、代議政体は根本より革新せられ、貧富兩者は神の子として新なる生存となり、武と愛とは神我の發揮に依りて新なる意義を生ず。王も政治家も國民も今の者にあらず、新なる王、新なる政治家、新なる國民は此教會の産み出す處のものなり。神の人類に望む處は此教會の存在に依りて此國家に實現せられ、人類の國家に望みたる處は此教會の開拓に依りて此國家に具體するに到る。固より國家存在の機關としては教會も一機關たるものなり。然れども教會は常に主腦たるのみならず、精神なり生命なり靈智なり、故に彼は自由を尊み進歩を望み獨創を理想す。異端は凡て彼の新智識新思想の根本なり。健全なる異端は古きを新ならしむる爲に神の賜ふ天の使なり。神は自由なり進歩なり。異端は神の司るところなり。若しそれ斯る理想的宇宙觀、理想的世界觀、理想的國家觀を實現することを得

むか、モーゼの建設したるそれに勝るものあるは明かなり。何となれば斯る三大理想を綜合したる神聖帝國は、一個の英雄によりて完成せらる可きにあらず、眞に救はれたる個人人格を綜合して實現せらる可きものなればなり。故に余輩の所謂神聖帝國の建設は一個のモーゼを要せず、同胞悉くモーゼたるを要す。基督謂はずや「神の國は此處に見よ彼處に見よと謂ふ可きものにあらず、爾曹の中にあり」と、こののち「爾曹」てふ個人人格の中に神觀、人觀、教會觀を始め、宇宙觀、世界觀、國家觀は悉く綜合して大觀せらる可きものなれば、余輩は九十九の羊を残し一匹の迷へる羊を尋ねむとする牧者の心事に學び、一人たりとも眞正なる基督者を養成せんことを期せんことをす。

## 第十章 奮闘の黄金時代

黄金時代と云へば詩人のユートピアを聯想し、武陵桃源を豫想し、エデンの樂園を追想し、春風靄然、蝴蝶枝頭に夢むの其夢の中に美と眞と善との理想境を想像すと雖も、余輩の黄金時代は必ずしも蝴蝶の夢の中に存せず、必ずしも詩人のユートピアに存せず、必ずしも武陵桃源、エデンの樂園に存せず。寧ろ奮闘に伴ふ勝利と凱歌の中に存することを信ずる



●●●  
もの也。

新時代之曙光

世には一種の哲學者なるものありて、相對を全く超越したる絶對界に自己の理想論を求め、この理想論に焦れつゝあり。彼は靜にして宇宙を大觀し榮枯盛衰の外に超然として獨り悠々たる天地を樂む。印度、希臘にこの哲學者の多きを認むるものなり。彼等は相對に執着するを迷盲とし、只管絶對界の人とならむことを冀ふ。彼等は理性の批判に依りて絶對界に入らむとす。隨つて出世間的、出家得脫的、生滅死活的なるを免れず、彼等は靜を愛して動を厭ひ、山を愛して濤を厭ひ、月を愛して雲を厭はむとす。彼等は有限の中に無限を見るの明なきに似たり。無限は靜寂の外には存せざるものと見ゆ。故に彼等は動中に靜觀を樂むにあらずして、靜中の靜觀を樂むもの也。『世を捨て山に入る人山にても尙ほ憂き時は何地行くらむ』。動を避けて靜を慕ふのみならず、殊に靜中の靜を慕ふが如きは、尤もこれ病的の甚しきもの也。『悲みのあれよと今は願ふまで我世寂しくなりにけるかな』の如きは、靜中に動を求めつゝあるものにて、一見哀々の悲音を傳ふるが如きも、實はこれ甚だ積極的なるものなり。山に入りて憂を感じるの人よりも、寂さの餘り悲みを得たしと思ふ人の心は、前者の死に瀕しつゝあるに比して、後者の死より生に轉せんとするの餘情ありて、慥に基督教的なりと謂はざる可らず、山に入りて憂を感じるの人は漸々古代の佛教

新時代之曙光

病に犯されたる心理的病翁のみ。而して斯の如きは哲學を專講せんとする一種の青年の間に尙ほ勢力を逞ふせんとする病患也。彼等は厭世の極隱遁となり、遁世となりて、遂に人生を去るの歌を歌はむとす。生老病死は彼等が四大難問なり。而して之れ生活慾の存する限はその慾情に伴ふ必然の苦痛なりと謂はざる可らず、人は何が故に生存を全ふせん爲に老を厭ひ病を厭ひ死を厭ふや、これ無限の慾情に對する大打撃なるを以てなり。不死不老は生存慾の大理想なり。然るに此理想を打破して有死有老たらしめむとす、絶大の痛苦は茲に伴ふもの也。彼等は此苦痛を脱せんが爲に理性と直覺の權能によらむとす。彼等の解脫哲學は茲に不朽の根據を有するものなり。曰く苦痛は有限を脱せざるにあり、淨樂は無限に悟入するにあり。然れども無限に悟入したるが爲に生活慾を完ふしたるものにはあらず、生活慾は或意味に根絶せられて哲學的識見と信仰の中に活きむとするものなり。情慾を殺して智慧に復活せしめ、茲に變形したる生活慾を完ふせむとするものなり。然れども夫が爲に五十年の肉体の生命が百年に延ぶるものにはあらず、五十年の生命が十年若くは卅年にして斷絶するやも知る可らず、肉体の生命は依然として一筋の髪だに白くし黒くすること能はざるものなり。故に彼等は肉体の生命を得むとして却つて肉体以外の生命を得たるものなり。これ或はパンを得むとして水を得たるものにあらざるなきか。然るに彼等が一たび肉体の生命を脱脚せんとして肉体以外の生命に向つて進むや、實に驚くに堪たるものあり。大にしては釋迦の如き小にしては西行の如き、肉体の生命を完ふするの困難なるを知り、肉体以外の生命を得むとして勇猛奮進するや、彼等は親を捨て子を捨て妻を捨て、別言すれば社會を捨て人生を捨て、山と水と花と月との間に飄忽として去れるを視るなり。然



るに釋迦の如きは更に人生に立歸りて人類救済の爲に盡したりと雖も、西行の如きは全く天然を友として人生と家庭とに絶縁するに到れり。出家とは要するに家庭と人生とに絶縁するの意味を有するに似たり。彼は斯の如くして妻を愛し子を愛するを輕蔑し、人生を愛するを迷ひさせり。これ獨善主義の甚しきものにて、亦偏理主義の極端なるもの也。されど全く何物をも愛せずして生存し得るものにあらず、愛なきは生命なきを意味するものなれば、人を愛するを厭ふさせば人に代れるものを愛せざる可らず、西行は茲に於て天然を愛するに到れり。天然は彼の戀人なり天然は彼の慰藉者なり、然れども彼は天然に對して迷ひの心を歌ふたり、執着の心を寄せたり。煩悶の涙を濺ぎたり。これ彼が人生を棄て未だ全く人生を閑却し得ず、家庭を棄て家庭を忘れ得ざりし所以ならむと思はる。彼は迷を脱して實は迷ひつゝありたるものなり。執着を離れて實は執着しつゝありしものなり。彼は強き意志の人の如にして實は情の人なりき。理性の人にあらすして歌ひ且つ感ずるの人なりき。故に彼は道德家たり哲學者たる能はずして詩人なりき、これ彼が迷を脱して迷ひつゝあり、執着を離れて執着しつゝありし所以なり。斯の如くして彼は人生の勝利者たる能はずして敗亡者たることを示せり。彼は人生を後にして山水の間に逃げ籠れり。而かも人生の火宅の醜ふが人情の色彩を種々に描き出す模様を見捨てること能はずして煩悶したり。極端なる厭世的な人生觀がそれ人を害ふこと斯の如く甚しきものあり。厭世哲學の痴と愚とは茲に其怪しき姿の全体を現はしたり。これ人が人生以外、家庭以外、自己以外に生命を求むることの頗ぶる困難なる所以を示すものなり。人は自然界と我とのみに依つて生くるものにあらず、獨善主義に依つてのみ生くるものにあらざることを示すものなり。然るに茲

にこの一種の哲學者と握手しつゝある詩人なるものあり。彼は西行の如く消極的ならずして今少し積極的なるものなり。西行が田園詩人ならばこは人生詩人の一人にして現在を批評するのみならず、一種の理想を歌ふ處のものなり。彼は『さゝがきの糸につなぎし露の玉かけて飾れる世にこそあるかな』の如き、厭世哲學の痴と愚を歌ふものにあらず、彼は淵明の如く小桃源を歌ふものなり。彼はトマスムーアの如くユートピアを歌ふものなり。現世に満足せずして理想の世界を冥想して茲に悅樂を求むるものなり。彼は仲々に厭世的なれども亦仲々に樂天的なるものなり。彼は現實に泣ひて理想に樂むものなり。而してその理想は如何なるものなるかと云ふに、血を流すの戦ひは視むとするも見ざる能はず、生存競争の苦しき戦はその跡を絶ち、貧富の懸隔は均一にせられ、憂ひもなく悲みもなき樂しき別天地なりと云ふにあり。然れども余輩は斯の如き理想に對して衷心より疑問なきにあらざる也。乃ち絶對的に競争を止むることが自然に叶ふものありや、亦絶對的に貧富の均一を行ふことが果して天然の法則なりや。余輩は自然の産物なる身體に就て之を考ふるに、一方には梅ヶ谷の如き肥大漢あれば、一方には小人島の大統領の如きものあるなり。一方には秀吉の如き智者もあれば、一方には其子秀頼の如き非智者もあるなり。自然は差別を是認し差別は自然の約束の如く認めらるゝ也。既に差別が自然の約束にして自然は直ちに



差別を意味する物とせば、強て之を平等ならしめむとするは決して自然に合するものとは云ふ可らず、而して此自然の約束には左右す可らざる鐵則ありて、身体の肥瘦大小の如き智能の賢愚淺深の如きは、絶対に平等たらしむることは空想の甚しきものにて、到底この自然の現象を人智を以て左右すること能はざるものなり。カールコックスもこの真理は認めつゝあるなり。而かも程度を附して或程度まで平等ならしめ均一ならしめむとせば、その程度迄は作爲を以て進み得ることを認めざる可らず、若し國際公法が完成せられて國際裁判に依らむか、血を流す戦争は或程度迄は禁止せらるべし。亦教育の普及の如きも國家の干渉と保護と社會主義的理想の實現に依りて或程度迄は實現せられて愚者の多數が賢者となることを得るならむ。貧富の懸隔も或程度迄は平等となるを得む。而かも自然の差別を夫によりて絶対に打破することを得るや、打破し得ることも果して夫が人類生存の意義なりや、余輩は打破し得ざることを確信するのみならず、打破し得ることを以て生存の意義なりとは思惟する能はず、余輩は哲學の歴史を讀みて哲學説の未だ悉く同一なるものあるを見ず、繪畫彫刻の中にも作者の趣味と理想と伎倆の如何に依りて非常なる傑作を見るなり。故に哲學の中にも美術の中にも作者の個性は發揮せらる。こゝに個性の差別を見るのみならず、識見と伎倆の差別を見るなり。而して是等の差別は直に生存の差別にあらずや、是等の差別の存する處には識見の相違あり伎倆の競争起らざる可らず、然らば絕對平等は人々との間には完ふする能はざるものにして、唯差別を是認したる平等のみ完ふし得る處のものなり。されば生存競争も或程度までは認せざる可らず、貧富の差別も或程度までは否認する能はざるべし。若し果して然らむかその生存競争に伴ひ、貧富の懸隔に伴ふ不平等は漸々之を排除し能はざるを如何

にせん。茲に於てか經濟問題に及ぼす影響も差別を認めたる平等ならむとす。乃ち働くものが握る處の紙幣に到つては其紙たるに於て別なしと雖も、或者には白銅一個を多く與るの已む能はざるものあらむ。唯此差別を打破し得るものは平等の哲理以外に、仁愛の力ありて好く平等の哲理を生命あらしむとするも、而かも仁愛の力は悉く平等なるかと云ふに、戀に上下の隔てなしと云ふ如くには都合好く往かざるもの多し。愛にも自他の差別ありて自己の權利と幸福とを犠牲にして、他人の權利と幸福とに供獻せんとするは、人生の最大美事たるに於て否む能はずとするも、此場合の問題はその犠牲を行ふ者が苦痛なく之を行ふことを得るや、亦は苦痛を感じつゝ行ふやの差異の如何に存す。愛にも苦痛なくして行ふ愛あり、苦痛を忍むで行ふ愛あり、犠牲の如きには多少の苦痛は伴ふものならむ。縦や苦痛と云ふ程のこゝろを感せずとするも、愛に依りて行ふ物には既に其内に差別を含むこととなり。この場合の貧富均一主義はその根本的見地に於て一種の慈善的社會主義なりと謂はざる可らず、才能に於て劣れる者が優れる者に向つて自己の權利を笠に着て貧富均一を主張する如きは宇宙の鐵則を蹂躪する者と謂はざる可らず、些少たりとも差別を認め個人



の不均一を認めたる以上は、恰も一と二の干係の如く同一平等を其間に観取すること能はず、程度に於ては一と二の差別はあれども、種類に於ては同一平等なりと云ふ位のものにて、絶對平等、絶對均一の如きは理想するに既に大々の背理なりと謂はざる可らず、然れども或程度迄の均一平等は理想し得る處なるのみならず、其理想を實現することに努めざる可らず、世界の歴史は常に或程度の理想を實現しつゝある一名理想發展史なりと云ふことを得べし。男尊女卑の時代、奴隸賣買の時代、專制政度の時代に比すれば今日の社會は或程度迄の人權統一は成就せられつゝあるを見るなり。併し絶對平等は億萬年を期するも實現せらるるものにあらず、既に些少たりとも生存の差別、個人の懸隔を認めたる以上はこの平等ある差別の上に組織せらるる經濟制度が、慈善の意味を含まず、優者の犠牲を意味せずして、全く平等たり得るものにあらずることを認めざる可らず、乃ち甲に壹圓の日給を與へ、乙に壹圓拾錢の日給を與へれば、一年には卅六圓五十錢の差を生ずることになり、十年には三百六十五圓の別を見るに到る。茲に富の差別を生じ富の差別は直に貧富の懸隔を化すなり。貧富の懸隔はこれ生産の不平等に外ならず。故に差別を意味する平等の甚だ無能力無權威なることを認めざる可らず、さればさて差別を意味せざる平等は悪平等にして既に存在の價值あるものにあらず、茲に於て一種の詩人が理想するユートピア、貧争なく貧富なき空中樓閣の實現は、決して多望なりと云ふ可らず、唯社會の歛陥を救濟せんとして思惟し瞑想せられたる、一種の空想郷に外ならざるが如く觀取せらる。

然らば茲に一種の哲學者以外、一種の詩人以外、一種の宗教家なるものありて、神の國を實現せんとする其神の國の理想と現實とは如何なるものならむとは、余輩の更に進むで研究せんとする處のもの也。余輩は基督教に云ふ處の神の國が、かの一種の哲學者の絶對的厭世觀、若くは一種の詩人の絶對的平等觀の如き兩極端を否定するものあるを疑ふ能はず、神の國は厭世的にあらずして奮闘的なり。随つて哲學的にあらずして倫理的なりと謂はざる可らず、クリスチャンは迷と云ふ語を好むで用ゆるものにあらず、迷の文字に換ゆるに罪惡の文字を以てするもの也。迷は智識によりて開くことを得べしと雖も、罪惡は意志によりて奮闘して征服するものなり。迷とは如何なるものなるかと云ふに有限なるもの變化あるものに執着して、夫以上に脱脚し得ざる状態を云ふものに似たり。故にこの迷の状態を脱脚するの道は無限なるもの、變化せざるものを識認するにありと爲すに似たり。これ一種の解脱法にして轉迷開悟の秘訣ならむと雖も、その有限變化の中にも無限を見出し得ざるものにあらず、田園詩人が一枝の草花の中に造化の大能を認むるが如き、乃ちその一なりと謂はざる可らず。プレート一流の學者は人類を以て墮落したるイデア乃ち精神が、地獄乃ち肉體の中に宿れるものなりと云ふ。肉體を以て地獄と觀する如きは、例の厭世的口吻にして亦事實に近からむと雖も、戀の捕虜となりて下界に墮たる久米の仙人にも美質あるが如く、下界の物となれるイデアの中にも千古の天質を有するものあらむが、有限の中必らずしも無限を見得ざるにあらず







ひとするや、自然を超越し、自然を叱咤し、自然を鞭撻して獨自一己を行はずむば已まず。何人か宗教、哲學、文藝の歴史を繙讀して、史乘の人物が自己の個性と天分とを重むじて、自己の天地を開拓するに忠實ならざるもの殆むと見る可らざるにあらずや、史乘の人物は皆個性の人なり天分の人なり獨自一己の人也。個性は奮闘す可く産れたるなり、活劇を演ず可く産れたるなり、個性と天分より見たる世界は常に戦國時代なり。奮闘し活劇して一寸の土地を取れば一寸の開拓をなせるものなり、哲學に於ても文藝に於ても皆然るにあらずや、故に個性と天分を重むするの主義は亦これ一種の英雄主義なり、天才主義なり。彼は恰もヨブの如し我れ敗北せば神の敗北なりと思ふが如し。自己に忠實に自己の天分に至誠なるものは、敗北を賭すこと能はず、常に成功せざる可らず、殊に善の意志を重むじて惡に對して奮闘を試みむとするや、一寸の土地を取れば一寸の將たるの覺悟を要し、一個の健兒たり無名の英雄たる覺悟を要す。廣き意味に於ては人文發展の歴史は、地上に於ける神の國の發展を意味するものなり。哲人の開きたる國にもこれを見ることを得、文藝家の開きたる國にもこれを見ることを得、雖も、嚴正なる意味に於ての神の國はこれクリスチヤンの拓きたる國に外ならず。而して此クリスチヤンの神の國は意思の中に存し、亦意思に依りて拓く處のものなり。萬人の心の世界を稱して靈界若くは精神界と云ふ。この精神界や光明の側面より見れば頗る進歩發達したるか如きも、暗黒の側面より見れば光明のいや増す處に暗黒のいや増すを認めざる可らず。恰も基督の如く心清ければ色情を起すを以て、直に姦淫を爲せるものと觀するが如し。余輩は混濁の世に我獨り澄むと思惟したる古人や、首陽山の伯夷叔齊を懷ふものにあざれども、人類の精神界が罪惡の疾風赤塵耳目を掩はしむるものあるを

見れば、自己の弱きを思はざるもの殆むと稀なりと謂はざる可らず、余輩は哲人の國、文藝家の國の外に、斯の如き混濁の國あることを知らざる可らず、哲人は哲學に依りて自己の理想國に登り、文藝家は詩と彫刻と歌と繪畫との羽翼を張りて自己の理想郷に到るに拘らず、この混濁の人は善と惡との暗闘默劇の生涯を脱脚する能はず、地獄より煉獄に進み、進みては亦退き、浮沈常ならざる生涯を送るを見れば、誰かこの煉獄と地獄を開拓して神の國を建設するものなくむば、人生の悲慘これより大なるはあらず可し。昔のフロレンスの人はダンテを稱して地獄より來れる人を見よと云へりしかや、余輩は桃太郎が鬼ヶ島を征伐せる如く、眞に地獄征伐を爲し得る新人を慕ふもの也。この人は先づ自己の中に於ける地獄や煉獄を征服して天國を建設し得たるものならざる可らず、余輩の意志の中には地獄あり煉獄あり天國あるものなり。故にこの意志の戦の勝利者こそ地獄征服の勝利者たることを得るなり。ダンテの神曲はダンテ自身の意志の進歩向上の實驗を歌ふたるものにあらずや、地獄より來れる人の天國に到れる意志の苦闘戮力は、將にこれ人生の神曲なりと謂はざる可らず、聖オーガスチンの生涯、聖フランシスの生涯、聖ポーロの生涯、これ皆人生の神曲にあらざるなきか。余輩は斯の如く人生の創作する個性發展の神曲は、亦直に人生それ自身が雄大なる神曲の未成品たるを信するもの也。ミルトンの樂園回復は人生の神曲たることを證明するものにあらずや、エホバに反旗を翻へすサタンがアダムエブを陥れて樂園を占領してより人生は將に天魔曲と化したるに、ナザレのイエスによりて樂園回



復の大業は成就せられて、人生は一大神曲たらむとするに到れり。個性ある人が罪惡を悔改めなば天に於て悦びありとは、個性の神曲が直に人生を神曲となすの一大秘義を示すものにあらずや、余輩は曾つて内村鑑三氏がゲーテの人物よりもダンテの氣品を尊重すと評したるを聞けり。『彼は學識に富みしが故に其の弊はやゝ自から居ること高く昂然人を凌ぐ風ありき。且つ哲學者には有り勝のことなるが令色乏しく、能く凡庸の人を容るゝ道を知らざりき』と、フロレンスの編年史の大家にして、ダンテと時を同ふせしジョバンニ、グイラアニの評したるを見ても、靈的奮闘の人たることを證明して明白なり。個性の人は自己の神性的自我を過重する人なり。彼の神權はこの自我なり。この自我は社會の罪惡の爲に迫害に遭遇することあり、而かも奮闘して天に到らざれば已まず。彼は樂園回復のナポレオンなり。ネルソンなり。余輩は此神性的自我に忠實至誠なるものゝ性格に眞の超人を追想するもの也。世の人はこの世の智慧に富み光の子は暗黒の子よりも愚かなり。世の智慧に富みたる人は平凡の子なり。光の子の愚を全ふし得るものはこれ超人にあらずして何ぞ。余輩は時代を超越し、時流を超越し、而して自己の理想國を建設する個性の中に超人を見ると共に、苦闘奮闘して血を流すに到るまで地獄征伐を行ふものに、更に熱誠ある超人の面影を見るなり。個性ある人はこれ意思の人なり、意思の人はこれ奮闘の人なり。

## 新時代の曙光

## 新時代の曙光

奮闘の人はこれ向上の人なり。向上の人はこれ天國の人なり。基督が爾曹の中にありと云へる天國は、その基礎一個の爾てふ個性の中に有するにあらずや、神の國の基礎は神の子たる超人を全ふするに存す。然れども之れ唯基礎なり。神の國は爾曹の内にあることを知らざる可らず、個性の中に存するのみならず、個性の集合したる國體の中に存するなり。個人の集る處は三人と雖も一種の社會なせるものなり。茲に於て奮闘の子は調和の子とならざる可らず、戦の子は平和の子と成るの必要あり。罪惡の戦に打勝てる神の子は互に握手して平和なる社會を造らざる可らず、生存問題は茲に一種の社會問題となりて現はれ来るなり。假に全く趣を異にしたる奮闘に難き弱き人の子あらむか、奮闘の子は自己の血と汗とにて運命を開拓するのみならず、聖忍不拔の意志を以て地獄の征伐を行ふと雖も、弱き人の子は奮闘し得ざるのみならず、地獄の鬼となるもの多しとせば、奮闘の人は勝利者たり得るに拘らず、弱き人は敗北者たらざるを得ず、この勝利者たる強き人と敗北者たる弱き人とは如何なれば現在するに到れるか。人格の神は個性ある人を造れるに事實は個性なき人の多きは如何なる結果ならむ。個性なき人は人生の敗北者たり所謂弱者たり賤民たり。これ唯弱者の罪のみ云ふ可らず、弱者の多數は如何にして現はれたるか。これ無生産の結果、無教育の結果にあらざるなきか。余輩が熱心に高調する奮闘の福音は、少數個性の喝采を博する福音にして多數の個人は戦慄するの福音にあらざるか。乃ち戦に勝利を得つくある者は喝采を試むると雖も、敗北者は戦慄を覺ゆるの已むを得ざるものあるべし、されば此個性なき賤民、弱者、敗北者を個性ある人物となすには、唯奮闘せよと



教ゆる外、別に何等かの活路あるにあらざるなきか。余輩は茲に於て趣味深き評論を掲載するの必要あり。一は時代思潮の時評記者と一は平民新聞の世論記者との間の批評の交戦なり。掲げて平民新聞四五號にあり。曰く

犛牛生と名乗る人『時代思潮』第七號の紙上に於て『火の柱』を評し、『卓然として流を抜くと數等』と賞賛し、然れども其主人公を以て『無性格的人』なりと爲し、是れ其著者が『保持する社會主義そのもの、結果也』と云ひ、大いにニーチエ、イブエン等の個人主義を唱道せり、曰く

△社會主義の「理想」は何ぞ、曰く無恒産の賤民の全能即ち是れ

△「思ふに社會主義は唯物主義の變形なり、資産と衣食との最上を認むるの主張なり」

△「社會は個性と人格とを無にす、これ生命なきなり、「人」なきなり」

△「是に於て吾人は飽く迄も個性主義を主張す、自らの心靈の道義的發展に於て神國の出現を覺信する個性主義を主張す」

△「社會主義の敵は資本主義にあらず帝王にあらず國家にあらずして、實にこの個人主義たるべき也」

△シルレルは「美しき個性の發展を理想としたり」、エギターの「主義は自己の全能と自己の權威の無限なる是認也」

△「ニーチエは先づ現代の凡俗の社會を痛罵したり……、世は今や小さき者、弱き者、蚊の如き者の多きに堪へず

張す」

……此の如き俗塵に於て、しかも光明に憧る、吾人の心靈を如何せん、是に於て乎「超人」即ち現はる、超人とは……神性的個人に外ならざる也、……彼は聖者也、藝術家也、彼は創造者なり」

△「イブセンも亦凡俗の世に戦へり」、彼れの著「社會の敵」の主人公ストツクマン大に民衆の態度を痛罵して曰く「予輩は信ず、多數を形成するものは愚昧の者也、愚者賢人を支配す、これ何事ぞや……少きものは常に正なり」

△吾人の心靈は道義的なり、光を望み、智慧を願ひ、美に憧る、あゝかの愚蒙なる民衆の全能を主張し、肉と衣と食

との前に跳き、心靈の聲を殺して卑情と可憐の福音を説く所謂現代の社會主義、吾人に在りて何するものぞや」

是れ其大要也、而して最後に曰く

△「然れども讀者よ、吾人は社會主義に對して殊に之を云ふものなす勿れ、吾人は現代のもろくの體制、教育、倫理、社會の制度、更に學者の態度を憎む、彼等は凡て無性格の人を作るものなればなり」

此の最後の一節に於ては吾人亦全く犛牛氏に賛す、今の形式的なる、強制的なる教育倫

理及び國家制度等に對しては、犛牛氏等の攻撃眞に其の當を得たりと云ふべし、然れども

社會主義に對する攻撃に至りては、全く其的を誤れるを奈何せん、思ふに是れ眞に善く

社會主義を理解せざるに依るなり、犛牛氏等の唱ふる個人主義は、曩に本紙第十九號に

寄せられたる久津見藤村氏の説と其出處を同じくするものにて、畢竟個人的無政府主義

に外ならず、當時吾人は之に對する吾人の明白なる意見を陳じ置きたり、今其要點を再

第十 奮闘の黄金時代

百七十九

新時代の曙



記すれば左の如し

△「個人的無政府主義は又哲理的無政府主義と呼ばれて居る、其根本の哲理は一人は人に依つて支配せらる可らず、我々は個人の完全なる自由を得ざる可らず」と云ふ個人主權の説である、之に對して社會主義者は思へらく、人は生れ落ると其まゝ此社會の一員であるので、何人とも此責を逃れる事は出来ぬ、故に社會主義は此事實の認識から出發するのである、然るに個人主義者は徒らに此事實を拭ひ去らんとして、自己の幻影に對して無益なる煩悶苦悶をして居るのである、社會主義と無政府主義との差異は斯くの如くであるが、然し其究極の理想は同じく個人の自由にあるので、社會主義者の考ふる所に依れば、社會主義は無政府主義よりも更に多くの自由を個人に與ふるものと信ずるのである」

△「嚴村君の理想甚だ善し、吾人の終局の理想も亦殆んど之に似たり、社會主義を推及すれば無政府主義に歸せざるを得ず、然れども今日の思想界に於て無政府主義に二派あり、一は共產的無政府主義にして一は個人的無政府主義なり、兩者其極致に於ては相合すべきも、其の之に達する道途に於ては立脚點甚だ多く異なる者あり、嚴村君は何處までも個人的なり、吾人何處までも共產的なり、社會的なり、故に其理想に於て大差なしと雖も、今の世に處するに於て大いに異なる者あり、吾人を以て君を見れば、君は其理想に達する道を求めずして徒らに其理想にあこがれ、其理想にあこがるゝが爲に其理想に達するの道を毀つものゝ如し、吾人終に其の可なるを見ざる也」  
吾人の意見は畧之に盡きたり、されど翻つて少しく犛牛氏の言を評せんに

△氏は「無恒産の賤民」と云へど、吾人の理想には「恒産」なる者なく、又「賤民」なる者なし、只共有の財産あり、平等の人民あるのみ

△氏は「資産と衣食との最上を認むるの主張」と云へど、吾人は必ずしも「最上」とは云はず、只資産充實して衣食の憂なきに至らざれば人は決して自由なること能はずと謂ふなり

△氏は「社會は個性と人格とを無にす」と云へど、吾人の理想の社會に於ては決してさる事なし、吾人の理想の社會に於てこそ始めて眞の人格を發揮するを得べきなれ

△氏は「個性主義を主張す」れども、如何にして「心靈の道義的發展」を遂げ得べきか、如何にして「美しき個性的發展」を遂げ得べきかを説かず、「社會主義の敵は實にこの個人主義」たるべけれども、個人主義は社會主義に依らざれば其目的を達すること能はざるべし

△如何に「超人」現はれ、「聖者」現はれ、「藝術家」現はれ、「創造者」現はることも、多數人民が餓に泣くの時、如何にして其の「光明に憧るゝ心靈」を満足せしむるを得んや

△イブセンは、多數は愚昧なりと云へど、吾人の理想する社會に於て、各人皆高等の教育を受くるに至らば、多數は決して今日の如く愚ならざるなり、強いて貧富の階級を設け、多數の貧者には教育を受けしめずして、而して多數は愚昧なりと云ふ、是れ豈に聞くべきの言なる乎、吾人雖も天才（或は大才）の出現を信ぜざるに非ず、然れども何人が果して天才なるか、我は天才なりと言ふ者（或は信する者）が果して眞の天才なるか、吾人は知らざる也、故に



吾人は謂はゆる天才の跋扈（或は専制）に服従すること能はず、吾人は猶多數の常識に従ふを以て安全なりと爲す也、  
 「少き者は常に正なり」とは、今の不完全の社會に於ける、才人の矯激の言ならんのみ  
 △吾人の心靈も亦道義的也、吾人も亦光を望み、智慧を願ひ、美にあこがる、只之を望み、之を願ひ、之にあこがる  
 るが故に、今の少數專制の社會を毀ちて多數の自由を得んと欲する也、今の社會こそ「肉と衣と食との前に跪く」者  
 なれ、吾人の社會主義は肉と衣と食との自由を得んと欲する者なり、此自由ありてこそ始めて眞の「心靈の聲」を掲げ  
 しむべきなれ、「卑情の福音」とは何事ぞ、吾人は卑情より脱するの福音を説きつゝある也

吾人の見る所それ斯くの如く個人主義と反對せり云々。

之れ余輩の尤も興味深く讀過したる處のもの也。個人主義は恰も奮闘の福音なり。社會主義は恰も平和の福音なり。而  
 して之れ調和し得ざるものにあらず、基督は平和を求むる者は福なり。其人は神の子と稱へらる可ればなりと謂へり。  
 平和は理想なり求むるは現實なり。平和を求むる處に奮闘あり個性あり血あり涙あるもの也。社會主義は人類の幸福を  
 理想し寂光淨土を直に地上に建設せんとするものにて、隨に聖人の理想たり大人の道たることを確信すも、其運動方  
 法に到りては余輩の賛同ある能はざるものあり。彼等の運動は稍もすれば藩旗竹鎗的なり。随つて所  
 謂愚民を煽動して非常手段を顧みざるが如き聯想を催ふせしむるものあり。紛々擾々は常  
 にデモクラシーに伴ふ弊害なり。佛國革命の無意義は乃ち茲に存するものなり。余輩は人  
 類の幸福と平和の爲に革命を歌ふことを躊躇する者にあらず、而かも其革命は愚民、賤民、

弱者、敗北者の喧々囂々によりて萬丈に蹴立つる黃塵を尙ほ低しとする如き、一揆暴徒の  
 煽動的輿論に動かされて全ふせらるゝが如きは余輩の所謂革命にはあらず、かのオルゾオ  
 ルスが自由、平等、友愛の名の下に佛國革命の起るや、非常なる興味を以て觀察に出發し  
 たる由なれども、亦非常なる失望を以て歸來せりと聞く。多數の愚民を煽動せる運動は常  
 に斯の如きものなり。社會主義の理想する夢の國を實現しなば、愚民や賤民の存在を見ざ  
 るべしと雖も、目下の社會は愚民と賤民の多數を占むるものなり。而して煽動的社會主義  
 者は其罪を悉く一部の階級に歸せんとするもの也。渠等は富者は賤民の敵なりと云ふ。渠等  
 は未だ事實に於て藩旗竹鎗を揮はずと雖も、渠等の言論は藩旗竹鎗的なり。渠等は斯の如  
 き言論を弄して智力なく意力なく情力なき愚民を煽動して何事を爲さむとするか。乃ち輿  
 論を造らむとするにあらむと雖も、輿論は騒々擾々のみ。騒々擾々は余輩の尤も厭ふ處の  
 もの也。渠等愚民は社會主義者の理想を眞に領解してその精兵たることを得るか。渠等は  
 到底野豬的なり突飛的なり、人としての圓滿なる資格は渠等の有せざる處なり。人として  
 は智育情育の不具者なり。社會主義者は此智育情育の不具者は社會組織の造る處なりと云  
 ひ、尙ほ進むでは貴族富豪を火事場泥棒なりと叫ぶ。余輩は弱者敗北者に同情するの餘り  
 に貴族富豪を公盜呼ばりを爲すは、社會主義者の一種の繼兒根性の結果にして必ずしも正



新時代之曙光

當なる見解なりと云ふ可らず。富者にも缺點あれば弱者にも缺點ありて貧富兩者の懸隔を生じたることを否む能はず、要するにこれ社會の罪なり。俱にこれ個人の罪と云ふ可きにあらざる可し。然らば一種の社會主義者の言論の如く貧富兩者の意思感情を分離せしめて、反感を煽揚せしむる如きは殆むど惡感に堪ざらしむるもの也。故に余輩は社會主義の理想に向つては多大の同情を有するに拘らず、同主義者の言論に向つては寸毫の同情を表する能はざる所以也。若し幸にして今の社會主義者が西川某の如き言論を試みずして、矢野龍溪氏の如き態度と言論とを以て活動を試みなば、天下の賛同を得ること今日に百倍するならむと信ず。西川某の如きは青年赤熱の徒にして愚民煽動の急先鋒なり。その熱情は悦ぶ可しと雖も天下の大勢は彼一流の言論に依りて動くものにあらざる可し。要するに聖人の理想大人の道を講せんとする社會主義者は今少し言論の武器を用ゆるに慎重ならざる可らず、殊に渠等の運動方針は一世の紛々擾々を醸すのみにて、實質の成功は萬人の疑ふ處のものなり。余輩靜に懷ふに基督教徒の精神的運動は、渠等の爲し得ざる處のものを爲すの覺悟なかる可らず。乃ち神の國の理想の實現はその最大主眼なりと謂はざる可らず。神の國を主觀的方面より觀察すれば、人の子は天父を愛し天父は人の子を愛みて愛に依れる神人合一の妙趣を發揮する、乃ち夫なりと謂はざる可らず、而して更に客觀的方面より觀察すれば君民共和の國體を意味するものにて、君主は慈父の如く國民は赤兒の如し。仁義に依れる君民の合體

新時代之曙光

はこれ國體の精華なりと云ふ可きなり。余輩の日本魂は直に天國魂の具體的實現ならざる可らず。所謂神人成りて世に降ると形容する程に天父が人類を愛し給ふ如く、國君は國民の平和幸福の爲には王位を忘れて愛民の大道を講ずるの人ならざる可らず。余輩宗教家の大使命は此國民の教育に存するもの也。神の國の政治的實現は獨り國君の人格如何に存す。固より輔弼の臣の補佐するあり、國民忠良の代表者ありて國君の政道を翼賛すも雖も、我國體の首腦は皇室にあり。國君聰明ならざれば治道明かならず、治道明かならざれば國民幸福なる能はず、茲に於て國君は暗君を許さず、歴代の國君は聰明英智寛仁大度ならざる可らず、教育の結果は斯の如き賢君を養成することを得べし。今や世界列國は殆むど一人の暗愚の皇帝を有するものなし。皆賢君明敏の譽れあり。これ列國皇室が社交教育の産物なりと謂はざる可らず。我皇室に於ても列國皇帝の一般の程度にまでは進み得ざるにあらず、然れども一般の程度以上に大理想を實現せんせば、世界列國皇室の社交教育以上の精神的理想教育なかる可らず、この神聖なる最高教育の任に當るものは、天意人道を講習する蓋世の識見ある宗教家預言者ならざる可らず。試みに猶太國王ウヅヤ、ヨダム、アハズ、ヒゼキヤの時代に於て、モーゼとキリストの中央期に於ける最大預言者イザヤが、天よ聽け地よ耳を傾むげよと叫びながら、帝王教育に當りたる千古を空ふする高風清節を仰ぎ見よ。宗教家預言者の帝王教育の使命は輿論の指導者たり、理想的政治の實踐家たり、國民幸福の擔保者たる大責任を全ふせしむるに存す。皇帝は千古を空ふするの聰明と意志とを要す。余輩の畏友吉田清太郎氏は京都の鐵眼和尚を評して、彼は皇帝を擲るの權能威力あ



りど。皇帝を鞭撻勵精して理想的大人格たらしむる宗教家預言者は、今後の我邦に於て愈必要を促しつゝありと謂はざる可らず。余輩は曾つて大阪タイムスに寄せて左の如く論じたることあり。

今茲に突飛皇帝が立つて現在の社會制度を破壊して資本公有、土地國有の夢想を行はんとせば、新聞記者の多數は大反對であろう。代議士の多數も反對するであろう。故に時代の思潮より百尺竿頭一步を進めたる、大理想を社會に行はむとせば君主獨裁に限るものである。反對を恐れては理想は行はれぬ。自己を信ずるのみである。自己を信ずるのが生命である。此場合に於ては此突飛皇帝は中々の壓制家である。自己の理想の爲に民衆多數の意見と衝突して、その意志を蹂躪することを辭せない。その弊害は頑迷固陋の獨裁君主の陥る處と餘り相違はないやうに思はれるが、唯皇帝が自我のみを行ふのこゝ、國民の幸福を達観して試むるのこの相違がある。前者の專制は理想の敵信仰の敵であつて、後世子孫に阻はるべきものである。然るに後者の專制は理想信仰の産物であつて、後世子孫が百歳の下始て其眞意を領解す可きものである。故に皇帝は時には壓制をも厭はない、專制をも顧みない、自信と威力を持たねばならぬが、その理想信仰は大に注意を要する。眞に公明正大なる理想信仰にあらば直にその理想信仰を行ふの勇氣が欲しい。君主が輿論にみ動がされて政治を行ふやうであつては、到底駄目である。彼は輿論に先むじて理想を行ふことが大切である。輿論に動かされて始めて新理想を感得するが如き君主は暗君であつて、も話にはならぬ。君主獨裁の大君は千古の明君にして始めてその資格ありと云ふ可きである云々。

今の帝王は列國共に輿論に動かされ、而して己を得ず政治の改善をなし、國民の聲に聞くの傾きあり。これ帝王教育の缺如せる證明なりと謂はざる可らず。天下の帝王は此位の程度迄は何人も進み得るものなり。而かもこれ以上には容易に進み得ざるものなり。余輩はかのサボナローラの一代の英風を仰がざるを得ず。フロレンス侯を戦慄せしめたるものは彼にあらずや、彼れ若し始めより帝王教育に従事することを得ば、フロレンスは非常なる幸福を得たるならむ。我邦に於ても社會主義、無政府主義、漸く一種の思潮を造らむとするの時、帝王教育の必要は更に一層の急を告ぐるの傾向あり。而かもこれ容易の事にあらず、弱者に無量の同情を表すると共に強者の強者たる所以を領解し、加るに貧富兩者の階級を超脱して天國の意義を明にし、我邦を地上の理想國たらしめむとせば、これ偉大なる個性の奮闘の結果始て來るものなることを知らざる可らず、これ理想家の健闘を意味し宗教家預言者の奮闘を意味す。彼は強弱兩者を反目嫉視せしめ反問苦闘せしめずして、平和を來らせむが爲に奮闘す可きものなり。此偉大なる個性は理想家となり宗教家となり預言者となり詩人となり藝術家、創造家となりて、人類の苦痛を一身に背負ふて奮闘するものなり。偉大なる個性の奮闘と悲痛とは樂園を回復し、地上に天國を來らす救ひなり光なり生命の力なり。基督の所謂爾曹世に在りては憐れを受けむ。されど懼るゝ勿れ我既に世に勝てりとは、此偉大なる個性の凱歌にあらずや、平民新聞の所謂弱者相結びて強者に當ると云ふ如きは、偉大なる個性奮闘を無にせんとするもの也。而し







百九十

りは大なる者となるなり。これ強者が神に依りて小なる者の大を識認したる結果なりと謂はざる可らず、若し幸に現代の所謂強者が基督イエスの精神、釋迦の氣魄を玩味咀嚼して救世的勇猛心を起すことを得ば、血を流さずして現代の社會を革新すること難きにあらず、余輩は天國の大理想を考る時に個性の圓滿なる發達は強者の犠牲とその救済とに依りて全ふせらるゝことを確信するものなり。然れども強者が個人の大を認めて自から進むて大犠牲を試み平和を幸福を實現する理想郷を造らむとせば、これ一朝一夕のことにあらず、言論の鼓吹と共に精神教育の力に俟たざる可らず、この直接教育の任に當るものは余輩宗教家ならざる可らず、彼は元來帝王教育に當り富豪教育に當るの天職あるもの也。而して理想の天國を實現する迄は奮闘の生涯を送らざる可らず、厭世家も奮闘す可し、詩人も奮闘す可し、理想家宗教家の如きは更に大に奮闘す可し、奮闘の中に黄金時代は來りつゝあるもの也。

新時代の曙光終

明治三十八年十一月十五日印刷  
 明治三十八年十一月十八日發行

新時代の曙光與付

著者 西内藤男

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地  
 福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地  
 村岡平吉

印刷所 横濱市山下町八十一番地  
 福音印刷合資會社

不許複製

定價金三十五錢

郵稅四錢

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發行所 警醒社書店

(電話新橋一五八七番)